

岩手県埋文センター文化財調査報告書第26集

# 川向Ⅲ遺跡発掘調査報告書

畑地帯総合土地改良事業関連発掘調査

(昭和55年度)

(財)岩手県埋蔵文化財センター  
岩手県二戸土地改良事業所

# 川向Ⅲ遺跡発掘調査報告書

畑地帯総合土地改良事業関連発掘調査

(昭和55年度)

## 序

岩手県内における農業基盤整備事業は、県南・県中央部を中心とする水田大圃場整備と県北部を中心とする畑作整備事業に大別されます。これらの農業基盤整備事業は、食糧自給から移出を目指す本県にとって農業生産力向上の為必要とする所であります。

しかし、一方においては、この事業が広い地域を対象とする事から、多数の遺跡が一挙に消滅することも事実であります。岩手県が遺跡の宝庫といわれてもその数には限りがあり、開発との調和を図らない限り、近き将来遺跡が絶滅する恐れさえあります。

本調査にかかる事業は、畑地帯総合土地改良事業で、九戸村を中心とする農業基盤整備で対象地に存在する遺跡は25ヶ所を超えるものであります。幸い、岩手県二戸土地改良事業所・県教委文化課のご努力と、地元関係者のご理解によって、遺跡の大部分は工法等の工夫によって保存の見通しがつき、一部記録保存となり、昭和55年度より発掘調査を行った所であります。

九戸村における遺跡調査は、岩手大学草間教授による田代遺跡の調査を含め数ヶ所のみで、遺跡の占地等未知の部分が多く、予測しがたい所があり調査が難航いたしました。

調査の結果、縄文時代晩期フラスコビット群・同時代同期竪穴住居址・平安時代竪穴住居址の遺構が検出精査されております。これらの遺構はいずれも、九戸村の歴史説明への手掛かりのみではなく、県北部ひいては日本における縄文時代の歴史説明の手掛かりとなり得るものと考えております。

本調査にご協力下さいました関係各位に対し、心からお礼申し上げますと共に、本報告書が斯界の向上のため役立つ事を祈念いたしております。

昭和57年1月

(財)岩手県埋蔵文化財センター  
理事長 新 里 盈

# 例 言

1. 本報告書は岩手県九戸郡九戸村大字伊保内字川向地内に所在する川向Ⅲ遺跡に対する発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の遺跡名は、県教委文化課の遺跡登録台帳では伊保内館Ⅴ遺跡となっているが、伊保内館跡の範囲外であることと、所在地が「大字伊保内字川向」であることから、小字名を頭に冠し「川向Ⅲ」遺跡と改称し、県教委文化課の登録台帳にもその旨明記している。
3. 本遺跡に対する調査は、畑地帯総合土地改良事業に伴う事前緊急調査である。調査は岩手県農政部農地開発課・二戸土地改良事業所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県埋蔵文化財センターが調査を担当した。
4. 現地での発掘調査は昭和55年9月30日より開始され、同年12月1日に終了した。その後、引き続き室内整理作業に入り、昭和56年3月25日迄続行した。
5. 調査面積は当初2,000㎡であったが、遺構の分布が西方へ若干広かった為に協議を経て、実際には2,600㎡の範囲を調査した。
6. 野外調査と室内整理は当埋蔵文化財センター職員吉田 洋 と高橋与右エ門が担当した。
7. 石器の石質鑑定は岩手大学教授 橋 行一に依頼した。(敬称略)
8. 発掘調査では九戸村役場・九戸村教育委員会の御協力を賜わった。
9. 本遺跡での検出遺構は次の通りである。

住居址	5棟	(内縄文時代2棟・平安時代3棟)	ピット	65基
住居址状遺構	2基			

10. 本報告書の執筆分担は次の通りである。

Ⅰ. 調査に至る経過	瀬川司男
Ⅱ. 野外調査と室内整理の方法	高橋与右エ門
Ⅲ. 遺跡の位置と周囲の環境	高橋与右エ門
Ⅳ. 地形・地質	高橋与右エ門
Ⅴ. 検出された遺構と遺物	吉田 洋
Ⅵ. まとめ	高橋与右エ門
Ⅶ. さいごに	高橋与右エ門

11. 本報告書の編集・レイアウトは高橋与右エ門が担当した。

12. 現地調査では次の方々の御協力を得た。

松ヶ平市太郎	及川治三郎	立原信幸	佐藤与助	大村末蔵
大崎敬太	岩本仁太郎	千葉徳治	桜庭五平	近藤米治

小野寺源幸	藤川喜代治	小笠原章雄	渡　タマ	渡　スミ
渡　キヨ	渡　ヒデ	沢口ハル	中村トシ	桜庭サク
小林トメ	古里シギヨ	梶切沢ハル	中村ハツ	玉川絹代
坂木ヨシ子	白梅マサ			

13. 本遺跡の室内整理は調査員の指示のもとに次の方々の御協力を得た。

天沼キミエ	佐藤ヨシ	佐藤良子	大木絹子	阿部恵美子
川村ミチ子	吉田　京	田上敦子	鈴木ツヤ	米内弘子
岩館のぶ子	藤島ヒロ子	村上幹子	中島ヨシ	佐藤和也
岩淵希士				

## (財)岩手県埋蔵文化財センター組織図

役 員		
理事長	新里 盈	(県教育長)
副理事長	中原 良一	(県教育次長)
常務理事	菅原 一郎	(センター所長)
理 事	吉田 良和	(県農政部長)
◇	田代 太志	(県林業水産部次長)
◇	後藤 光雄	(県土木部次長)
◇	板橋 源	(県立博物館長)
◇	草間 俊一	(県立盛岡短大学長)
◇	小形 信夫	(県民俗の会々長)
監 事	白石 文雄	(県教委総務課長)
◇	及川 久男	(県教委財務課長)

職 員	
所 長	菅原 一郎
副 所 長	小野寺 登
総務課長	小笠原 喜一
庶務係長	岡沢 成治
主 事	佐藤 久四郎
◇	戸草内 幸男
◇	立花 多加志
技 能 員	佐藤 春男

調査課長 嶋 千秋

主任専門調査員 近藤 宗光

◇ 遠藤 勝博

◇ 国生 尚

専門調査員 村上 達夫

◇ 畠山 靖彦

◇ 朝野 孝二

◇ 菊池 利和

◇ 鈴木 恵治

◇ 小平 忠孝

◇ 大原 一則

◇ 田鎖 寿夫

◇ 佐々木嘉直

◇ 梶沢 満郎

専門調査員 平井 進

◇ 種市 進

◇ 鈴木 隆英

◇ 三浦 謙一

◇ 岩淵 久

◇ 光井 文行

◇ 佐藤 勝

◇ 高橋 義介

◇ 佐々木清文

◇ 酒井 宗孝

資料課長 瀬川 司男

専門調査員 高橋与右エ門

◇ 四井 謙吉

◇ 本沢 慎輔

◇ 工藤 利幸

◇ 高橋 文夫

◇ 中川 重紀

◇ 松野 恒夫

# 本文目次

序	2) 住居址状遺構	39
例言	3) ビット	42
I. 調査に至る経過	(2) 遺構以外の出土遺物	86
II. 野外調査と室内整理の方法	VI. まとめ	89
(1) 野外調査の方法	(1) 遺構	89
(2) 室内整理の方法	1) 住居址	89
III. 遺跡の位置と周囲の環境	2) 住居址状遺構	93
(1) 位置・環境	3) ビット	95
(2) 丸戸村の遺跡	(2) 遺物	104
IV. 地形・地質	1) 土器	104
(1) 地形	2) 石器	108
(2) 基本層序	3) 鉄器	109
V. 検出された遺構と遺物	4) 土製品	109
(1) 遺構	5) 出土土器の時期	109
1) 住居址	VI. さいごに	110

# 図版目次

第1図 岩手県全図	1	第22図 H-24ビット出土遺物	46
第2図 遺跡の位置図 $\frac{1}{90,000}$	2	I-8ビット・I-10ビット-1	48
第3図 遺跡付近の地形図 $\frac{1}{2,000}$	5	I-10ビット-2	
第4図 グリッド配置図 $\frac{1}{300}$	10	I-15ビット・I-16ビット	50
第5図 基本層序 $\frac{1}{40}$	16	I-17ビット	
第6図 遺構配置図 $\frac{1}{300}$	19	I-18ビット-1・I-18ビット-2	52
第7図 G-24住居址	22	第26図 I-45ビット出土遺物	54
第8図 G-24住居址出土遺物-1	23	J-4ビット・J-8ビット	
第9図 G-24住居址出土遺物-2	24	J-11ビット	55
第10図 H-9住居址	27	J-23ビット・J-24ビット	
第11図 H-9住居址出土遺物	28	J-35ビット	57
第12図 J-31住居址	31	第29図 J-37ビット・K-6ビット	59
		K-10ビット・K-14ビット	61
		K-15ビット	
		K-16ビット・K-17ビット	62
		K-19ビット	
		K-21ビット・K-22ビット	64
		K-24ビット	
		第33図 K-25ビット・K-34ビット	66

第13図	J-31住居址出土遺物……………32	第34図	K-44ビット・L-11ビット……68
第14図	J-40住居址……………34	第35図	L-13ビット
第15図	J-40住居址出土遺物……………35	第36図	L-14ビット・L-19ビット-1・70
第16図A	N-35住居址……………37	第37図	L-19ビット-2
第16図B	N-35住居址出土遺物……………37	第38図	L-20ビット・L-21ビット……71
第17図	N-35住居址出土遺物……………38	第39図	L-23ビット
第18図A	H-11住居址状遺構……………40	第40図	L-24ビット・L-26ビット……73
第18図B	H-11住居址状遺構出土遺物…40	第41図	L-31ビット
第19図A	N-19住居址状遺構……………41	第42図	L-36ビット・L-42ビット……75
第19図B	N-19住居址状遺構出土遺物…41	第43図	M-13ビット
第20図	H-7ビット・H-9ビット…43	第44図	M-16ビット・M-20ビット
第21図	H-24ビット……………45	第45図	M-21ビット・M-23ビット……77
			M-25ビット・M-26ビット
			M-27ビット・M-30ビット……79
			N-14ビット・N-18ビット……81
			N-22ビット
			N-23ビット・N-26ビット……83
			N-32ビット・O-27ビット
			O-28ビット・P-26ビット……85
			P-30ビット……………87
			表採・掘削りの出土遺物……………88

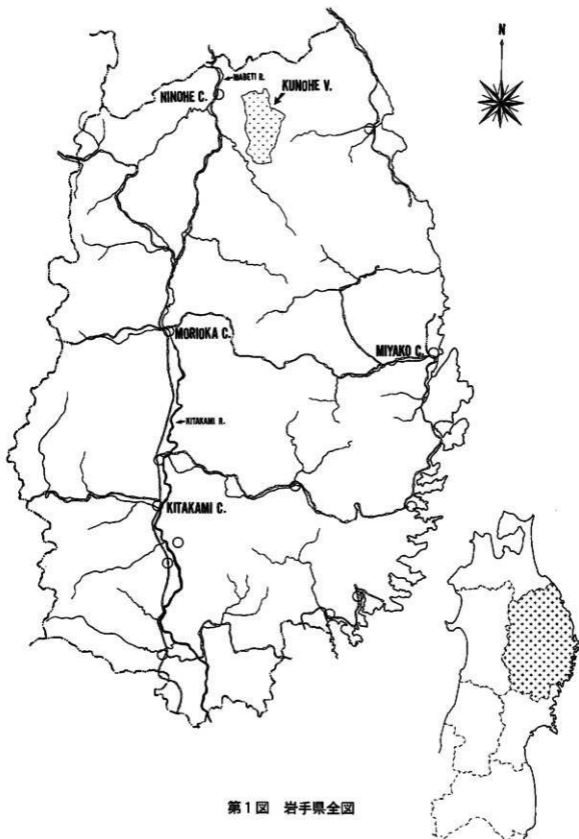
## 写真目次

PL 1	遺跡遠景・調査後近景……………112	PL 18	L-24ビット・L-26ビット・L-31ビット…129
PL 2	調査中スナップ・基本層序……………113	PL 19	L-36ビット・L-42ビット
PL 3	G-24住居址・H-9住居址……………114	PL 20	M-13ビット・M-16ビット・M-20ビット…130
PL 4	J-31住居址……………115	PL 21	M-21ビット・M-23ビット
PL 5	J-40住居址・N-35住居址……………116	PL 22	M-25ビット・M-26ビット・M-27ビット…131
PL 6	H-11住居址状遺構・N-19住居址状遺構…117	PL 23	M-30ビット・N-18ビット
PL 7	H-7ビット・H-9ビット……………118	PL 24	N-14ビット・N-22ビット…132
PL 8	H-18ビット・H-24ビット	PL 25	N-23ビット・N-26ビット…140
PL 9	I-8ビット・I-10ビット-1・I-10ビット-2…119	PL 26	O-27ビット・O-28ビット…133
PL 10	I-15ビット・I-16ビット	PL 27	P-30ビット
PL 11	I-17ビット・I-18ビット-1…120	PL 28	G-24住居址……………134
PL 12	I-45ビット	PL 29	G-24住居址・H-9住居址……………135
PL 13	I-18ビット-2・J-4ビット…121	PL 30	J-31住居址……………136
PL 14	J-8ビット・J-11ビット	PL 31	J-31住居址・J-40住居址……………137
PL 15	J-23ビット・J-24ビット……………122	PL 32	N-35住居址・N-19住居址状遺構…138
PL 16	J-35ビット	PL 33	H-24ビット……………139
PL 17	J-37ビット・K-6ビット……………123	PL 34	I-45ビット・J-24ビット
	K-10ビット・K-14ビット……………124		J-37ビット・I-18ビット-2…140
	K-15ビット・K-16ビット……………124		N-23ビット・K-24ビット……………141
	K-17ビット		PL 31
	K-19ビット・K-21ビット……………125		拓本の土器片……………142
	K-22ビット・K-24ビット……………126		PL 32
	K-25ビット・K-34ビット……………126		拓本の土器片……………143
	K-44ビット・L-11ビット……………127		PL 33
	L-13ビット・L-14ビット……………127		拓本の土器片……………144
	L-19ビット-1・L-19ビット-2……………127		PL 34
	L-20ビット・L-21ビット……………128		拓本の土器片……………145
	L-23ビット		

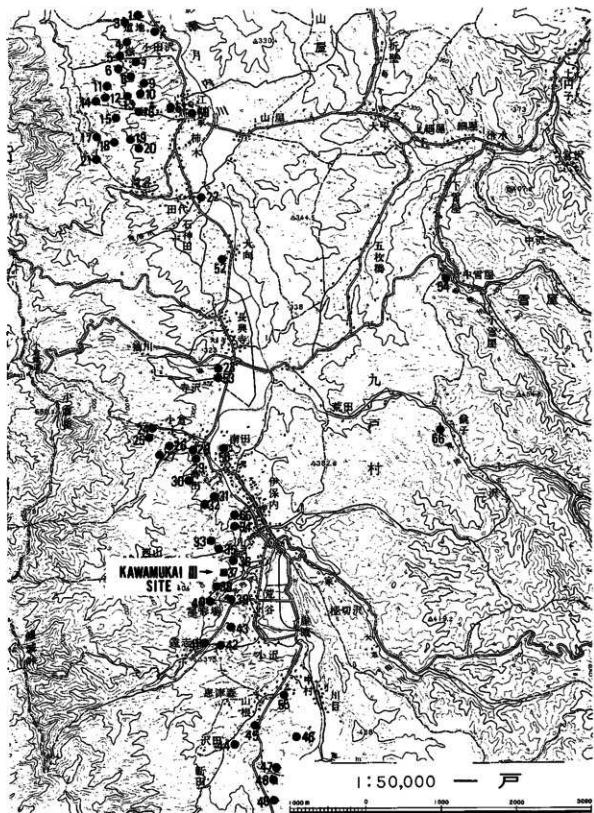


## 川 向 Ⅲ 遺 跡

遺跡所在地	岩手県九戸郡九戸村大字伊保内字川向
事業主体	岩手県農政部・二戸土地改良事業所
事業名	畑地帯総合土地改良事業
調査主体	(財)岩手県埋蔵文化財センター
調査対象面積	2,600㎡
発掘面積	2,600㎡
調査担当者	吉田 洋・高橋与右エ門
調査期間	昭和55年9月30日～12月1日
協力機関	九戸村役場・九戸村教育委員会



第1図 岩手県全図



第2図遺跡の位置図

## I 調査に至る経過

岩手県は、農業立県における大県づくりを目指し、昭和40年ころより、水田中心の大規模圃場整備事業を進め、水田収益の向上に取り組んできた。しかし、水田中心の圃場整備は、水田地帯や水田転換可能地を持つ県南・県中央部において行われ、僅少の水田・水田転換可能地しか持たない県北部においては行われなかった。

岩手県は県北部の農業生産力向上のため、畑地帯総合土地改良事業を昭和50年代ころから取り組んできた。この改良事業の一環として九戸村が事業指定された。

九戸村を対象とした畑地帯総合土地改良事業は昭和50年に県教委文化課と県農政部農地開発課との間において、埋蔵文化財の取扱いについて協議がなされた。この時点においては、埋蔵文化財包蔵地の位置等についての把握が偽されていないため、融雪を待って確認のための分布調査を行うこととした。

昭和51年4月19・20日の両日、県教委文化課は事業対象地の分布調査を行った。その結果、北上山地東側の山麓台地の尾根部分を中心に事業区5割に達すると思われる部分に遺跡が存在し、その時期も縄文時代中期以降中世まで連続と続いていることが判明した。

この結果を受けて、県教委文化課と県農政部農地開発課との間で協議を重ね、遺跡の破壊を最小限に止どめるために、切り土部分を最小限とする工法を取り入れる事とした。

改良事業は、昭和52年度より開始されたが、この年度は極力遺跡のない地区を指定する様に希望し、ほぼその方向で行われたが、農道の改良部分において、拡張区域の一部が遺跡にかかるものができた。この部分は、遺跡の中央部分ではなく、且つ、その拡張幅も1m未満なため、工事立会いとする事にし、県教委文化課及川主任文化財主査と県埋蔵文化財センター瀬川調査課長が立会いを行った。この立会いにおいては、遺構も遺物も発見されなかった。

昭和53・54年度は、遺跡の存在が希薄な工区において工事を行い、遺跡発掘調査はなかった。この間県教委文化課・県農政部農地開発課は昭和55年度調査について精力的に話し合いを行い、畑地勾配の修正・切り土工法の見直しなどのツメを行った。その後、事業の直接担当である二戸土地改良事業所と調査担当の岩手県埋蔵文化財センターを交え、現地協議を行い、更に工法のツメによる保存区域を拡げ、最終的に「川向-Ⅲ遺跡」2,000㎡を発掘調査することで四者の合意が成立した。

く

調査は昭和55年度当初より行うことで考えたが、畑作のため一作取り入れ後の10月から1ヶ月間の予定で行うことにした。調査は予測を上回る遺構群の検出・調査員不足・実測作業員の不足などから、1ヶ月余の延長の止むなきに至った。

調査期間中に昭和56年度事業区域の調査についての協議を行い、工法変更などによる最少限の調査区設定を行った。

なお、畑地帯総合整備事業関連26遺跡の中で伊保内館Ⅰ～Ⅵまでの遺跡名が実情とそぐわないことが判明し、県教委文化課との協議の結果次の様に訂正し、遺跡登録台帳にもその旨明記した。(第1図・第2図)

台帳番号	旧遺跡名	新遺跡名
1158	伊保内館Ⅰ	伊保内Ⅰ
1231	伊保内館Ⅱ	伊保内館
1187	伊保内館Ⅲ	川向Ⅰ
1281	伊保内館Ⅳ	川向Ⅱ
2109	伊保内館Ⅴ	川向Ⅳ
2118	伊保内館Ⅵ	川向Ⅳ

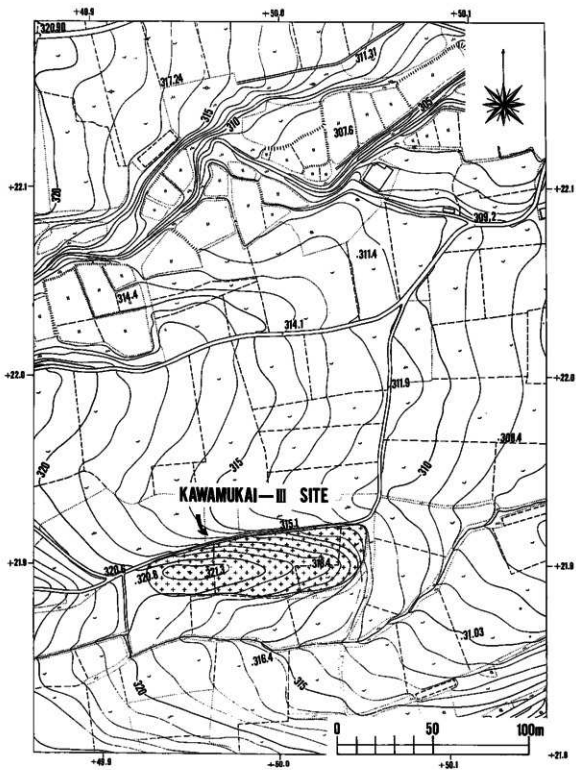
(瀬川司男)

## Ⅱ 野外調査と室内整理の方法

### (1) 野外調査の方法

(第3図)

〔粗掘りと遺構検出〕 調査時における遺跡範囲は畑地として利用されていたことから、表土が薄く重機を利用した粗掘りは必要がなかったので全て人力によって粗掘りが行われた。当初予定された調査期間は1ヶ月間であったことから、遺物や遺構の存在の有無を確認することが急務と考えられたので、トレンチ方式で粗掘りを行い、遺構が検出された場合には全面グリッド方式に切り換えることにした。トレンチは斜面に直交する様に設定し、巾2mで尾根頂上部より斜面下端までの長さとした。遺構が次第に多く検出されて来たことから、結果的には全面(2,600㎡)に亘る粗掘りが行われた。粗掘りで除去した土層は表土層(耕作土)を主としているが、南側斜面は15cm～30cm位と薄い、北側斜面は20cm～40cm位と南側斜面のそれより幾分厚く、ともに斜面下位ほど厚い。従って、尾根頂上部より南側斜面では表土層を除去した面が遺構検出面であり、遺構の所属時期による差は認められていない。北側斜面では表土層とその下位の暗褐色土を若干除去することによって遺構が検出されている。遺構の中で住居址だけは検出状況が若干違い、粗掘りを行う前よりその存在が予想されていた。それは、畑地の地表面に黒色土(クロボク質)の広がる範囲が5ヶ所観察されていたが、粗掘りが進むにつれてそれらが住居址の埋土であることが判明した。



第3図 遺跡付近の地形図

遺構検出は粗掘りの終了した地点より順次行い、存在が確認された場合は消石灰を入れて位置も明確にした。

〔遺構精査〕 遺構の精査は住居址4分法・土坑2分法を原則とし、住居址のカマドや炉址はその状況に応じて土層観察用ベルトを残した。実際の発掘では分層発掘に努め、埋土上部の遺物は層位を確認の上層位ごとに一括で収納した。床面直上や床上10cm以内での出土遺物は実測図に記入し、写真撮影の後収納した。

〔記録〕 実測図は平面図・土層図ともに $\frac{1}{50}$ で行った。実際の実測は作業員の中から、2人1組で3組の実測班を編成して行い、実測班に対する指導や、実測図の点検は調査員が行った。土層注記は調査員が行い、土層名は基本層序はローマ数字で上位層よりⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層とし、遺構埋土はアラビア数字で上位層より1層・2層・3層と命名した。なお、土層の色調は新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修）に従った。写真撮影は6cm×7cm版1台（白黒）と35mm版2台（白黒・カラーリバーサル）をセットで使用した。実際の撮影は埋土土層・出土遺物・遺構全景・炉址やカマドのアップ等で行った。

〔調査区の設定と遺構の命名〕 遺跡の東端に基準点1（ $X=+21,894.05$   $Y=+49,447.34$   $H=320,893\text{m}$ ）と西端に基準点2（ $X=+21,900.08$   $Y=+50,024.70$   $H=316,974\text{m}$ ）を設定し、基準点1と基準点2を結ぶ線を東西軸の軸線として南北両方向にそれぞれ2mの区画を行い、更に、南北軸は基準点2で東西軸に直交する様に東西両方向に2mごとに区画し、一調査区2m×2mのグリッドを遺跡全面に設定した。グリッド軸の呼称は、東西軸は北から南へアルファベットでA～S・南北軸はアラビア数字で東より西へ1～47までそれぞれ命名し、グリッド名はこれらの組み合わせによって北西隅の交点によってA-1・B-1・A-2・A-3という様に呼称した。遺構名は位置するグリッド名を頭に冠し、遺構の種類名と組み合わせでA-1住居址・A-1ピットという様にした。なお、1グリッドに同種の遺構が複数検出された場合には、遺構名の次にアラビア数字を加え、A-1住居址-1・A-1住居址-2とし、その場合は○-○住居址-1は新遺構を、○-○住居址-2は旧遺構であることを表わしている。この記録方法はピットも同様である。

## (2) 室内整理の方法

遺物の水洗いやラベル記入は現地での野外調査中に雨天日等を利用して行い、全て終了して室内整理作業に入った。室内での整理は最初は種類（土器・石器・鉄器等）に仕分け後、土

器の接合復元を行った。その後、遺物の実測図作成や拓本図の作成が行われ、縮尺率は実大とした。遺構に関する図面の点検・修正は現地で終了していたが、再度点検をし誤りがないかどうかを確認の上、報告用トレースに入った。トレース用原図は現地で作成の $\frac{1}{50}$ の平面図や土層図を使用した。以上の様な作業は調査員の指示のもとに室内整理作業員がそれぞれを分担して行い、調査員が指導点検した。

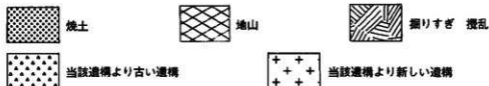
本報告書掲載の全体的な凡例は以下の通りである。

〔遺 構〕

(凡例1)

全体配置図は現地で作成した $\frac{1}{50}$ の平面図を $\frac{1}{100}$ に縮小して作成し、スケールを付し縮尺不定で掲載した。遺構個々の平面図や土層図は規模により $\frac{1}{50}$ ・ $\frac{1}{100}$ とし、それぞれにスケールを付している。それらの遺構図面の中で、焼土・重複関係・掘りすぎ・攪乱・地山・礫・土器・床面のピットは次の様なアルファベットやスクリーンで図示した。

S—礫 P—土器 P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>……P<sub>n</sub>—柱穴と床面のピット



凡例1 使用スクリーントーン

〔遺 物〕

(凡例2・3)

遺物には土器・石器・鉄器が含まれているが、実測可能な遺物は全て図化して掲載した。土器の中で図化できなかった破片については拓本図を作成して掲載した。実測の際には全て実大で図化しているが、報告書には縮尺して収録し、縮尺率は次の様にした。土器は大型 $\frac{1}{5}$ ・小型 $\frac{1}{10}$ 、拓本図 $\frac{1}{5}$ 、石器は大型 $\frac{1}{5}$ ・小型 $\frac{1}{10}$ 、鉄器 $\frac{1}{10}$ とし、それぞれにスケールを付している。遺物の実測図は出土した遺構の図面と同じページに掲載している。

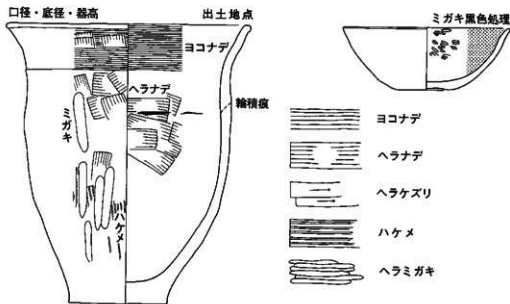
平安時代の土器は残存の程度を中軸線両側の口縁部をあける程度で次の様に指示した。



凡例2 土器の残存程度



また、調整技法は次の様に表現している。



凡例3 調整技法・法量・出土地点

〔写真〕

遺構の写真や遺物の出土状況についての写真は野外調査中に現地で撮影したものの中から選択して使用し、報告全遺構について掲載した。遺物写真は当埋文センターの写真技師が撮影したものを使用し、実測図や拓本図を掲載した遺物は全て載せている。掲載した遺物写真の縮尺は不定である。

〔執筆分担〕

本遺跡の調査は当埋文センターの職員吉田 洋と高橋与右エ門が担当したが、室内整理・報告は吉田 洋が担当した。しかし、整理の途中で年度末人事異動によって吉田 洋が転勤となり、残った整理は高橋与右エ門が引き継ぎ吉田 洋と連絡を取りつつ行った。執筆分担は例言に記した。

(高橋与右エ門)

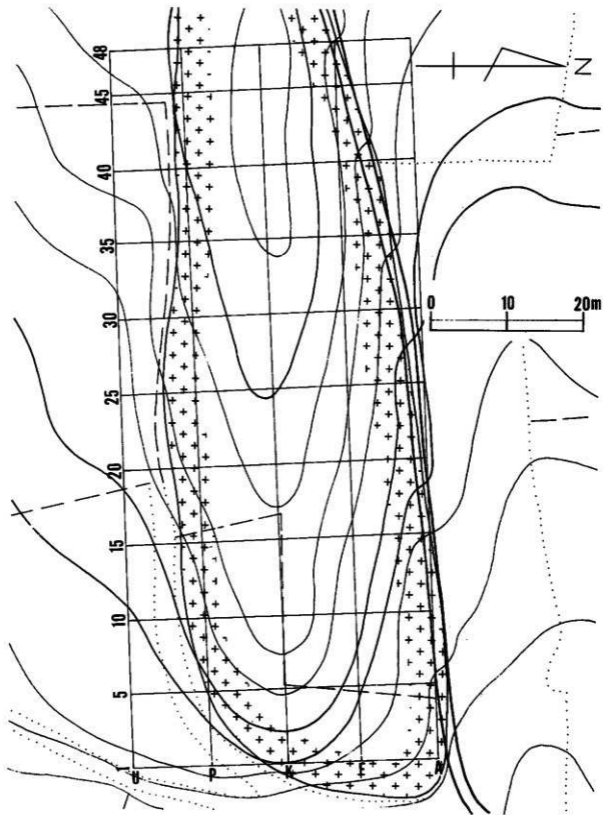
### Ⅲ. 遺跡の位置と周囲の環境

#### (1) 位置と環境

(第4図・PL1, PL2A)

川向Ⅲ遺跡は岩手県九戸郡九戸村大字伊保内字川向に所在し、九戸村役場の南方約1.4kmに位置する。本遺跡の所在する九戸郡九戸村は岩手県の中では北部に属し、盛岡市の中心部(県庁付近)より直線で約60kmほど北方である。行政区画では東は九戸郡山形村、西は二戸市・二戸郡一戸町、南は岩手郡葛巻町、北は九戸郡軽米町にそれぞれ接しており、西方の北上山系折爪岳(852.2m)・小倉岳(652.3m)・傾城峠(735.9m)の各山群と東の九戸高原地帯に挟まれた東西約9km・南北18.5kmの南北に細長い地域で、総面積は約141.6km<sup>2</sup>である。本村は北流する瀬月内川とその支流域を中心とする地域に集落が発達しており、その中で大字伊保内字川向は本村の中心的市街である伊保内より村道川向一西山線を利用して西山集落に向かい、瀬月内川の左岸地域であるが、遺跡は村道川向一西山線を利用し約1km進行すると農免道路との交差点に差し掛かり、交差点で左折して約200mほど南進した位置に存在する傾城峠の東斜面に派生した、小規模で馬の背状を呈する尾根状台地(標高約320m)の東端部に位置している。

川向地域の標高は約290m位より350m位までで約60mの標高差がみられる。瀬月内川は遺跡の東方約600mを北流しており、遺跡と現河床との比高は約45mである。また、川向地域を東流する西山川は遺跡の北方170mに位置し、約750m東方で瀬月内川と合流しており、遺跡と現河床との比高は10m位である。遺跡の南方約250mを遠志内川が東流し、600m位東方で瀬月内川と合流し、遺跡と現河床との比高は約15mである。遺跡周囲の環境は西山川と遠志内川沿いに若干の水田がみられる以外は畑地として利用され、標高約300m位の所には新しい宅地が散在している。畑地として利用しているのは標高350m位までで、それより高い平坦地や緩斜面は牧草地として利用されている。九戸村全体でみても水田は少なく、その中で瀬月内川沿いや雪谷川沿いに水田が比較的多く、その他比較的水流の緩やかな沢沿いにみられ、段丘上にはほとんどない。この様に水田が少ないことは灌漑用水路が整備されていないことと、比較的起伏の大きい地形的制約によるものであろう。本遺跡の立地する台地の南北両斜面下には古い埋没谷があるらしく、崖錐性堆積土を開析する少量の水流を有する小規模な沢があり、本遺跡との比高は5m位である。また、本遺跡の立地する台地は、傾城峠東側山腹の標高350m地点より緩斜面を呈しながら尾根が派生しており、標高325m地点まで約200m続いており、この地点で急斜面を呈して遺跡の載る台地に続いている。上位の緩斜面との比高は約5mで、台地の広さは東西約120m、南北約35mを測る馬の背状の「ヤセ尾根台地」である。



第4図 グリッド配置図

## (2) 九戸村の遺跡

(第2図・一覧表1)

九戸村で知られている遺跡は昭和56年4月現在で52ヶ所が登録されているが、昭和49年頃には僅か6ヶ所が登録されているにすぎない。このことは、昭和50年以降に行われた東北縦貫自動車道八戸線や畑地帯総合整備事業等の工事に関連する事前分布調査によって、その存在が確認され登録された遺跡が多い為である。これら遺跡の所在位置をみると、本村北部の江刺家地区や中部伊保内地区の二地区に集中して分布することがわかる。これはそのまま工事に関連する地域を示しており、江刺家地区は東北縦貫自動車道に関連する分布調査で24ヶ所が発見され、伊保内地区を中心とする畑地帯総合整備事業関連では26ヶ所の遺跡が確認されている。以上の様に、本村の遺跡の所在分布は精度の高い分布調査の行われた地域に集中していることから、今後、本村全域に亘る精度の高い分布調査が行われれば、より多くの遺跡が確認されるものと推定され、その時が早く到来することを希望したい。特に、本村は日本中世史の最後を締めくくった天正19年の「九戸政実の乱」で有名な九戸政実一族の本拠地であり、それらに関連する中世城館址も多く存在するが、遺跡台帳では伊保内館のみが登録され、他は登録されていない。しかし、本報告書に掲載した遺跡一覧表には未登録の城館址も遺跡と認定し掲載した。城館址遺跡分に台帳番号が記入されていないのはその為である。

これら53遺跡の中で発掘調査の行われたのは昭和7年11月に小田島録郎が大字江刺家字石神田に所在する「黒山の竪穴住居址群」の一部を発掘したのが最初で、その際石を並べた炉址も発見されたという。この竪穴住居址群には18ヶ所の竪穴住居址が確認されているが、未登録遺跡の様である。その後、昭和30年に岩手大学教授草間俊一が大字江刺家字田代に所在する田代遺跡を調査し、縄文時代前期・中期の土器や石器が多く出土しているが、遺構は検出されていない。昭和35年5月には大字戸田字妻ノ神に所在する妻ノ神遺跡を岩手大学教授草間俊一が調査し、土器約300ヶ体・石器多数が出土し、厚さ10cm位の焼土が3m位の範囲で検出され、多くの土器片を滌じていたことから土器を焼成した場所ではないかとしている。時期は縄文時代晩期である。その後、発掘調査はしばらく行われなかったが、昭和55年度に東北縦貫自動車道関連として田代遺跡の一部が当埋蔵文化財センターによって調査され、縄文時代早期より中期までの土器や石器と、縄文時代と平安時代の竪穴住居址が検出されている。続く昭和56年度には東北縦貫自動車道関連として8遺跡が調査される予定であり、畑地帯総合整備事業関連として1遺跡が調査される予定である。以上当村内の遺跡に対する調査事例の概略を記述したが、他は調査していない。

遺跡台帳に記入されている遺跡の所属時期をみると、縄文時代が多く47遺跡を数え、その中でも29遺跡は晩期であるとしている。晩期以外では早期1遺跡・前期2遺跡・中期18遺跡・後

一覧表1 九戸村の遺跡

整理番号	台帳番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	2121	丸木橋	大字江刺家第17地割字丸木橋	縄文	
2	0029	菅波(I)	+ 第16地割字菅波	縄文晩期・平安	
3	0048	菅波(II)	+ 第16地割字菅波	縄文晩期・平安	
4	0170	道地	+ 第14地割字道地	縄文	
5	0066	道地(II)	+ 第14地割字道地	縄文晩期	
6	0087	道地(III)	+ 第14地割字道地	縄文晩期	
7	1005	塚(I)	+ 第9地割	縄文晩期	
8	1025	塚(II)	+ 第13地割字鍋倉	縄文	
9	1018	塚(III)	+ 第12地割	縄文晩期	
10	1038	塚(IV)	+ 第12地割	縄文晩期	
11	1049	塚(V)	+ 第12地割	縄文後・晩期	
12	1059	江刺家(I)	+ 第13地割字鍋倉		
13	1044	江刺家(II)	+ 第13地割字鍋倉	縄文後・晩期	
14	1054	江刺家(III)	+ 第13地割字鍋倉	縄文中・晩期	
15	1067	江刺家(IV)	+ 第13地割	縄文中・後・晩期	
16	1063	江刺家(V)	+ 第13地割	縄文晩期	
17	1095	菅宮(I)	+ 第8地割	縄文晩期	
18	1089	菅宮(II)	+ 第8地割	縄文晩期	
19	2012	滝谷(I)	+	縄文晩期	
20	2025	滝谷(II)	+	縄文晩期	
21	2027	滝谷(III)	+	縄文晩期	
22	2038	滝谷(IV)	+	縄文晩期・平安	
23	2053	滝谷(V)	+	縄文中・晩期平安	
24	2197	田代	+ 第2地割字田代	縄文前・前・中層・平安	
25	2129	長興寺	大字長興寺第3地割	縄文中期	
26	0111	小倉(I)	大字伊保内字小倉	縄文中・後期	
27	0120	小倉(II)	大字伊保内字小倉	縄文中期・平安	
28	0123	小倉(III)	+ 字小倉	平安	
29	0150	小倉(IV)	+ 字小倉	縄文中期	
30	0136	南田(I)	+ 字南田	縄文晩期	
31	0147	南田(II)	+ 字南田	縄文中・晩期	
32	0185	痔田(I)	+	縄文晩期	
33	0199	痔田(II)	+	縄文中期	
34	1118	痔田	+	古代	
35	1158	伊保内館(I)	+ 字川向	縄文中期・古代	伊保内(I)
36	1231	伊保内館(II)	+ 字川向	縄文中・前期・古代・中世	伊保内館(館址)
37	1187	伊保内館(III)	+ 字川向	縄文中期・古代	川向(I)
38	1281	伊保内館(IV)	+ 字川向	縄文中期・古代	川向(II)
39	2109	伊保内館(V)	+ 字川向	縄文晩期・平安	川向(III)
40	2118	伊保内館(VI)	+ 字川向	古代	川向(IV)
41	2240	屋形場(I)	+	縄文中期・古代	
42	2157	屋形場(II)	+	縄文中期・古代	
43	2197	塚志内(I)	大字荒谷	縄文後期	
44	2199	塚志内(II)	+	縄文中期	
45	2261	塚志内(III)	+	縄文中期	
46	0292	山根(I)	大字山根	縄文晩期	
47	1204	山根(II)	+	縄文	
48	1217	山根(III)	+	縄文晩期	
49	1267	牛の馬場(I)	大字戸田	縄文中期	
50	1297	牛の馬場(II)	+	古代	
51	2208	牛の馬場(III)	+	縄文後期・古代	
52	1320	妻ノ神	+ 字妻ノ神	縄文晩期	
53		江刺家館	大字江刺家		江刺家一照書
54		大向館	大字長興寺字大向		九戸彦九郎実親
55		大名館	大字長興寺		九戸信仲
56		菅谷館	大字長興寺字字堂		不明
57		山根館	大字山根字山根		山根彦左エ門
58		雑野館	大字伊保内字南田		九戸政実
59		戸田館	大字戸田字戸田		戸田辨刀童道
60		快館	大字戸田字快館		不明
61		上宿館	大字江刺家		不明
62		戸田「館」	大字戸田		不明
63		瀬月内館	大字戸田字瀬月内		不明
64		高倉館	大字戸田字泥の本		不明
65		籠ヶ沢館	大字戸田字籠ヶ沢		不明
66		高見館			不明
67		伊保内館	大字伊保内字川向	中世	伊保内義満守
68		鏡子館	大字伊保内字鏡子		

期6遺跡であるが、これらは一遺跡で多時期の遺物が出土するいわゆる複合遺跡である場合が多く、所属時期の遺跡数と登録遺跡数が一致しないのはこの為である。本村北部の江刺家地区には縄文時代晩期の遺跡が多く、伊保内地区には縄文時代中期の遺跡が多い傾向がみられる。弥生時代に属する遺跡は知られていない。古代（奈良・平安時代）に属する遺跡は14遺跡が知られているが、そのほとんどは平安時代の遺跡である。これは、奈良時代に九戸地区に人々が住まなかったのではなく、遺跡が知られていないだけであろう。今後の分布調査や発掘調査に期待したい。鎌倉時代以降の遺跡として城館址があるが、本村では16ヶ所<sup>①</sup>が知られている。前記の通り、当地域は九戸政実が二戸市に所在する九戸城（現国指定史跡・一名宮野城とか白鳥城ともいう）に移るまで本拠地とした所であり、現九戸神社参道北側に大名館として残っており、その付近に「お田屋小路」という地名も知られている。その他江刺家館・大向館・山根館・熊野館・戸田館等が著名である。これらは全て九戸政実の一族によって構築されたとの伝承があり、多くの館主は九戸の乱で滅亡したものであろう。

以上、九戸村の遺跡を概略的に記述したが、現在（昭和56年6月）も数ヶ所の遺跡が発掘調査されており、本村の縄文時代や古代・中世の様相が次第に明らかにされてくるであろう。

（高橋与右衛門）

①	「歴史文化財分布地図」	岩手県教育委員会	昭和49年
②	岩手県教育委員会事務局文化課が作成保管している。昭和56年4月現在の遺跡登録台帳		
③	権倉豊太郎氏「九戸村の文化財」	九戸村教育委員会	昭和55年
④	草間 俊一「岩手県田代遺跡調査報告」『岩手大学学芸学部研究年報第13号』	岩手大学学芸学部	1958
⑤	草間 俊一「岩手県九戸村の神遺跡」『日本考古学年報 13』	日本考古学協会	昭和35年
⑥	「田代遺跡」調査時報(55年度)岩手県遺文センター文化財調査報告書第15集(附)岩手県歴史文化財センター		昭和56年
⑦	前記 注③に同じ。他に次の様な資料がある。		
	本堂 寿一編「日本城郭大系2(岩手県分)」	新人物往來社	昭和55年
	藤澤孝次郎「二戸郡・九戸郡古城館址考」	東北民俗研究会	昭和46年

## Ⅳ 地形・地質

### (1) 地形

岩手県北部の地形・地質についての研究は、石田琢二や大池昭二等の『東北地方における第四紀海準変化』<sup>①</sup>や大池昭二の『十和田火山東麓における完新世テフラの纏年』<sup>②</sup>・大池昭二や中川久夫等の『馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰』<sup>③</sup>の諸論文に詳しいが、いずれも馬淵川流

域を中心とした研究であり、九戸村地域を直接的な対象地域とした研究はほとんどない。加えて、筆者の地形・地質に対する知見も貧弱であり、筆者がこれをもって地形を詳述することは不可能である。従って、本項では九戸村地域の地形を概括的に説明するに止めたい。なお、本項を草するにあたって、上記論文以外に、岩手県発行の「土地分類基本調査 一戸」・国土地理院発行の1/2.5万地形図「伊保内」・二戸土地改良事業所発行の1/1万地形図「畑地帯総合土地改良事業九戸地区平面図」等を参考とした。

九戸郡九戸村の地形は北流する瀬月内川を境として西側と東側では様相を異にしている。従って、ここでは西側と東側に分けて記述する。二戸郡と九戸郡の境界は北上山地の北端部を構成する折爪岳(852.2m)・小倉岳(652.3m)・傾城峠(735.9m)の各山群によって限られており、これらの山群の東斜面は大小さまざまな沢や谷が開析し、瀬月内川に合流している。その中でも、滝谷川・袖川・西山川・遠志内川等が水量も豊富である。西側山群の東斜面は、頂上部より標高350m地点までは比較的急な斜面を示しているが、標高350m～300m地点までは傾斜もなだらかである。しかし、全体的にみると起伏量50m前後とやや起伏の大きい地形となっている。この様な地形的特性から、段丘形成が非常に貧弱であり、特に、洪積段丘は低位段丘が江刺家地区・長興寺地区・川向地区・遠志内と荒谷地区に観察されるのみで、中段段丘や高位段丘は報告されていない。洪積低位段丘は川向地区で標高340m位～290m位と約50mの標高差がみられ、瀬月内川とは約20mの比高がある。低位面と川岸平野とは比較的なだらかな崖で限られている。洪積低位段丘より高位に段丘状を呈する台地が所々に観察され、特に長興寺地区～小倉地区では顕著に観察される。これらの台地は川向地区で標高350m～300mと約50mの標高差があり、洪積低位段丘とは5～10mの明瞭な崖で限られている。しかし、この台地は大小さまざまな沢や谷によって浸蝕・開析され、全体的に馬の背状の「ヤセ尾根台地」を形成している。台地を形成した浸蝕谷や沢は崖礫性堆積物によって埋没谷として散見される。この様な現象が起伏の大きい現在の地形を形づくっている。今度調査された川向Ⅲ遺跡は洪積低位段丘より一段高位のヤセ尾根台地の東端部に立地している。遺跡地内の深掘り(現地表面下2m)による土層観察によれば、表土(黒褐色土)の下位には最大粒径1cm位の橙色浮石を混入する軟弱な火山灰質の暗褐色土層(基本層序Ⅲ層)が観察され、その下位は(基本層序Ⅳ層～Ⅴ層)緻密で堅く締まった粘性のある褐色を呈する火山灰質土の再堆積層が観察され、更に下位(基本層序Ⅵ層～Ⅶ層)はチャートや砂岩の角礫や亜角礫が多量に混入した砂礫層が堆積している。洪積低位段丘面では、本遺跡の東方150m(標高310m地点)の露頭観察によれば、本遺跡の基本層序Ⅳ層～Ⅴ層を欠いており、本遺跡基本層序Ⅲ層の下位に新鮮な河川礫の堆積層が観察され、本遺跡のそれとは様相を異にしている。この様なことから、本遺跡の載る台地は洪積低位段丘相当とは考えられず、中段段丘相当の低丘陵地として理解することがで

きよう。瀬月内川東側の地形は、西側のそれと同様に洪積段丘の発達が非常に悪く、伊保内地区・荒谷地区・川目地区に低位段丘が観察されるのみである。しかし、荒谷地区～江刺家地区に掛けての地域には低丘陵地が広範囲に亘って観察され、この地域に農用地が点在している。中でも雪屋川流域に多く分布し、川岸平野には水田が作られており、雪屋・細屋・大平等の集落も営まれている。このような低丘陵地は標高300m～345mの範囲にあり、比較的大きな起伏を示している。瀬月内川と雪屋川に挟まれた地域は川沿いに低丘陵地があり、中央部分の高丘陵地は最高位の標高が410m位と100mを超える標高差がみられ、大きな起伏を示している。高丘陵地は荒田川と大志田川に挟まれた地域にも観察され、標高は最高位で約420mである。

以上の様に、九戸村は農用地として利用できる様な段丘や平坦面が非常に少なく、山地や林地が多い。特に、水田は瀬月内川流域の川岸平野や沢沿いの谷底平野に作られ、農業経済の基盤は畑作経営に依存している。この傾向は本村のみならず、県北部一般に言えることである。

## (2) 基本層序

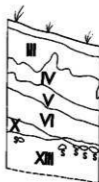
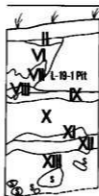
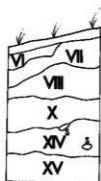
(第5図・PL2B)

本遺跡の載る台地の特徴は地形の項で記述した様に、洪積段丘とは認定しがたく、低丘陵地に相当するものと考え。本遺跡の調査では、台地の中央東寄り(基準点1の西約10m)と西寄り(基準点2の東13m)に台地を横断する様な位置に東3ヶ所・西3ヶ所の深掘りトレンチを入れ、堆積状況について観察し図面を作成した。東トレンチと西トレンチのそれを比較すると、様相を異にしている。それは、チャートや砂岩の角礫や重角礫が混入する層(基本層序Ⅲ・Ⅳ層)の上位を構成する土層が西トレンチで全体的に薄く、おそらく流亡したものであろう。また、台地頂上部を境にして北側斜面と南側斜面では差があり、南側では北側にみられるⅢ層～Ⅴ層を欠いている。

従って、本遺跡の基本層序は上記6ヶ所の深掘りトレンチ個々の土層を参考にして、東トレンチの層序を基本層序とした。なお、土層名は上位層よりローマ数字でⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層とした。

- Ⅰ層 10YR 7/2 暗褐色土——現在の表土で耕作土として利用されている。非常に脆く、粒径3mm位の八戸浮石が混入する。遺跡全面で観察され、層厚は10cm～15cmで斜面下位ほど若干厚くなる。
- Ⅱ層 10YR 7/2 暗褐色土——褐色土が少量混入した耕作土層。粘性がなく指圧痕がつく。ほぼ遺跡全面で観察される。層厚は5cm～10cmである。
- Ⅲ層 10YR 7/2 暗褐色土——クロボクが少量混入した汚れの強い八戸火山灰の再々堆積層。粘性





第5図 基本層序

- |      |                |   |
|------|----------------|---|
| I    | 10Y R 3/3暗褐色土  | 非常に脆く、植生痕が多い耕作土層。粒径3mm±の八戸浮石が混入する。  |
| II   | 10Y R 3/3暗褐色土  | 粘性がなく、指圧痕がつく。褐色土が少々混入した耕作土層。  |
| III  | 10Y R 3/4暗褐色土  | 粘性がなく、ザラザラして指圧痕がつく。径2mm±の炭化物が微量と粒径7mm±の八戸浮石が多量に混入し現状を呈する。クロボクが少量混入した汚れの強い八戸火山灰の再々堆積層。 |
| IV   | 10Y R 4/4褐色土   | 粘性がなくザラザラして指圧痕がつく。径2mm±の塊状の炭化物が微量と粒径1.5cm±の八戸浮石が多量に混入している。                            |
| V    | 10Y R 4/6褐色土   | 粘性がなくザラザラする。硬らで指圧痕がつく。粒径4mm±の八戸浮石が少量混入する。   |
| VI   | 10Y R 4/6褐色土   | やや光沢があり、粘性のある堅く締まった層。   |
| VII  | 10Y R 5/6明褐色土  | 粘性がわずかにあり、指圧痕がつく。   |
| VIII | 10Y R 4/6褐色土   | 粘性、光沢があり、堅く締まった層。   |
| IX   | 10Y R 6/6明黄褐色土 | 粘性がわずかにあり、よく締まった層。チャートの微細片が少量混入する。  |
| X    | 10Y R 3/3暗褐色土  | 粘性があり指圧痕がつく。粒径2mm±の黒褐色の植生痕と粒径2mm±の青灰チャート粒が微量混入する。                                     |
| XI   | 10Y R 5/6黄褐色土  | 粘性に富む。指圧痕がつく。   |
| XII  | 10Y R 4/6褐色土   | 粘性に富む。よく締まっている。   |
| XIII | 7.5Y R 5/6明褐色土 | 粘性少しあり。緻密で堅く締まっている。径25cm±のチャートが多量に混入する。   |
| XIV  | 5Y R 5/6明赤褐色土  | 粘性がなくザラザラする砂礫層。多量の水酸化鉄分が浸透している。手のひら大から細礫までのチャートや砂岩が多量に混入する。                           |
| XV   | 7.5Y R 5/6明褐色土 | 粘性に富み、指圧痕がつく。下部に少量の砂岩が混入する。   |

がなくザラザラして指圧痕がつく。径2mm位の炭化物が微量と粒径7mm位の八戸浮石が多量に混入し斑状を呈する。この層は北側斜面でのみ観察され、層厚は15cm～40cm位である。

- IV層 10YR $\frac{5}{2}$ 褐色土——粘性がなくザラザラして指圧痕がつく。径2mm位の塊状の炭化物が微量と粒径1.5cm位の八戸浮石が多量に混入している。この層は北側斜面にのみ観察される。層厚は15cm～40cm位である。
- V層 10YR $\frac{5}{2}$ 褐色土——粘性がなくザラザラする。疎らで指圧痕がつく。粒径4mm位の八戸浮石が少量混入する。この層は北側斜面でのみ観察される。層厚は15cm位である。
- VI層 10YR $\frac{5}{2}$ 褐色土——やや光沢があり、粘性のある堅く締まった層。本層は遺跡のほぼ全面で観察されるが、南側斜面では表土層の下位を構成する。層厚は25cm～35cmである。
- VII層 10YR $\frac{5}{2}$ 明褐色土——粘性がわずかにあり、指圧痕がつく。南側斜面でのみ観察され、層厚は10cm～30cm位である。
- VIII層 10YR $\frac{5}{2}$ 褐色土——粘性・光沢があり堅く締まった層。台地頂上部より南側斜面にかけて観察される。層厚は10cm～35cmである。
- IX層 10YR $\frac{5}{2}$ 明黄褐色土——粘性がわずかにありよく締まった層。台地頂上部にだけ観察される。層厚は15cm位である。
- X層 10YR $\frac{5}{2}$ 暗褐色土——粘性があり、指圧痕がつく。黒褐色の植生痕と粒径2mm位の青灰チャート粒が微量混入する。ほぼ全面で観察される。層厚は25cm～35cm位である。
- XI層 10YR $\frac{5}{2}$ 黄褐色土——粘性に富み指圧痕がつく。X層とXII層に挟まれ、頂上部にのみ観察される。層厚5cm～10cmである。
- XII層 10YR $\frac{5}{2}$ 褐色土——粘性に富み、良く締まっている。台地頂上部のみに観察される。層厚10cm～15cmである。
- XIII層 7.5YR $\frac{5}{2}$ 明褐色土——粘性が少しあり、緻密で堅く締まっている。粒径25cm位のチャートが多量に混入する。礫質は亜角礫や角礫が主体である。ほぼ全面で観察される。層厚は位置によって若干差がある。30cm～45cm位の層厚がある。
- XIV層 5YR $\frac{5}{2}$ 明赤褐色土——粘性がなくザラザラした砂礫層。多量の水酸化鉄が浸透している。手の平大から細礫までのチャートや砂岩の亜角礫や角礫が混入する。本層はXIII層とほぼ同質であるが、水酸化鉄が浸透していることから

細分した。本来は同位層であろう。

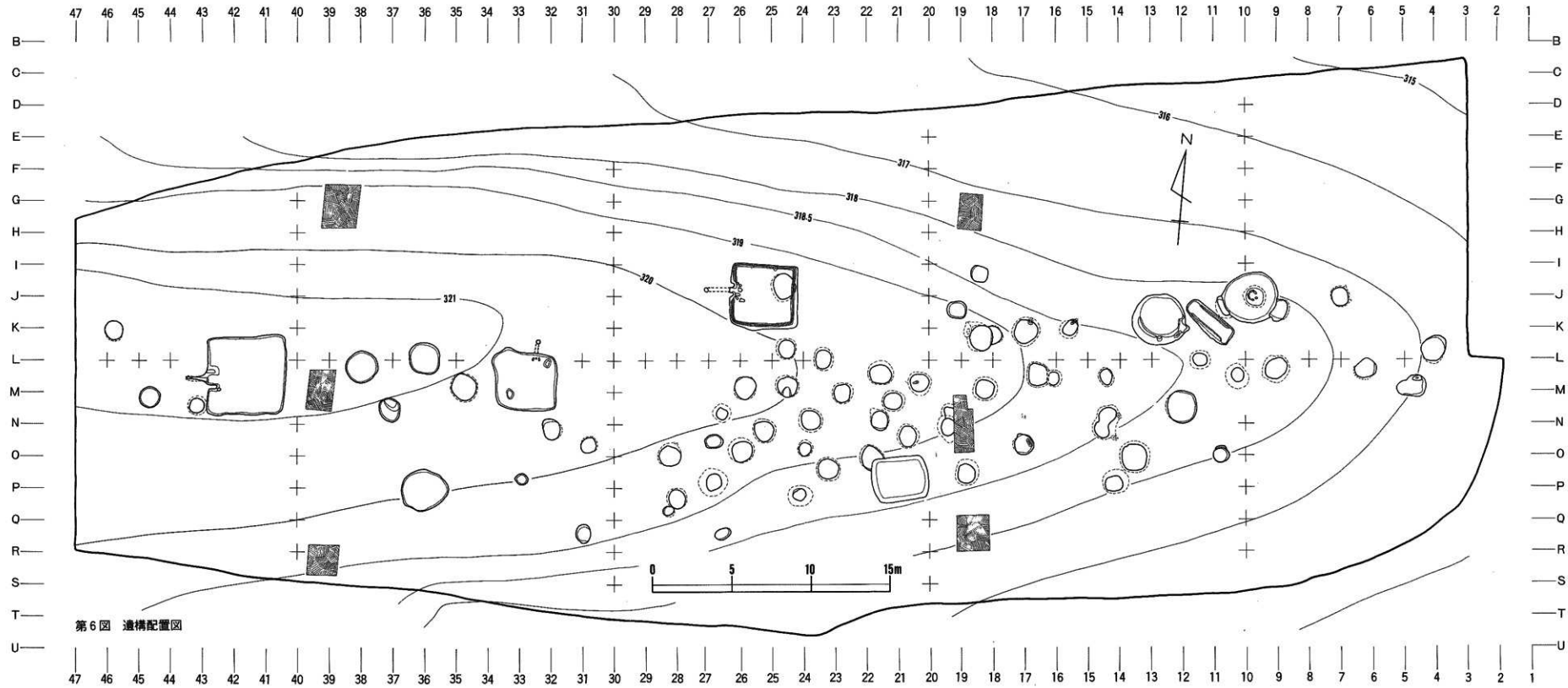
XV層 7.5YR 5明褐色土—粘性に富み、指圧痕がつく。下部に少量の砂岩が混入する。層厚は確認されていない。

以上、本遺跡の基本的な土層を上位より XV層に細分したが、その中で XIII層と XIV層は本来同位層と考えられることから、XIV層に細分されるものであろう。遺構検出面と土層の関係は次の様である。本遺跡の台地頂上部より南斜面にかけては、基本層序VI層が耕作土として利用され表土を構成している。北斜面では基本層序III層が耕作土として利用され表土を構成している。両斜面とも斜面下位は表土が厚い。遺構検出面は表土層を除去した面であり、平安時代に属する遺構・縄文時代に属する遺構ともに差がない。また、住居址埋土の最上層はクロボク質の黒色土によって構成され、この傾向にも時代的な差がない。

(高橋与右エ門)

#### 引用参考文献

- |                    |                        |               |      |
|--------------------|------------------------|---------------|------|
| ①東北地方第四紀研究グループ     | 『東北地方における第四紀海水準変化』     | 『地誌研年報』第15号   | 1969 |
| ②大浦昭二              | 『十和田火山東麓における完新世テフラの層序』 | 『第四紀研究』第11巻4号 | 1973 |
| ③大浦昭二・中川久夫他        | 『馬淵川中流・下流沿岸の段丘と火山灰』    | 『第四紀研究』第5巻1号  | 1956 |
| ④岩手県農地林務部北上山系開発調査室 | 『土地分類基本調査一戸』           | 岩手県           | 1972 |



第6図 遺構配置図

## V 検出された遺構と遺物

### (I) 遺構

(第6図)

#### 1) 住居址

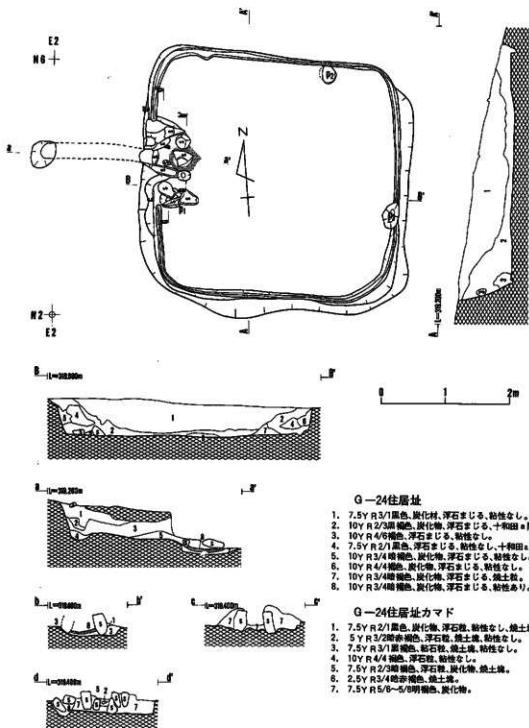
[G-24住居址] (第7・8・9図、PL3A、PL23、PL24①・⑤、PL31-1~9、PL34-9~11)

北傾斜面の上部に位置し、第Ⅱ層の八戸火山灰の再々堆積層内にクロボクが広がり検出されたものである。当住居址は南壁際でH-24ピットと重複しており、ピットを切っている。規模は4.2m×4.1mで隅丸の正方形を呈している。主軸方向は西(N-83°-W)を示す。

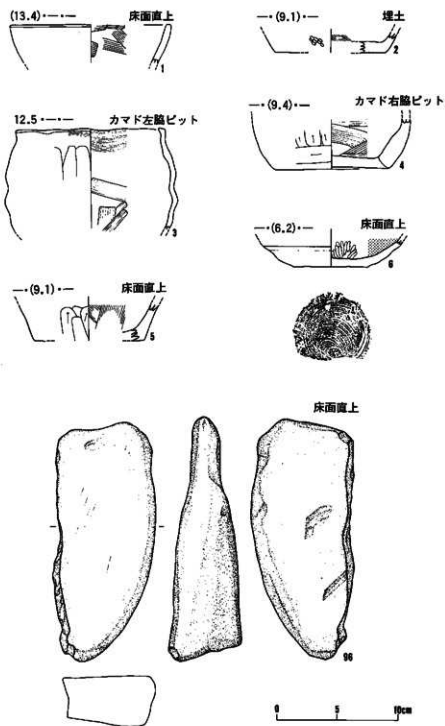
壁は床面より外傾しており、壁の中位から上位にかけては崩壊により広がっている。北壁は削割を受けており、西側が一部残存する。埋土は上部より黒色土、黒褐色土、褐色土、暗褐色土の4層に大別され、混入物、粘性等によりさらに8層に細別される。埋土の堆積はほぼレンズ状を呈しており、壁際に壁の崩壊に伴う褐色土がブロック状にみられる。混入物は径2mm~8mmの炭化物、粒径3mm~10mmの浮石粒、焼土粒、十和田 $\alpha$ 降下火山灰である。十和田 $\alpha$ 降下火山灰は床面から埋土下部にかけてブロック状に散見される。床面は小さな凹凸による起伏がみられるものの総じて平坦であり、堅く締まっている。床面の南側は地山の第Ⅴ層で構成されているが、H-24ピットの上部となる北側にかけては、0.05mの厚さで褐色土のロームにより貼り床がなされている。壁に沿って周溝が一条検出されている。カマド北袖部から壁際を廻り、カマド南袖部へ一周している。上端幅0.10m、下端幅0.04m、深さ0.04m~0.19mで断面形はU字形を呈している。

ピットは3基P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>が検出されている。P<sub>1</sub>(径0.35m×0.30m、深さ0.09m)はカマド南袖部に近接しており、楕円形を呈している。埋土中から炭化物と土器器変片が出土しており、貯蔵穴である。P<sub>2</sub>(径0.27m×0.21m、深さ0.51m)は北壁際の東寄りに位置しており、楕円形を呈している。埋土中に炭化物を含んでおり、規模等から柱穴を構成するものと思われる。P<sub>3</sub>(径0.42m×0.25m、深さ0.11m)は東壁際やや南寄りに位置しており、楕円形を呈している。埋土中に浮石粒が混入しており、性格は不明である。

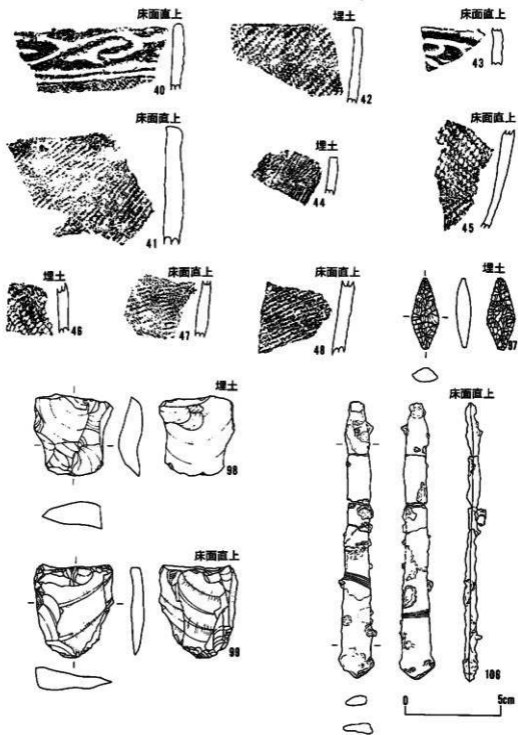
カマドは西壁やや北寄りに付設されている。焚口部に礫を用い「 $\Gamma$ 」状に構築したものである。北側焚口部に亜角礫が1個立位で基部が埋置されており、南側に礫の抜き取り痕を検出した。礫の抜き取り痕は袖部南側に横転するS<sub>3</sub>に一致することからS<sub>3</sub>が焚口部の南側の支え石に使用されたものと思われる。燃焼部に転落しているS<sub>1</sub>と袖部南側の側に横転しているS<sub>2</sub>



第7図 G-24住居址



第8図 G-24住居址・出土遺物-1



第9圖 G-24住居址・出土遺物-2



は共に焼成による赤変がみられる。また両者の剥片部分が一致し、長軸径が焚口部よりわずかに大きいことから、両者が天井の蓋を構成していたものと想定される。袖部は褐色土と礫の積み上げで構築されており、亜角礫を横位にして埋置し、褐色土を巻き付けている。

燃焼部は床面より浅皿状に掘り窪められて造られており、径0.45m×0.40mで楕円形を呈している。燃焼底面はよく焼成を受けて赤変しており、燃焼層厚0.05mを測る。燃焼部の裏に支脚を1個使用している。径0.12m×0.09mの亜角礫の基部を埋置しており、燃焼底面からの高さは0.11mである。煙道部は西壁を掘り抜いて造られた割り貫き式である。長さ2.13m、幅0.25mを測る。燃焼部からの立ち上がりは燃焼部から180°の勾配で緩やかであり、外方に延びる。外方からはわずかに傾斜して高まる。煙道壁は焼成を受け現地性焼土がみられる。煙出しはピット状を呈しており、煙道底面より0.12m下がる。煙出しには径16cm前後の10個の礫が入り込み、煙出し口を閉塞している。

遺物は埋土中位から床面にかけて縄文土器片11点（第8図1・2、第9図40～48）、土師器片4点（第8図1～6）、石器3点（第9図97～99）、石製品1点（第8図96）、鉄製品1点（第9図106）が出土している。縄文土器片と石器は重複しているH-24ピットの周辺から出土しており、住居址構築の際に粉れ込んだ可能性も考えられる。1は口縁部片である。内湾気味に立ち上がっており、口唇部は平坦である。無文化されており、若干ミガキをかけている。2は体部～底部片である。地文は単節のRLの斜行縄文である。内面にナデを施している。40は直立する口縁部～体部片である。口唇部は丸味をもち、連続した縦位の刻みが入る。口縁部に文様帯をもつ。モチーフは沈刻文による入り組三叉文である。その下部に二条の沈線を廻らし、体部と区画している。体部の地文は単節のLRの斜行縄文である。内面に油煙が、外面に煤が付着している。41は深鉢形土器の平縁の口縁部～体部片である。体部よりほぼ直立しており、口唇部は丸味をもつ。文様はもたず、地文は単節のLRの斜行縄文である。42は平縁の口縁部片である。体部より直立しており、口唇部は平坦である。文様はもたず、地文は単節のLRの斜行縄文であり、内面に横位へのナデを施している。43は口縁部片である。よく研磨されており、文様が施されているが、現状ではモチーフが不明瞭である。44は口縁部～体部片である。口縁部はほぼ直立しており、口唇部は丸味をもつ。口唇部に刻みを施している。文様はもたず、地文は単節のLRの細かい斜行縄文である。45～48は体部片である。いずれも地文は単節の縄文を施している。47の体部外面には黒斑がみられ、48の体部外面に煤が付着している。3は口クロ不使用の甕形土器の口縁部～体部片である。胎土に小石を多く含んでおり、頸部よりわずかに外反する。口唇部は丸味をもつ。器面調整は口縁部が内外面共ヨコナデ、体部外面が縦位へのケズリ、体部内面が斜めヘナデを施している。体部外面に煤が付着している。4は口クロ不使用の甕形土器の底部～体部片である。胎土に小石を多く含んでいる。器面調整は体部外面

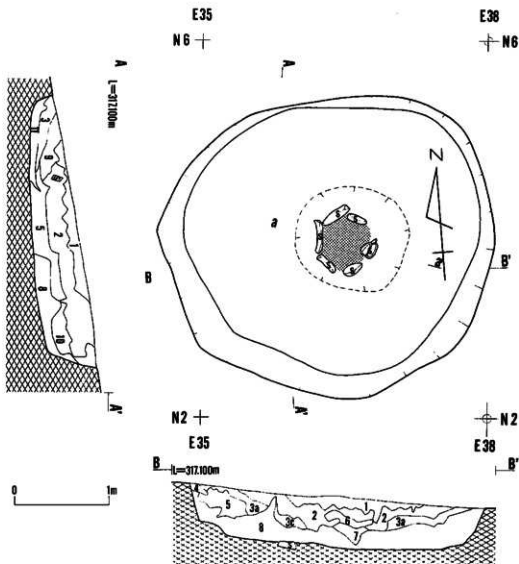
が縦位と横位へのケズリ、体部内面が横位へのナデを施している。5はロクロ不使用の甕形土器の底部～体部片である。胎土に小石、雲母を含んでいる。器面調整は体部外面が縦位へのケズリ、体部内面が斜めへのナデを施している。6はロクロ使用の壺形土器の底部～体部片である。底部は回転糸切りの切りっ放し無調整である。内面にミガキを施し、黒色処理をおこなっている。98はUtiliged-flakeである。やや方形を呈している。表裏面に第一次剥離面を大きく残しており、側縁に二次加工の細かい調整剥離をおこなっている。両面にアスファルト状のものが付着している。重量は15gである。石質は玻璃質流紋岩である。99は剥片石器である。表裏面に大きく第一次剥離面を残している。表面には両極打敲によるものと思われる相反するリングが一部にみられ、尖頭部に二次加工の調整剥離をおこなっている。断面形は楔状を呈しており、ピエスエスキューに類似している。重量は20gである。石質は玻璃質安山岩である。97は石織である。有茎であり、基部と茎部の明確な区別はつかない。断面形は凸レンズ状を呈している。調整は入念な押圧剥離である。石質は玻璃質安山岩である。96は砥石である。やや丸味のある三角形を呈している。2面に使用痕がみられる。重量は880gである。石質は砂岩である。106は南カマド袖部に近接して出土した刀子である。刃先と基部が欠損する刀身である。残存部の刃部長14.5cm、棟部厚0.4m、重量が20gである。全体に錆化が著しい。

#### [H-9住居址] (第10・11図、PL3B、PL24②～④、PL31-10-18)

北傾斜面の上部に位置し、第Ⅱ層にクロボクが広がり確認されたものである。当住居址は東壁際でH-8ピットと、西壁際でI-9ピットと、住居址内中央部でH-9ピットと重複している。いずれも当住居址がこれらのピットを切り込んでいる。規模は径3.5m×3.2mで、ほぼ円形を呈している。壁は北側から南側にかけて深く掘り込まれており、床面から内湾気味に立ち上がっている。壁高は南壁で0.59mを測る。

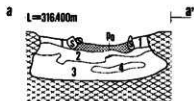
埋土は上部より黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土の4層に大別され、混入物、粘性等によりさらに11層に細別される。埋土の堆積はレンズ状を呈している。混入物としては径2mm～10mmの炭化物、径3mm～9mmの浮石粒である。床面は北壁から南壁にかけて第Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層から構成される。住居址中央部では重複するH-9ピットの上部を厚さ0.12mの褐色土で貼床が付されている。床面は径17mmの炭化物が少量点在しており、よく踏みしめられていて堅く、平担である。柱穴や施設等は検出されていない。

炉は住居址中央部に位置し、円形の石囲い炉で、規模は径0.66m×0.66mである。炉の構成礫は長軸径16cm前後の歪角礫を六個使用し、床面下12cmのところ横位に埋置したものである。構成礫の間隔は北東方向が広く、0.18mである。炉址内には炭化物、草木灰を含む黒褐色土が薄く充填している。炉の使用面はよく焼成を受けて赤変しており、焼成層厚は0.10mを測る。



H-9 住居址

1. 10Y R 7/1 黒色、炭化物、粘性なし。
2. 10Y R 2/2 黒褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R 2/3 黒褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R 3/4 暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
5. 10Y R 4/4 褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
6. 7.5Y R 7/1 黒色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
7. 10Y R 2/3 黒褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
8. 10Y R 3/4 暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
9. 10Y R 3/4 暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
10. 10Y R 3/4 暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
11. 10Y R 4/4 褐色、浮石まじる、粘性なし。



第10図 H-9 住居址



遺物は埋土下位から縄文土器が9点(第11図7~9 第11図49~54)、床面直上から3点(第11図55~57)出土している。9は口縁部を一部欠損する精製の筒形土器である。円筒形を呈しており、口縁部でわずかに内弯している。磨消し文様帯の2本の沈線により上位から6段に分けられる。1・2・4・6段は地文が単節のLRの細かい斜行縄文である。体部に酸化鉄が付着している。3・5段はやや広い磨消し帯で文様が施されている。3段にはX字文が6単位、5段には7単位、それぞれ浮彫手法により施文され、黒褐色の滑沢をもっている。7は深鉢形土器の口縁部~体部片である。口縁部は体部よりわずかに内傾しており、口唇部は平坦である。文様をもたず、地文は単節LRの斜行縄文である。外面に煤が付着している。8は口縁部片であり、内弯している。口縁部は無文化されており、横位にナデを施している。49は直立する平縁の口縁部片である。口唇部は平坦であり、地文は単節のLRの斜行縄文である。内面は斜めヘナデを施している。50は口縁部片であり、口縁端で外反する。口唇部は平坦である。地文は単節のLRの斜行縄文であり、内面にミガキを施している。51は直立する口縁部片であり、口縁部内側上端部が丸く張り出している。口唇部は平坦であり、地文は単節のRLの斜行縄文である。外面に多量の煤が付着している。52は体部片である。地文は単節の縄文であり、外面に多量の煤が付着している。53は体部片である。地文は単節の縄文であり、内面にナデを施している。54は体部片である。地文は単節の縄文であり、内面にナデを施している。外面に多量の煤が付着している。55は直立する口縁部片である。口縁部は残存部から波状口縁と推定される。磨消した後、沈刻文による施文がなされている。モチーフは不明瞭である。文様下に三条の沈線を廻らしている。内面は横位ヘナデを施している。外面に少量の煤が付着している。56は体部片である。地文は単節の縄文である。外面に煤が少量付着している。57は体部片である。地文は単節の縄文であり、内面にナデを施している。

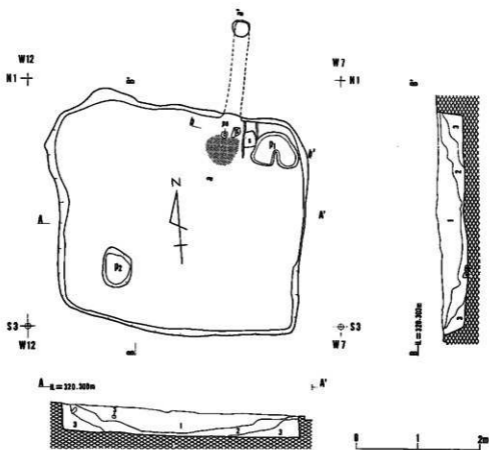
〔J-31住居址〕(第12・13図、PL4、PL25、PL26①~⑤)

尾根頂部の中央に位置する。第IV層の褐色土にクロボクが広がり検出されたものである。規模は4.2m×3.7mで方形を呈しており、若干北西コーナーが張り出している。主軸方向は西(N-12-W)を示す。壁は底面より直立しており、壁高は西壁で0.47mを測る。埋土は上部より黒色土、暗褐色土、褐色土の3層に細分され、レンズ状を呈している。混入物は径3mmの炭化物、粒径3mm~5mmの浮石粒、十和田a降下火山灰である。十和田a降下火山灰は底部から埋土下部にかけて少量ブロック状に散見される。床面は地山の第VI層により構成されており、ピットは2基P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>が検出されている。P<sub>1</sub>(径0.69m×0.67m、深さ0.15m)はカマド東袖部に隣接しており、平面形は不整形である。断面形は浅皿形を呈しており、埋土中から炭化物や甕の体、底部片が出土しており、貯蔵穴ピットである。P<sub>2</sub>(径0.66m×0.46m、深さ0.20

m) は南西コーナー寄りに検出されており、平面形は楕円形を呈している。断面形は鍋底形で、埋土中に径13mmの炭化物と焼土粒を含んでおり、貯蔵穴状ピットと思われる。周溝、柱穴、施設共に検出されていない。

カマドは北壁東寄りに付設されている。カマドの構築については天井部、袖部が崩壊しているため不明である。しかし、東袖部のわずかな残存部分から、袖部は直角礫を埋置し、その周りに地山の褐色土を巻き付けて構築したものと推定される。燃焼部は床面を使用しており、径0.51m×0.47mで円形を呈している。燃焼底面はよく焼成を受けて赤変しており、燃焼層厚は0.10mを測る。燃焼部の奥に支脚を1個使用している。素材は土製品の轆羽口である。轆羽口は鍛冶、製鉄用のものを転用させており、燃焼部下0.14mに埋置し、燃焼底面からの高さは0.09mである。煙道部は地山の北壁を掘り抜いて造られた割り貫き式である。長さ1.92m、幅0.24mを測る。燃焼部からの立ち上がりは傾斜をもたず外方に延びている。外方からは平坦であり、煙道壁はよく焼けており、現地性焼土がみられる。煙出しはピットをもたず、煙道底面と同比高で立ち上がる。

遺物はカマド周辺や貯蔵穴ピットから多く出土している。土師器片が9点(第13図10~18)、土製品が1点(第13図19)、鉛錐279gである。土師器片はいずれもロクロ不使用の変形土器で胎土に多量の小石を含んでいる。16は約1/2が残存しており、口径18.1cm、底径9.9cm、器高21.4cmを測る。最大径は体部の中位にあり、21.6cmである。口縁部は頸部より外反しており、口唇部は丸味をもつ。体部は肩部から中位にかけて腰らみ、下位でわずかに窄む。底部は木葉底である。器面調整は口縁部が内外面共ヨコナデで、内面にも一部ナデをおこなっている。体部は内外面共不定方向にナデを施している。体部下位に靱痕と思われるものが付着していたが鑑定結果は別項で記述する。11は口縁部~体部片である。口縁部はわずかに外傾しており、口唇部は丸味をもつ。器面調整は口縁部内面がヨコナデであり、体部外面が縦位ヘケズリ、内面が斜めヘナデをおこなっている。10は変形土器の口縁部~体部片である。口縁部は体部よりわずかに外反しており、口唇部は丸味をもつ。器面調整は口縁部の内面がヨコナデであり、体部外面が斜めへのナデ、体部内面が横位へのハケメ、不定方向へのナデである。12は口縁部~体部片である。口縁部は頸部から強く外反しており、口唇部は丸味をもつ。器面調整は口縁部内外面がヨコナデであり、体部外面が縦位へのケズリ、内面が横位へのナデである。17は口縁部~体部片である。口縁部は体部より外反している。器面調整は口縁部が内外面共ヨコナデであり、体部外面が斜めへのケズリ、体部内面が横位へのナデである。15は口縁部~体部片である。口縁部は頸部より強く外反している。器面調整は口縁部が内外面共ヨコナデで内面に一部縦位ヘナデを施している。体部外面は斜めヘケズリ、内面は不定方向ヘナデを施している。14は底部~体部片である。体部下位は腰らみをもって窄まる。底部は張り出しており、木葉底である。器面

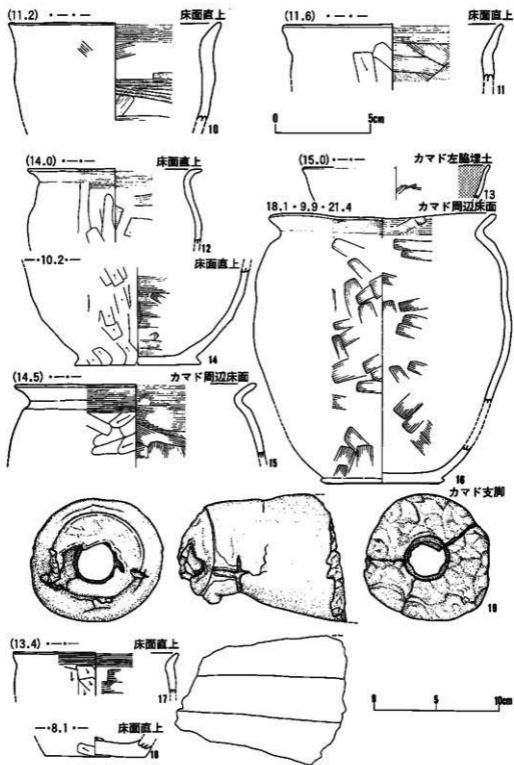


Ⅱ-31住居址

1. 7.5Y R 1.7/1 黒色、八戸浮石まじり、粘性なし。
2. 10Y R 3/3 暗褐色、炭化物、八戸浮石まじり、粘性あり、十和田・陸下火山灰。
3. 10Y R 4/6 褐色、粘性あり。



第12図 Ⅱ-31住居址



第13図 J-31住居址・出土遺物



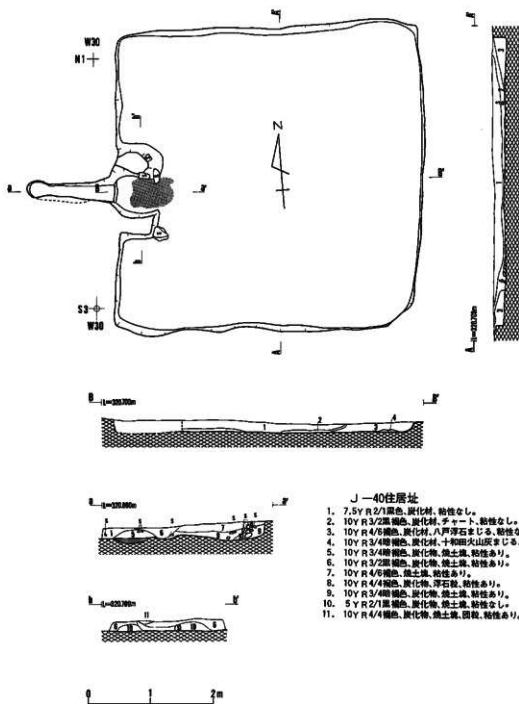
調整は体部外面が縦位へのケズリ、体部内面が横位ヘナデを施している。18は体部～底部片である。器面調整は体部外面が斜めへのナデであり、底部外面にケズリを施している。13はロクロ使用の環の口縁部～体部片である。口縁部はわずかに体部より外反している。器面調整は内面にミガキを施し、黒色処理をおこなっている。19は支脚に転用された轆羽口である。体部が破損しており、全長は21.9cmである。残存体部の断面形は円形を呈しており、径10.2cm×9.9cmを測る。羽口は円形を呈しており、径6.3cm×5.9cmを測る。高温により胎土に含まれるガラス質が溶融して黒色の光沢を放っている。通気孔は円形を呈しており、径3.0cm×2.9cmを測る。

〔J-40住居址〕 (第14・15図、PL 5 A, PL 26⑥～⑩)

根根頂部の西側に位置する。第V層の褐色土にクロボクが広がり検出されたものである。規模は4.9m×4.9mで方形を呈している。主軸方向は西(N-82°-W)を示す。埋土は上部より黒色土、黒褐色土、褐色土、暗褐色土の4層に分かれ、レンズ状を呈している。混入物は径3mm～6mmの炭化物、粒径3mmの浮石粒、十和田a降下火山灰、チャートである。壁は底面よりわずかに外傾している。床面は地山の第Ⅲ層で構成されており、チャートの露頭による凹凸の起伏がみられる。床面に径17mmの炭化物が少量点在しており、やや堅い。柱穴、周溝等の施設は検出されていない。

カマドは西壁中央に付設されている。カマドの構築は天井部が崩壊しており一部不明であるが軸部は亜角礫を横位に埋置し、暗褐色土を巻き付けて造られている。燃焼部は床面を使用しており、径0.67m×0.46mで不整形を呈している。燃焼底面はよく焼成を受け赤変しており、燃焼層厚0.09mを測る。煙道部は西壁を掘り込んで造られており、溝状を呈している。長さ1.68m、幅0.26mである。燃焼部からの立ち上がりは燃焼底面から200の勾配で緩やかに外方に延びている。外方からは緩やかに下る。煙道側壁は焼成を受け、現地性焼土がみられる。煙出しはピットをもたず、煙道底面の延長のまま立ち上がる。煙出しには多数の亜角礫、亜円礫、焼土塊が充填されていた。

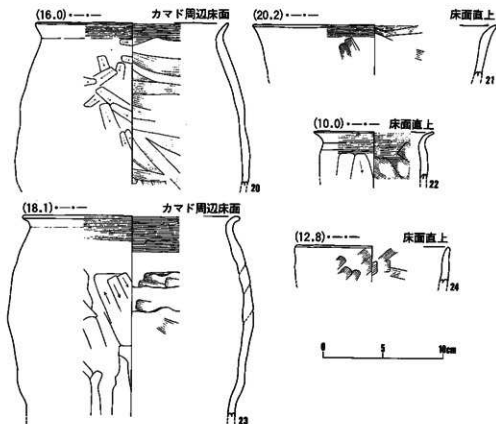
遺物はロクロ不使用の土師器片が5点(第15図20～24)出土していた。いずれも変形土器で胎土に小石を含んでいる。20は口縁部～体部片である。口縁部は頸部より外傾しており、口唇部は細く丸味をもつ。体部は頸部より徐々に脹らみをもつ。器面調整は口縁部が内外面共ヨコナデ、体部外面は不定方向ヘケズリ、内面は横位ヘナデを施している。23は口縁部～体部片であり、巻き上げ成形である。口縁部は頸部より外反しており、口唇部は丸味をもつ。器面調整は口縁部が内外面共ヨコナデであり、体部外面が斜めヘケズリ、内面が横位ヘナデを施している。22は口縁部～体部片である。口縁部は頸部より外反しており、口唇部は丸味をもつ。頸部に軽い段をもつ。器面調整は口縁部内外面がヨコナデであり、体部外面は横位ヘ



#### J-40住居址

1. 7.5Y R2/1黒色、炭化物、粘性なし。
2. 10Y R3/2黒褐色、炭化物、チャート、粘性なし。
3. 10Y R4/6褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R3/4暗褐色、炭化物、十和田火山灰まじる、粘性なし。
5. 10Y R3/4暗褐色、炭化物、焼土塊、粘性あり。
6. 10Y R3/2黒褐色、炭化物、焼土塊、粘性あり。
7. 10Y R4/6褐色、焼土塊、粘性あり。
8. 10Y R4/6褐色、炭化物、浮石殻、粘性あり。
9. 10Y R3/4暗褐色、炭化物、焼土塊、粘性あり。
10. 5 Y R2/1黒褐色、炭化物、焼土塊、粘性なし。
11. 10Y R4/4褐色、炭化物、焼土塊、団粒、粘性あり。

第14図 J-40住居址



第15図 J-40住居址・出土遺物

のナデと縦位へのケズリ、体部内面は横位と斜めヘナデを施している。21は口縁部～体部片である。口縁部は体部より外反しており、口唇部は丸味をもつ。器面調整は口縁部外面がヨコナデ、内面が斜めヘのナデ、体部が内外共斜めヘナデを施している。24は口縁部～体部片である。口縁部にくびれがなく体部より直立している。口唇部は丸味をもつ。器面調整は内外面共斜めヘナデを施している。

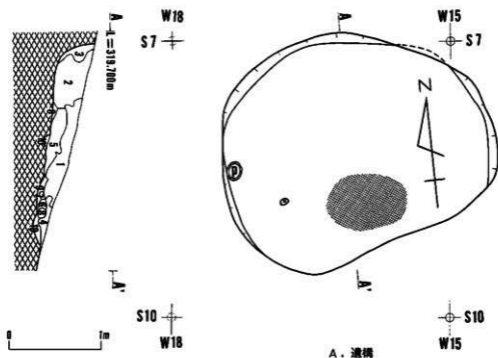
〔N-35住居址〕 (第16・17図、PL 5 B, PL 27①～③, PL 32-1～3)

南傾斜面の下部に位置し、第V層にクロボクが広がり確認されたものである。当住居址の南東側は一部削平を受けている。規模は径3.0m×2.1mで楕円形を呈している。壁は南側から北側にかけて深く掘り込まれており、床面より内弯気味に立ち上がる。壁高は北壁で0.35mを測る。

埋土は上部より黒褐色土、暗褐色土、褐色土、赤褐色土の4層に大別され、混入物、粘性等よりさらに9層に細別される。混入物は径2mm~12mmの炭化物、粒径1mm~4mmの浮石粒、焼土粒である。床面は地山の第Ⅵ層で構成されており、北側から南側にかけて緩やかに下がり、堅く締まっている。ピットは西壁際に1基P<sub>1</sub>(径0.21m×0.17m、深さ0.20m)が検出されており、炭化物を含んでおり、柱穴を構成するものと思われる。

炉は住居址内や南側に位置しており、地床炉である。径0.85m×0.60mで楕円形を呈している。炉の使用面はよく焼成を受けて赤変しており、燃焼層厚は0.12mを測る。

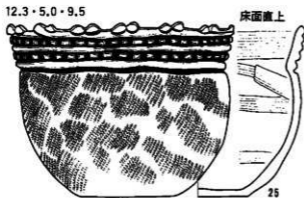
遺物は床面直上から縄文土器が6点(第16図25・第17図26・27、58~60)、石器が2点(第17図100・101)出土している。26は深鉢形土器の口縁部~体部片である。口縁部は平縁であり、体部よりわずかに内湾している。口唇部は平坦である。口縁部を磨消して、文様を施している。モチーフはX字文を連続させている。文様の上部に一条、下部に三条の沈線を廻らしている。体部の地文は単節のLRの斜行縄文である。内面にナデを施しており、体部外面に煤が付着している。25は口縁部と体部の一部が欠損する鉢形土器である。口径12.2cm、底径4.8cm、器高9.4cmである。口縁部は頸部より外傾しており、口唇部は丸味をもつ。口唇部に2個一對のB形突起が15組付している。体部最大径は体部上位にある。口縁部を磨消して文様帯を構成している。モチーフは二段の刻み目帯である。文様下部に一条の沈線を廻らしている。体部は単節のLRの斜行縄文であり、内面は斜めヘナデを施している。体部外面に少量の煤が付着している。27は口縁部と体部の一部が残存する壺形土器である。口径5.7cm、底径4.7cm、器高9.7cmである。口縁部は体部より外反しており、口唇部は平坦である。体部は球形を呈しており、最大径は体部中位にあり9.2cmを測る。口縁部上位から段をもち、中位から下位にかけて磨消し無文帯を構成している。無文帯には横位ヘナデが施されている。口縁部上位と体部の地文は単節のLRの斜行縄文である。58は口縁部~体部片である。口縁部は体部より直立しており、口唇部は丸味をもつ。口唇部に2個一對のB形突起をもつ。文様は沈線により施文されているが、モチーフは不明である。59は平縁の口縁部片である。口唇部は丸味をもつ。文様帯をもたず、地文は単節のLRの斜行縄文である。内面は横位ヘナデを施している。60は体部片である。地文は単節の縄文である。外面に煤が付着している。101は円盤状石器である。両面から打欠による全周剝離をおこない、円形に仕上げている。石質は安山岩である。100も円盤状石器である。丸味のある一部の自然面を残し、打欠による剝離をおこない、円形を呈している。石質は安山岩である。



A. 遺構

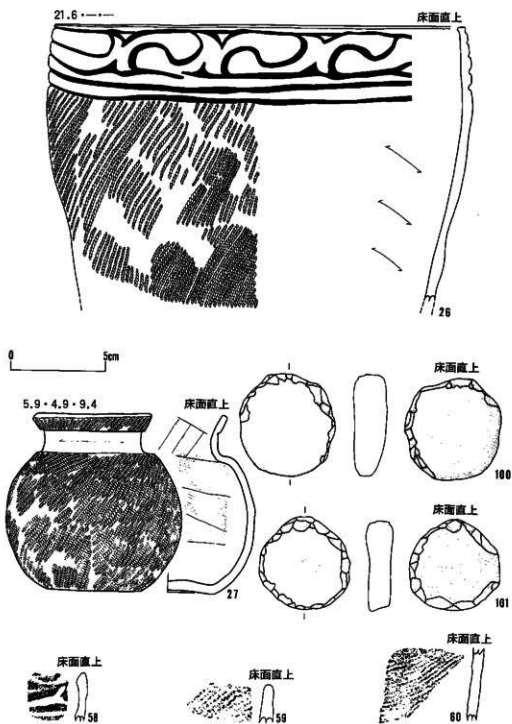
N-35住居址

1. 10Y R3/1黒褐色、炭化物、浮石まじる。
2. 10Y R3/3暗褐色、炭化物、浮石まじる、焼土粒。
3. 10Y R4/4褐色、炭化物、浮石まじる。
4. 10Y R2/3黒褐色、炭化材、焼土。
5. 10Y R3/2黒褐色、炭化材、浮石まじる、焼土。
6. 10Y R2/3黒褐色、炭化材、焼土。
7. 5Y R4/8赤褐色、焼土。
8. 10Y R4/6褐色、炭化物。
9. 7.5Y R4/3暗褐色、炭化物、浮石まじる、焼土。
10. 5Y R4/4にぶい赤褐色、焼土。



B. 遺物

第16図 N-35住居址



第17图 N-35住居址·出土遺物

## 2) 住居址状遺構

### 〔H-11住居址状遺構〕（第18図、PL 6 A, PL32-4）

尾根頂部に位置し、第IV層にクロボクが広がり確認されたものである。規模は径3.5m×3.2mで円形を呈している。壁は床面より内弯気味に立ち上がり、西壁から東壁にかけて崩壊により広がっている。壁面には炭化物が少量検出され、2カ所木根による擾乱を受けている。壁高は南壁で0.57mを測る。埋土は上部から黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土の4層に大別され、混入物、粘性等によりさらに8層に細別される。埋土の堆積はレンズ状を呈している。混入物は径2mm～7mmの炭化物、粒径1mm～8mmの浮石粒である。床面は地山の第X層であり、平坦で、堅くよく締まっている。床面に径6mmの炭化物が少量点在している。炉、柱穴、施設等が検出されないことから住居址と認定することができず、住居址状遺構とした。

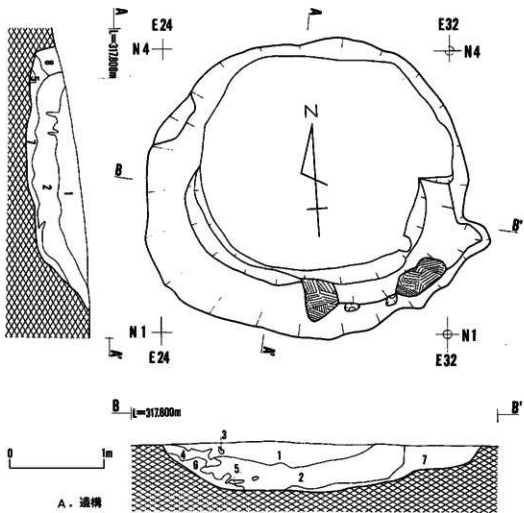
遺物は南東部埋土中位から縄文土器片が2点（第18図28・61）出土している。28は底部～体部片である。地文は単節のLRの斜行縄文である。内面には斜めへのナデが施されている。61は体部片である。地文は単節の縄文であり、内面にナデを施している。

### 〔N-19住居址状遺構〕（第19図、PL 6 B, PL27⑤）

南傾斜面の中部に位置する。第V層の褐色土にクロボクが広がり検出されたものである。当遺構は北西コーナーでM-21ピットと重複しており、ピットを切っている。平面形は長方形を呈しており、規模は径3.51m×2.81mで長軸方向は東西である。壁は床面からわずかに外傾しており、壁高は北壁で1.16mを測る。南壁から西壁にかけて壁沿いに床面より高さ0.25m、幅0.035mの暗褐色土が選っている。暗褐色土内に炭化物を含んでおり、その形状から壁際に板状の施設がなされていたことを窺わせる。埋土は上部より黒褐色土、暗褐色土、黒色土、黄褐色土、褐色土の5層に大別されるが、混入物、粘性等により16層に細別される。埋土の堆積はレンズ状を呈している。混入物は径2mm～4mmの炭化物、粒径2mm～7mmの浮石粒、焼土粒、十和田a降下火山灰、チャート、砂礫岩である。

床面は地山の第Ⅹ層で構成されており、チャートの露頭による凹凸が多くみられる。床面は堅く、径10mmの炭化物が多量に点在している。床面上5～10cmには蓋の炭化物が薄く一面に覆っていた。床面中央にはピット状のものが1基西方向に斜めに掘り込まれているが、柱穴と考えられない。当遺構にはカマド、柱穴、施設等が検出されておらず住居址と認定することができず、住居址状遺構とした。

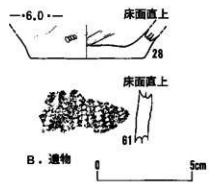
遺物は北西埋土上位から土師器片が1点（第19図29）出土している。29は甕形土器の口縁部



A. 遺構

H-11住居址状遺構

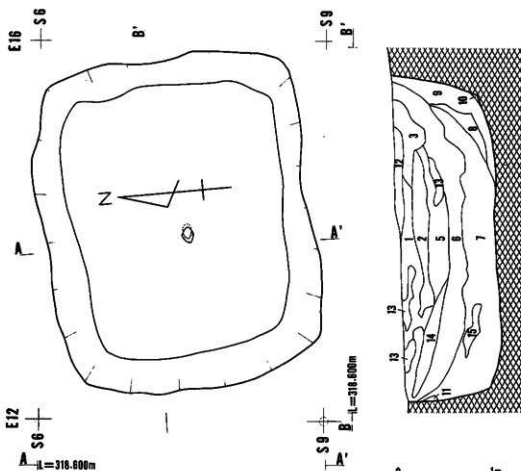
1. 10Y R7/1 黒色、粘性なし。
2. 10Y R2/3 黒褐色、炭化物、浮石まじり、粘性なし。
3. 10Y R2/3 黒褐色、炭化物、浮石まじり、粘性なし。
4. 10Y R3/3 暗褐色、炭化物、浮石まじり、粘性なし。
5. 10Y R4/6 褐色、粘性あり。
6. 10Y R3/4 暗褐色、炭化物、浮石まじり、粘性なし。
7. 10Y R4/4 褐色、炭化物、浮石まじり、粘性なし。
8. 10Y R3/3 暗褐色、炭化物、浮石まじり、粘性なし。



B. 遺物

第18図 H-11住居址状遺構

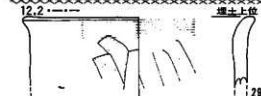
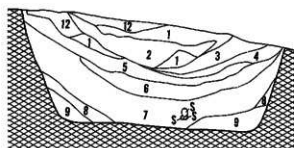




A 遺構

N-19住居址

1. 10Y R2/2黒褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R3/3暗褐色、八戸浮石、焼土粒まじる、粘性あり、十和田=降下火山灰混入する。
3. 7.5Y R1.7/1黒色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性少々あり、焼土粒が混入する。
4. 10Y R3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし、焼き土が混入する。
5. 10Y R1.7/1黒色、八戸浮石まじる、粘性あり、焼き土粒が混入する。
6. 10Y R2/2黒褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性あり、砂粒混入する。
7. 10Y R2/4炭化物、八戸浮石まじる、粘性あり、小砂粒混入する。
8. 10Y R4/5-5黄褐色、粘性あり。
9. 10Y R4/4褐色、粘性あり、チャート。
10. 10Y R4/4暗褐色、炭化物、粘性あり。
11. 10Y R2/2黒褐色、粘性なし、焼土粒混入する。
12. 10Y R3/3暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし、焼土粒混入する。
13. 10Y R3/4暗褐色、炭化物、粘性あり。
14. 10Y R3/3褐色、粘性あり、十和田火山灰混入する。
15. 10Y R3/2黒褐色、粘性あり。



B. 遺物

第19図 N-19住居址状遺構

一部部片である。胎土に小石が含まれている。口縁部は頸部より外反しており、口唇部は丸味をもつ。器面調整は口縁部内外面共ヨコナデであり、体部は内外面共縦位ヘナデが施されている。

### 3) ビット

#### [H-7ビット] (第20図、PL7A)

北傾斜面の上部に位置する。平面形は開口部が楕円形で底部は不整形を呈している。開口部径1.26m×1.12m、底部径1.34m×1.10m、深さは北東壁で0.55mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へわずかに内傾している。埋土は底面より褐色土、黒褐色土の2層に細分され、レンズ状を呈している。混入物は粒径1mm～7mmの浮石粒の炭化物、スコリアである。底面は第Ⅷ層から構成されており、平坦でよく締まっている。出土遺物はない。

#### [H-9ビット] (第20図、PL7B、PL32-5-8)

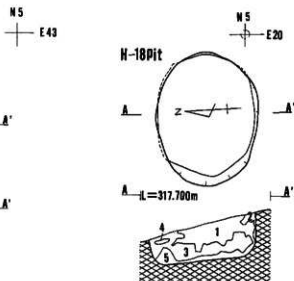
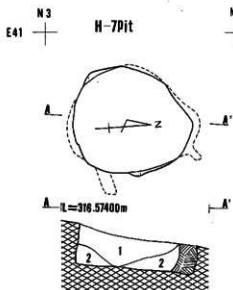
北傾斜面の上部に位置する。当ビットはH-9住居址の炉下であり、開口部を住居址に切られている。平面形は残存する開口部、底部共円形を呈している。残存する開口部径1.16m×1.07m、底部径1.44m×1.30m、残存する開口部までの深さは北壁で0.46mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へ等脚台形状に内傾している。埋土は上部より褐色土、黒色土、暗褐色土の3層に大別され、混入物、粘性等によりさらに4層に細別される。第1層の褐色土はH-8住居址の炉の構築の際に貼られたものである。混入物は径2mm～10mmの炭化物、粒径1mm～7mmの浮石粒、団粒、縄文土器片である。底面は地山の第X層で構成されており、底面には径10mmの炭化物が少量点在している。底面の状況は平坦でよく締まっている。

遺物は埋土中位から下位にかけて縄文土器片が4点(第20図62-65)出土している。

62・63は体部片である。地文は単筋の縄文である。64は体部片であり、地文は縄文である。内外面に煤が付着している。65は体部片であり、無文である。

#### [H-18ビット] (第20図、PL7C)

北傾斜面の中部に位置する。開口部と底部共楕円形を呈している。開口部径1.41m×1.08m、底部径1.19m×1.02m、深さは南壁で0.61mを測る。断面形はピーカー形を呈しており、底面より開口部へ直立する。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに5層に細別される。混入物は径3mm～4mmの炭化物、粒径4mm～7mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅷ層で構成されており、平坦で軟らかい。底面に径2mmの炭化物が微量に点在している。出土遺物はない。

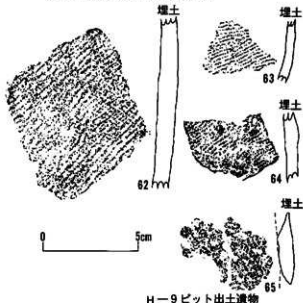
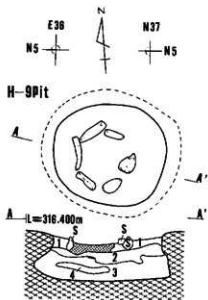


H-7ピット

1. 10Y R 3/2 黒褐色、炭化物、浮石粒、粘性なし。
2. 7.5Y R 4/6 褐色、浮石粒、スコリア。

H-18ピット

1. 10Y R 3/3 暗褐色、炭化物、浮石まじり、粘性なし。
2. 10Y R 3/4 暗褐色、浮石まじり、粘性なし。
3. 10Y R 3/4 暗褐色、炭化物、浮石まじり。
4. 10Y R 3/3 暗褐色、浮石まじり、粘性なし。
5. 10Y R 4/4 褐色、浮石まじり、粘性なし。



H-9ピット

1. 10Y R 4/4 褐色、炭化物、浮石まじり、粘性なし、団粒。
2. 7.5Y R 2/1 黒色、炭化物、浮石まじり、粘性なし。  
縄文土器片。
3. 10Y R 3/4 暗褐色、炭化物、浮石まじり、粘性なし。
4. 10Y R 4/4 褐色、炭化物、浮石まじり、粘性あり。

H-9ピット出土遺物

第20図 ピット

〔H-24ピット〕（第21・22図、PL7D①～③、PL28①～③）

北傾斜面の上部に位置する。当ピットはG-24住居址の床面下に検出されたもので、住居址に切られている。残存開口部は楕円形で、底部は円形を呈している。残存開口部径1.59m×1.42m、底部径1.82m×1.73m、深さは残存開口部の南西壁で0.63mを測る。断面形はフラスコ形を呈している。壁は底面より残存開口部へ内傾している。埋土は上部より褐色土、黒褐色土、暗褐色土、黒色土の4層に大別され、混入物、粘性等よりさらに9層に細別される。混入物は炭化物、粒径3mm～5mmの浮石粒である。底面は地山の第VI層から構成されており、平坦で軟らかい。底面に径4mmの炭化物が微量点在しており、副穴1基P<sub>1</sub>を伴う。P<sub>1</sub>（径0.72m×0.46m、深さ0.05m）は南壁から底面にかけて検出しており、楕円形を呈している。

遺物は埋土上位から縄文土器片3点（第21図30・66・67）、底面直上からほぼ完形の縄文土器2点（第22図31・32）が出土している。66は薄手の口縁部～体部片である。体部より口縁部へ内湾しており、口唇部は丸味をもつ。口縁部は小波状口縁であり、小波状突起直下を一部磨消している。文様をもたず、地文は単節のLRの斜行縄文である。内面は横位ヘケズリを施している。67は口縁部～体部片である。体部は内湾しており、口縁部は頸部から外傾する。沈線により磨消し文様帯と体部の単節の縄文に区画される。モチーフは沈刻文によるC字文である。内面は横位ヘナデを施している。30は底部～体部片である。地文は単節のLRの斜行縄文である。外面に黒斑がみられる。31は倒立位で深鉢形土器と並んで出土した台付鉢形土器である。口縁部と台部が一部欠損しており、口径20.7cm、残存高17.9cmである。口縁部は五叉の波状口縁であり、波長と波長の間の口唇部に4～5本の刻みを施している。口縁部は外傾しており、口唇部は丸味をもつ。口縁部に文様を施し、体部は単節のLRの斜行縄文である。モチーフは沈刻文による三叉文と魚眼状円形文を二段にわたり施文している。文様の上部に一条、下部に二条の沈線を廻らしている。内面は口縁部にミガキ、体部に斜めへのナデを施している。体部外面は中位から上位にかけて煤が、内面には油煙が付着している。32は底面直上から倒立位で台付鉢形土器と並んで出土した完形の深鉢形土器である。底部よりわずかに開いてカーブし、口縁部で内湾する。口唇部は平坦である。文様をもたず、地文は単節のLRの斜行縄文と横位への縄文である。内面は斜めヘナデを施している。体部外面の中位から上位にかけて煤が内面中位から下位にかけて油煙が付着している。

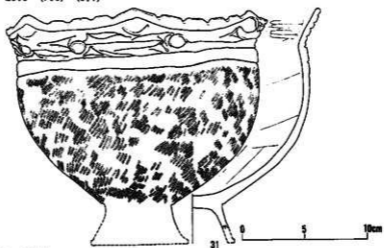
〔I-8ピット〕（第23図、PL8A）

北傾斜面の上部に位置する。当ピットは西側でH-8住居址と重複しており、住居址に切られている。平面形は、前記の理由により不明である。南壁に円形の張り出しをもっている。開口部径、底部径共同様に不明であり、深さは南壁で0.50mを測る。断面形はフラスコ形を呈し



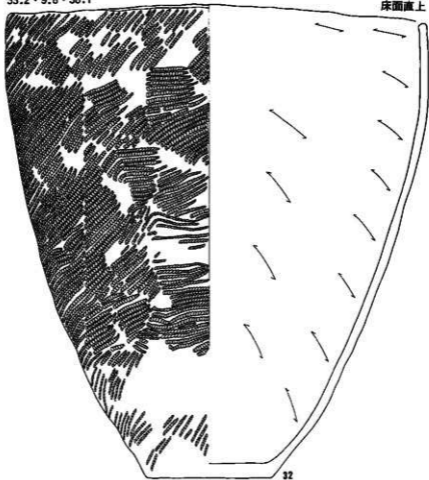
20.8・(7.6)・(9.1)

床面直上



33.2・9.8・38.1

床面直上



第22図 H-24ビット・出土遺物

〔I-10ピット-2〕 (第23図、PL8C)

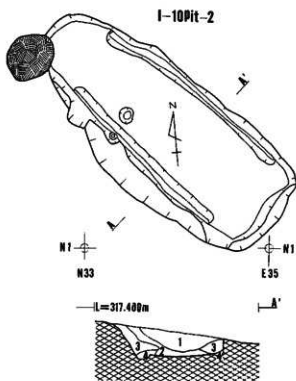
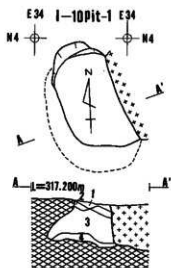
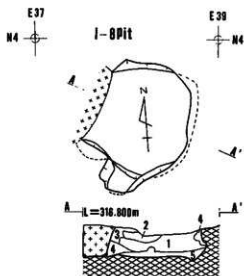
北傾斜面の上部に位置する。平面形は長方形を呈しており、北西コーナーを木根による攪乱を受けている。南西壁の上部は崩壊による広がりが見られる。開口部径3.20m×1.37m、底部径2.94m×1.05m、深さは南東壁で0.31mを測る。断面形は逆台形を呈している。埋土は上部より黒色土、黒褐色土、暗褐色土の3層に大別され、レンズ状を呈している。混入物、粘性等によりさらに4層に細別される。混入物は径5mm~17mmの炭化物と粒径4mmの浮石粒である。炭化物の混入が多く、埋土下部から底面にかけて散見される。底面は地山の第V層で構成されており、平坦で軟らかい。北東壁際と南西壁際に二条の周溝が走向している。断面形は逆台形を呈しており、上端幅0.13m、下端幅0.05m、底面よりの深さ0.07mである。南西壁寄りから副穴1基P<sub>1</sub>(径0.17m×0.16m、深さ0.03m)が検出されている。出土遺物はない。

〔I-15ピット〕 (第24図、PL8D)

北傾斜面の上部に位置する。開口部は楕円形、底部は円形を呈している。開口部径1.10m×0.84m、底部径1.07m×1.02m、深さは北東壁で1.23mを測る。断面形はフラスコ形を呈している。北壁から東壁にかけては底面より開口部までは外傾するが、北東壁から南壁にかけては内傾している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに8層に細別される。混入物は径2mm~24mmの炭化物、粒径2mm~12mmの浮石粒、砂岩である。底面は地山の第VI層から構成されており、堅くよく締まっている。底面に径2mmの炭化物が微量点在しており、中央部がやや窪む。副穴を3基P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>伴う。P<sub>1</sub>(径0.04m×0.12m、深さ0.52m)は底面から北壁にかけて検出されており、長円形を呈している。P<sub>2</sub>(径0.27m×0.10m、深さ0.23m)は底面から東壁にかけて検出されており、長円形を呈している。P<sub>3</sub>(径0.37m×0.09m、深さ0.23m)は底面から南東壁にかけて検出されており、長円形を呈している。出土遺物はない。

〔I-16ピット〕 (第24図、PL8E①②、PL32-11)

北傾斜面の上部に位置する。開口部はほぼ円形、底部は楕円形を呈する。開口部径1.56m×1.45m、底部径1.80m×1.55m、深さは南西壁で0.93mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へ等脚台形状に内傾する。埋土は上部より黒褐色土、暗褐色土、褐色土の3層に大別され、混入物、粘性等によりさらに13層に細別される。混入物は径3mm~14mmの炭化物、粒径3mm~10mmの浮石粒、粒径1mm~3mmの焼土粒である。多量の炭化材、焼土が埋土上位から下位にかけて散見している。底面は地山の第VI層で構成されており、平坦で堅く緻密である。底面には径5mmの炭化物が少量点在しており、北側に径0.20m×0.09mの直角礫が



#### I-8ピット

1. 10Y R 2/2 黒褐色、炭化物、八戸浮石、粘性なし。
2. 10Y R 4/4 褐色、炭化物、八戸浮石、粘性なし。
3. 10Y R 3/3 暗褐色、炭化物、八戸浮石、粘性なし。
4. 10Y R 3/3 暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
5. 10Y R 3/4 暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし、細礫まじる

#### I-10ピット-1

1. 10Y R 3/3 暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R 4/4 褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R 3/3 暗褐色、炭化物、粘性なし。
4. 10Y R 3/4 暗褐色、浮石散、粘性あり。

#### I-10ピット-2

1. 10Y R 7/1 黒色、炭化物、粘性なし。
2. 10Y R 2/2 黒褐色、炭化物、粘性なし。
3. 10Y R 3/3 暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R 2/2 黒褐色、炭化物、粘性なし。



第23図 ピット



1個横転している。当ピットから2基P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>の副穴が検出されている。P<sub>1</sub>(径0.22m×0.20m、深さ0.07m)は北壁際に位置しており、ほぼ円形を呈している。P<sub>2</sub>(径0.21m×0.12m、深さ0.17m)は南壁際に位置しており、楕円形を呈している。

遺物は埋土中位から縄文土器の体部片が1点(第24図68)出土している。68は体部片である。地文は単節の縄文であり、内面は不定方向にナデが施されている。

#### [I-17ピット] (第24図、PL9A)

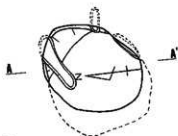
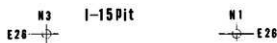
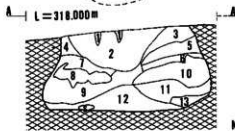
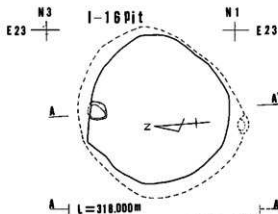
尾根頂部の中央に位置する。当ピットはI-18ピットと西側で重複しており、I-18ピットに切られている。開口部、底部の形状は前記の理由により不明である。開口部径、底部径共同様に不明であり、深さは北西壁で0.49mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へ内傾する。埋土は上部より暗褐色土、褐色土、黒褐色土の3層に大別され、混入物、粘性等によりさらに5層に細別される。混入物は径2mm~11mmの炭化物、粒径3mm~9mmの浮石粒である。底面は地山の第VI層で構成されており、ほぼ平坦で堅く緻密である。出土遺物はない。

#### [I-18ピット-1] (第25図、PL9B①②)

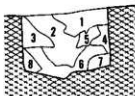
北傾斜面の上部に位置する。開口部は円形、底部は楕円形を呈している。開口部径1.19m×1.03m、底部径1.20m×1.03m、深さは東壁で0.59mを測る。断面形はピーカー形を呈しており、底面よりわずかに外傾する。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに3層に細別される。混入物は粒径5mm~8mmの浮石粒である。底面は地山の第V層で構成されており、平坦で軟らかい。底面に径4mmの炭化物が微量に点在している。出土遺物はない。

#### [I-18ピット-2] (第25図、PL10A、PL29①④)

尾根頂部の中央に位置する。当ピットはI-17ピットと東側で重複しており、I-17ピットを切っている。開口部は円形、底部は楕円形を呈している。開口部径1.58m×1.47m、底部径1.77m×1.53m、深さは北西壁で0.78mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部まで内傾している。埋土は上部より暗褐色土、黒褐色土、褐色土の3層に大別され、混入物、粘性等からさらに9層に細別される。混入物は径3mm~9mmの炭化物、粒径3mm~6mmの浮石粒、砂岩である。底面は地山の第VI層から構成されており、中央部がわずかに窪み軟らかい。底面の南側に亜角礫、北側に亜円礫が横転している。底面に径10mmの炭化物が多量に点在しており、北西壁から底面にかけて副穴1基P<sub>1</sub>(径0.94m×0.46m、深さ0.23m)が検出さ



L=318,000m

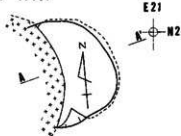


I-16ピット出土遺物

I-16ピット 0 5cm

1. 10Y R 2/3 黒褐色、炭化物、粘性なし。
2. 10Y R 3/4 暗褐色、炭化物、八戸浮石、焼土まじる、粘性あり。
3. 10Y R 3/4 暗褐色、炭化物、八戸浮石、焼土まじる、粘性なし。
4. 10Y R 3/3 暗褐色、炭化物、八戸浮石、焼土まじる、粘性なし。
5. 10Y R 3/2 暗褐色、炭化物、八戸浮石、焼土まじる、粘性なし。
6. 10Y R 4/4 褐色、炭化物、八戸浮石、焼土まじる、粘性なし。
7. 10Y R 4/4 褐色、炭化物、八戸浮石、焼土まじる、粘性なし。
8. 10Y R 2/1 黒色、八戸浮石まじる、粘性なし。
9. 10Y R 3/4 暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
10. 10Y R 2/2 黒褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
11. 10Y R 3/4 暗褐色、八戸浮石まじる、粘性なし。
12. 10Y R 3/3 暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性あり。

I-17 Pit



L=318,100m



I-15ピット

1. 10Y R 3/3 暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R 3/3 暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R 4/4 褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R 4/4 褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
5. 10Y R 3/4 暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
6. 10Y R 3/4 暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
7. 10Y R 4/4 褐色、炭化物、浮石まじる、粘性あり。
8. 10Y R 4/4 褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。

I-17ピット

1. 10Y R 暗褐色、炭化物、粘性あり。
2. 10Y R 4/6 褐色、炭化物、粘性あり。
3. 10Y R 2/2 黒褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R 3/4 暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
5. 2.5Y R 3/2 暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。

第24図ピット

れている。

遺物は埋土中位から縄文土器片が3点(第25図33・69・70)、底面直上から石製品が1点(第25図102)出土している。69は口縁部片であり、わずかに外反している。口唇部は丸味をもつ。文様をもたず、地文は単節のLRの斜行縄文である。内面にミガキを施している。70は体部片である。地文は単節の縄文である。33は底部～体部片である。地文は単節のLRの斜行縄文であり、内面にナデを施している。底部外面は不定方向にナデをおこなっている。102は磨石である。径10.4cm×8.2cmで楕円形を呈している。断面形は楕円形である。周縁部に敲打痕が多くみられ、表裏面に磨擦痕を有する。重量は565gであり、石質は安山岩である。

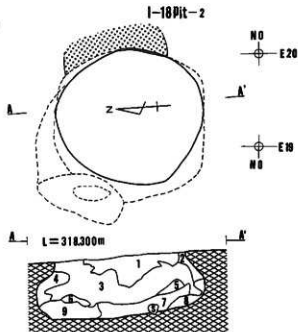
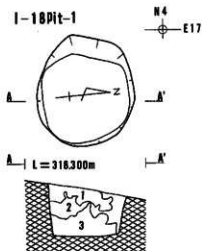
〔I-45ピット〕(第26図、PL9C①～③、PL29②、PL32-14～16、PL33-1)

北傾斜面の上部に位置する。開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.22m×1.16m、底部径1.23m×1.18m、深さは北東壁で0.76mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へわずかに内傾する。埋土は上部より黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土の4層に大別され、レンズ状を呈している。混入物、粘性等によりさらに7層に細別される。混入物は径3mm～10mmの炭化物、粒径3mm～8mmの浮石粒、チャート、縄文土器片である。底面は地山の第Ⅲ層から構成されており、中央より壁際にかけて緩やかに高まる。チャートの露頭による凹凸がみられ、やや軟らかい。底面に径2mmの炭化物が微量点在している。

遺物は床面直上から5点(第26図34、71～74)出土している。34は直立状態でつぶれて出土した深鉢である。口径22.5cm、器高24.5cm、底径8cmを測る。底部から体部上位までは外傾し、体部上位から口縁部まで内湾する。口唇部は平坦である。2個一対の山形小突起を一組もつ。文様はもたず、地文は単節のLRの斜行縄文である。体部下位には原体を転がしていない。内面は不定方向へナデを施している。体部中位から上位にかけては煤が多量に付着している。71は体部片である。地文は単節の縄文であり、内面にナデを施している。外面には煤が付着している。73は体部片である。地文は単節の縄文であり、不定方向に原体を転がしている。内面にナデを施している。74はやや強く内湾する体部片である。地文は細かい単節のLRの斜行縄文である。内面は研磨されており、光沢をもつ。72は体部片である。地文は単節の縄文である。

〔J-4ピット〕(第27図、PL10B)

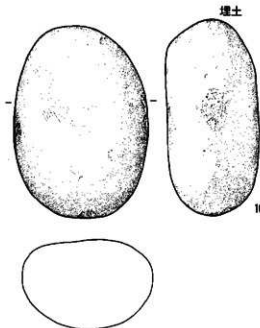
尾根頂部東側に位置する。平面形は開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.65m×1.59m、底部径1.61m×1.55m、深さは北東壁で1.07mを測る。断面形はフラスコ形を呈している。西壁から南壁にかけて底面より開口部へ内傾しており、東壁から北壁にかけて外傾してい



I-18ピットー1

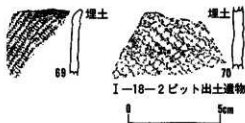
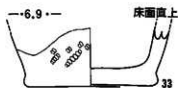
1. 10Y R 3/3暗褐色、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R 3/4暗褐色、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R 4/4褐色、八戸浮石まじる、粘性なし。

0 1m



I-18ピットー2

1. 10Y R 3/3暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる。
3. 7.5Y R 2/2黒褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R 3/3暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
5. 10Y R 3/4暗褐色、八戸浮石まじる、粘性あり。
6. 10Y R 4/4褐色、砂粒、粘性なし。
7. 10Y R 3/3暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
8. 10Y R 6/4暗褐色、粘性なし。
9. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。



第25図 ピット

る。埋土は上部より褐色土、極暗褐色土、暗褐色土、赤褐色土の4層に大別され、レンズ状を呈している。混入物、粘性等により、さらに6層に細別される。混入物は微量の炭化物和浮石粒である。底面は地山の第Ⅴ層により構成されており、平坦で強く締まっている。出土遺物はない。

〔J-8ピット〕（第27図、PL10C①②）

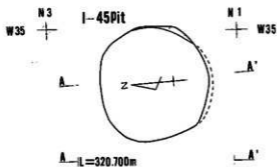
尾根頂部の東側に位置する。平面形は開口部が楕円形、底部は円形を呈している。開口部径1.44m×1.28m、底部径1.79m×1.73m、深さは北壁で0.96mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より頸部まで内傾し、頸部から直立する。埋土は上部から暗褐色土、褐色土、黄褐色土の3層に大別され、埋土下部はレンズ状を呈している。混入物、粘性等によりさらに7層に細別される。混入物は径3mm～15mmの炭化物、粒径4mm～8mmの浮石粒、石英、チャートである。底面は地山の第Ⅴ層で構成されており、平坦で締まっている。底面には少量の炭化物が点在している。出土遺物はない。

〔J-11ピット〕（第27図、PL10D）

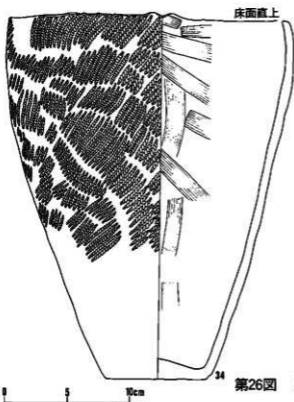
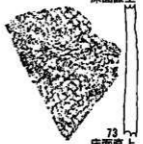
尾根頂部の東側に位置する。開口部、底部共にほぼ円形を呈している。開口部径0.79m×0.73m、底部径1.25m×1.14m、深さは西壁で0.80mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部まで台形状に内傾している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに5層に細別される。混入物は径1mm～5mmの炭化物と粒径2mm～7mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅴ層で構成されており、平坦で強く緻密である。底面には径6mmの炭化物が少量点在している。出土遺物はない。

〔J-23ピット〕（第28図、PL11A①②）

尾根頂部の中央に位置する。開口部は楕円形、底部は円形を呈している。開口部径1.19m×1.06m、底部径1.52m×1.47m、深さは北東壁で0.80mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へ内傾している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、レンズ状を呈している。混入物、粘性等によりさらに5層に細別される。混入物は径4mm～16mmの炭化物、粒径4mm～10mmの浮石粒である。炭化物は埋土上位から下位にかけて多量に含まれている。底面は地山の第Ⅴ層で構成されており、平坦で強く緻密である。底面に径8mmの炭化物が多量に点在しており、南側に0.31m×0.20mのチャート亜円礫が一個横転している。出土遺物はない。



A—L=320.700m



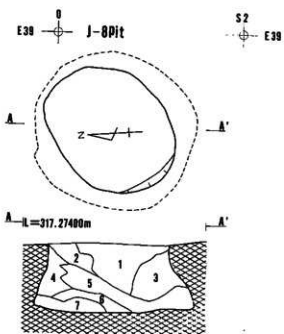
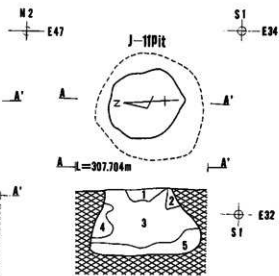
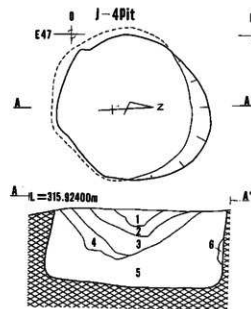
I-45ピット出土遺物



I-45ピット

1. 7.5Y R 2/1黒色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R 2/2黒褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R 3/4暗褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし、チャート。
4. 10Y R 3/3暗褐色炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし、チャート。
5. 10Y R 4/6褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性あり。
6. 7.5Y R 2/1黒色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性あり。土器、チャート。
7. 10Y R 3/4暗褐色、炭化材、粘性あり。

第26図 I-45ピット出土遺物



- J-4ピット**
1. 10Y R 4/6褐色、炭化物、粘性なし。
  2. 7.5Y R 2/3暗暗褐色、粘性なし。
  3. 10Y R 3/4暗褐色、浮石まじる、粘性なし。
  4. 10Y R 4/6褐色、粘性なし。
  5. 7.5Y R 4/4褐色、砂質シルト、炭化物、粘性なし。
  6. 5Y R 4/8赤褐色、粘性あり。

- J-8ピット**
1. 10Y R 3/4暗褐色、炭化材、浮石まじる、微細塵、粘性なし。
  2. 10Y R 4/4褐色、炭化物、粘性なし。
  3. 10Y R 5/6黄褐色、炭化材、浮石まじる、粘性なし。
  4. 10Y R 4/4褐色、浮石まじる。
  5. 10Y R 3/4暗褐色、炭化材、浮石まじる、粘性なし。
  6. 10Y R 4/4褐色、浮石まじる、粘性なし。
  7. 10Y R 4/6褐色、炭化物、石屑、粘性あり。

- J-11ピット**
1. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
  2. 10Y R 4/4褐色、炭化物、粘性なし。
  3. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
  4. 10Y R 4/4褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
  5. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性あり。



第27図 ピット

〔J-24ピット〕（第28図、PL11B①②、PL29⑤）

尾根頂部の中央に位置する。開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.12m×1.05m、底部径1.32m×1.24m、深さは西壁で0.58mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へ内傾している。埋土は上部より黒褐色土、暗褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに5層に細別される。混入物は径2mm～21mmの炭化物、粒径3mm～8mmの浮石粒、焼土粒、砂岩である。炭化物は埋土上位から下位にかけて多量に含まれている。底面は地山の第Ⅷ層で構成されており、平坦で堅く緻密である。底面に径3mmの炭化物が少量点在している。

遺物は埋土上位から石器が1点（第28図 103）出土している。103はスクレイパーである。楕円形を呈している。表面共第一次剝離面が多くみられる。側縁に二次加工の細かな調整剝離をおこなっている。アスファルト状のものが少量付着している。重量は15gであり、石質は玻璃質流紋岩である。

〔J-35ピット〕（第28、PL11C①②）

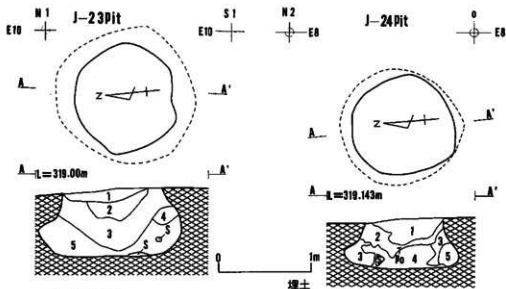
尾根頂部の西側に位置する。開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.97m×1.90m、底部径1.93m×1.80m、深さは北壁で0.65mを測る。断面形はピーカー形を呈している。底面より中位までほぼ直に立ち上がり、中位から開口部まで若干外傾している。埋土は上部より黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土の4層に大別され、レンズ状を呈している。混入物、粘性等によりさらに7層に細別される。混入物は径3mm～10mmの炭化物、粒径3mm～7mmの浮石粒、チャート、焼土粒である。底面は地山の第Ⅷ層で構成されており、平坦で堅くよく締まっている。底面に径3mmの炭化物が少量点在している。遺物は出土していない。

〔J-37ピット〕（第29図、PL12A、PL29③）

尾根頂部の西側に位置する。開口部、底部共円形を呈している。開口部径2.02m×2.01m、底部径1.89m×1.81m、深さは北西壁で0.70mを測る。断面形はピーカー形を呈しており、底面より開口部へ直立する。埋土は上部より黒色土、褐色土の2層に大別され、レンズ状を呈している。混入物、粘性等によりさらに5層に細別される。混入物は径3mm～10mmの炭化物、粒径3mm～8mmの浮石粒、チャート、焼土粒である。底面は地山の第Ⅷ層で構成されており、チャートの露頭による凹凸が一部みられる。底面に径11mmの炭化物が少量点在しており、堅く締まっている。

遺物は埋土上位から土師器片が1点（第29図35）出土している。35は変形土器の底部～体部片である。胎土に小石を含んでいる。器面調整は体部外面が縦位へのケズリ、内面が横位への

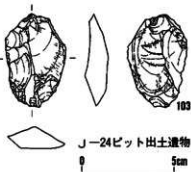




J-23ピット

1. 3/3暗褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 3/4暗褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 3/4暗褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
4. 4/6褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
5. 3/3暗褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。

埋土



J-24ピット出土遺物

J-24ピット

1. 10Y R 3/2黒褐色、炭化材、八戸浮石、焼土粒まじる、粘性あり。
2. 10Y R 2/2黒褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R 3/4暗褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R 2/3黒褐色、炭化材。
5. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。

J-35ピット

1. 7.5Y R 2/1黒色、炭化材、粘性あり。
2. 10Y R 3/2暗褐色、炭化物、焼土粒まじる、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 7.5Y R 3/4暗褐色、炭化材、八戸浮石まじる。
4. 10Y R 3/4暗褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性あり。
5. 10Y R 4/4褐色、炭化材、チャートまじる、粘性あり。
6. 10Y R 4/6褐色、雲母まじる、粘性あり。
7. 10Y R 4/6褐色、炭化物まじる、粘性あり。

第28図 ピット

ナデである。

〔K-6ピット〕（第29図、PL12B①②、PL33-3）

尾根頂部の東側に位置する。平面形は開口部、底部共楕円形を呈している。開口部径1.30m×1.18m、底部径1.51m×1.19m、深さは北東壁で0.70mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、南西壁で底面より開口部へ内傾している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土、黒色土の3層に大別され、混入物、粘性等からさらに9層に細別される。混入物は少量の浮石粒と炭化物である。底面は地山の第Ⅹ層から構成されており、平坦で堅く締まっている。

遺物は埋土下位から粗製の深鉢形土器の口縁部片が1点（第29図76）出土している。口縁部が内湾しており、口唇部に丸味をもつ。文様をもたず、地文は単節のLRの斜行縄文であり、内面は斜めヘナデを施している。

〔K-10ピット〕（第30図、PL12C、PL33-4）

尾根頂部の東側に位置する。平面形は開口部、底部共ほぼ円形を呈している。開口部径0.97m×0.90m、底部径1.57m×1.50m、深さは北西壁で0.74mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へ等脚台形状に強く内傾している。埋土は上部より黒褐色土、褐色土、暗褐色土の3層に大別され、混入物、粘性等からさらに8層に細別される。混入物は径1mm～9mmの炭化物、粒径3mm～15mmの浮石粒、石英、微細礫である。底面は地山の第Ⅹ層で構成されており、平坦で堅く緻密である。南壁際に副穴が1基P<sub>1</sub>（径0.18m×0.16m、深さ0.32m）検出されている。底面には径6mmの炭化物が微量点在している。

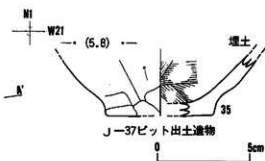
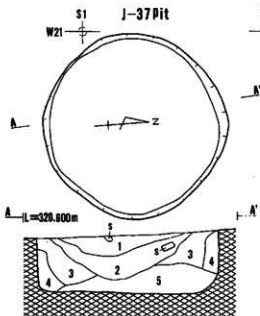
遺物は埋土中位から縄文土器体部片が1点（第30図77）出土している。地文は単節の縄文であり、沈線に区画された磨消帯をもつ。

〔K-14ピット〕（第30図、PL12D）

尾根頂部の東側に位置する。開口部、底部共楕円形を呈している。開口部径1.10m×0.80m、底部径1.57m×1.47m、深さは北壁で0.44mを測る。断面形はフラスコ形を呈している。底面から頸部へ内傾し、頸部から開口部へ直立している。埋土上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに3層に細別される。混入物は径2mmの炭化物、粒径5mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅵ層で構成されており、平坦で堅く締まっている。出土遺物はない。

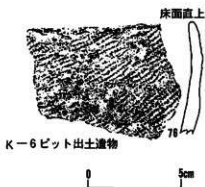
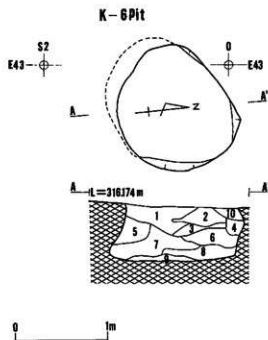
〔K-15ピット〕（第30図、PL13A①②）

尾根頂部の東側に位置する。当ピットはK-16ピットと西側で重複しており、K-16ピットに切られている。開口部、底部の形状は前記の理由により不明である。開口部径、底部径は同



### J-37ピット

1. 7.5Y R 2/1黒色、炭化物、八戸浮石、焼土まじる、チャート。
2. 10Y R 4/4褐色、炭化物、粘性あり、チャート。
3. 10Y R 褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性あり。
4. 10Y R 4/6褐色、炭化物、粘性あり、チャート。
5. 10Y R 4/6褐色、炭化物、粘性あり、チャート。



### K-6ピット出土遺物

### K-6ピット

1. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性あり。
2. 10Y R 4/6褐色、炭化物、粘性あり。
3. 10Y R 4/4褐色、粘性なし。
4. 10Y R 4/4褐色、炭化物、粘性なし。
5. 10Y R 4/6褐色、炭化物、粘性あり。
6. 7.5Y R 4/5暗褐色、粘性ある。
7. 7.5Y R 3/4暗褐色、炭化物、浮石、粘性あり。
8. 10Y R 4/6褐色、粘性あり。
9. 10Y R 2/1黒色、粘性あり。

第29図 ピット

様に不明であり、深さは北西壁で0.57mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へ内傾している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに4層に細別される。混入物は径2mm～3mmの炭化物、粒径3mm～17mmの浮石粒、微細礫である。底面は地山の第Ⅷ層で構成されており、南側から北側にかけて高まっている。底面に径2mmの炭化物が微量点在しており、堅く緻密である。出土遺物はない。

〔K-16ピット〕（第31図、PL13B①②）

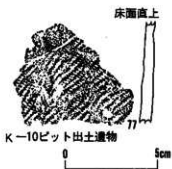
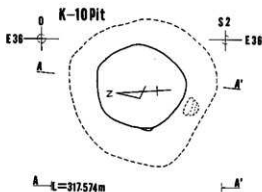
尾根頂部の東側に位置する。当ピットはK-15ピットと西側で重複しており、K-15ピットを切っている。開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.32m×1.31m、底部径1.45m×1.57m、深さは北西壁で0.64mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底部より開口部へ等脚台形状に内傾している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土、黒色土の3層に大別され、レンズ状を呈している。混入物、粘性等によりさらに6層に細別される。混入物は径4mm～7mmの炭化物と粒径4mm～9mmの浮石粒、砂岩である。底面は地山の第Ⅷ層で構成されており、平坦で堅く緻密である。底面に径8mmの炭化物が少量点在している。出土遺物はない。

〔K-17ピット〕（第31図、PL13C①②）

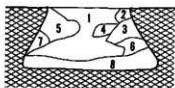
尾根頂部の中央に位置する。開口部は楕円形、底部は円形を呈している。開口部径1.24m×1.09m、底部径1.85m×1.72m、深さは北西壁で0.94mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面から開口部へ等脚台形状に内傾している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等から9層に細別される。径2mm～10mmの炭化物、粒径4mm～9mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅷ層で構成されており、ほぼ平坦で堅く締まっている。出土遺物はない。

〔K-19ピット〕（第31図、PL14A）

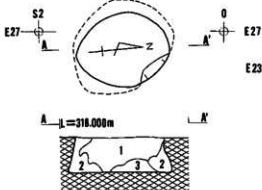
尾根頂部の中央に位置する。当ピットの中央部で攪乱を受けている。開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.22m×1.13m、底部径1.52m×1.45m、深さは西壁で0.66mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へ強く内傾している。埋土は底部より暗褐色土、褐色土、黒褐色土の3層に大別され、混入物、粘性等によりさらに6層に細別される。混入物は径2mm～12mmの炭化物、粒径3mm～8mmの浮石粒、ローム塊、草木灰である。底面は地山の第Ⅷ層で構成されており、平坦でよく締まっている。底面には径8mmの炭化物が少量点在している。出土遺物はない。



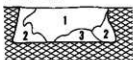
K-10ピット出土遺物



### K-14 Pit



A—L=318.000m



### K-14ピット

1. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石、粘性なし。
2. 10Y R 4/6褐色、炭化物、八戸浮石、粘性あり。
3. 10Y R 4/6褐色、粘性あり。

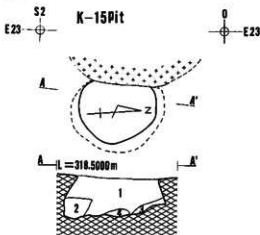
### K-10ピット

1. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R 3/2黒褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
5. 10Y R 4/4褐色土、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
6. 10Y R 4/6褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
7. 10Y R 4/4褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
8. 10Y R 3/3暗褐色、炭化材、微細燧。

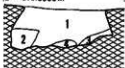
### K-15ピット

1. 10Y R 3/3暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R 4/4褐色、八戸浮石まじる、微細燧混入する。  
粘性あり。
3. 10Y R 4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじる。  
粘性なし。
4. 10Y R 4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。

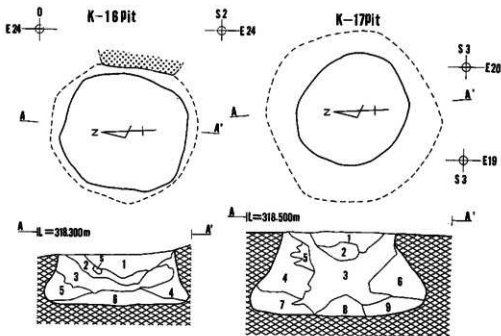
### K-15ピット



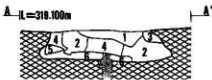
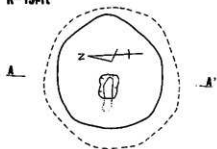
A—L=318.5000m



第30図 ピット



K-19Pit



0 1m

K-16ピット

1. 10Y R 3/4暗褐色、炭化材、八戸浮石、粘性なし。
2. 10Y R 3/3褐色、炭化物、粘性なし。
3. 10Y R 2/1黒色、炭化物、八戸浮石、砂岩、粘性なし。
4. 10Y R 4/4褐色、八戸浮石、粘性なし。
5. 10Y R 4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
6. 10Y R 3/3暗褐色、炭化物、八戸浮石、粘性なし。

K-17ピット

1. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R 3/3暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R 4/4褐色炭化物、浮石まじる、粘性なし。
5. 10Y R 3/3暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
6. 10Y R 4/4褐色、炭化物、浮石、粘性なし。
7. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
8. 10Y R 4/4褐色、炭化物。
9. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性あり。

L-19ピット

1. 10Y R 3/4暗褐色、炭化材、浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R 3/3暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R 4/4褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R 3/3暗褐色、炭化材、浮石、フームまじる、粘性なし。
5. 10Y R 4/4褐色、八戸浮石、粘性なし。
6. 10Y R 2/2黒褐色、炭化材、浮石まじる、粘性なし、草木灰まじる。

第31図 ピット

〔K-21ピット〕 (第32図、PL14B①②)

尾根頂部の中央に位置する。開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.32m×1.25m、底部径1.65m×1.56m、深さは西壁で0.54mを測る。断面形はフラスコ形を呈している。北壁は底面より頸部へ内傾し、頸部から開口部へ直立している。南壁は底面より直立している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土、黒褐色土の3層に大別され、混入物、粘性等によりさらに8層に細別される。混入物は径1mm～6mmの炭化物、粒径2mm～7mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅵ層で構成されており、平坦で堅くよく締まっている。底面に径2mmの炭化物が微量点状在している。出土遺物はない。

〔K-22ピット〕 (第32図、PL14C①②、PL33-14)

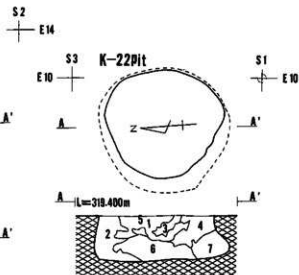
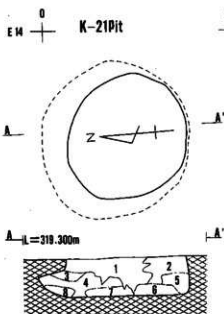
尾根頂部の中央に位置する。開口部、底部共ほぼ円形を呈している。開口部径1.25m×1.15m、底部径1.36m×1.30m、深さは北西壁で0.69mを測る。断面形はフラスコ形を呈している。南壁は底面より開口部まで内傾し、北壁は頸部まで内傾し、頸部から直立している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土、黒褐色土の3層に大別され、混入物、粘性等によりさらに7層に細別される。径1mm～4mmの炭化物、粒径2mm～4mmの浮石粒、砂岩、チャートである。底面は地山の第Ⅷ層で構成されており、平坦で堅く締まっている。

遺物は埋土中位から縄文土器片が1点(第32図87)出土している。87は体部片である。地文は単節の縄文である。

〔K-24ピット〕 (第32図、PL14D、PL30①、PL33-5～7)

尾根頂部の中央に位置する。開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.38m×1.29m、底部径1.43m×1.34m、深さは北壁で0.41mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へわずかに内傾する。埋土は上部より暗褐色土、褐色土、黒褐色土の3層に細別される。混入物は径4mm～6mmの炭化物、粒径3mm～5mmの浮石粒、縄文土器片である。底面は地山の第Ⅹ層から構成されており、堅くよく締まっている。底面は中央から南壁にかけて高まっている。底面に径3mmの炭化物が微量点状在している。

遺物は埋土下位から縄文土器片が4点(第33図36, 78～80)出土している。36は深鉢形土器の体部片である。地文は単節のLRの斜行縄文であり、内面は斜めヘナデを施している。外面に煤が付着している。78は深鉢形土器の口縁部片である。口縁部は体部よりほぼ直立しており、口唇部は平坦である。文様をもたず、地文は単節のLRの斜行縄文である。内面は横位ヘナデを施している。79は体部片である。地文は単節の縄文であり、内面にナデを施している。80は体部片であり、地文は単節の縄文である。



K-22ピット出土遺物

K-21ピット

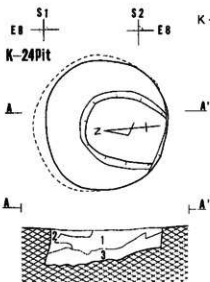
1. 10YR3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10YR4/6褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10YR4/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
4. 10YR3/2黒褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
5. 10YR4/6褐色、八戸浮石まじる、粘性あり。
6. 10YR3/3暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
7. 10YR4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性あり。
8. 10YR3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。

K-22ピット

1. 10YR3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10YR4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10YR2/3黒褐色、炭化物、粘性なし。
4. 10YR4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
5. 10YR4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし、チャート。
6. 10YR3/3暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし、石の塔。
7. 10YR4/6褐色、炭化物、粘性あり。

K-24ピット

1. 10YR3/4暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし、土器片。
2. 10YR3/3褐色、炭化物、浮石まじる。
3. 10YR3/2暗褐色、炭化物、浮石まじる。



第32図ピット



〔K-25ピット〕（第33図、PL15A①②）

尾根頂部の中央に位置する。開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.43m × 1.37m、底部径1.50m × 1.33m、深さは南西壁で0.65mを測る。断面形はピーカー形を呈しており、底面より開口部へほぼ直立する。埋土は上部より暗褐色土、黒褐色土、褐色土の3層に大別され、混入物、粘性等よりさらに7層に細別される。混入物は径2mm～4mmの炭化物、粒径3mm～9mmの浮石粒、焼土粒である。底面は地山の第Ⅴ層で構成されており、平坦で堅くよく締まっている。遺物は出土していない。

〔K-34ピット〕（第33図、PL15B）

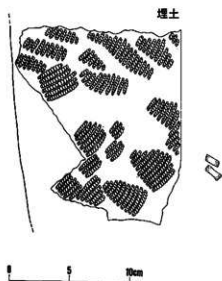
尾根頂部の西側に位置する。開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.66m × 1.61m、底部径1.80m × 1.73m、深さは北西壁で0.46mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へわずかに内傾する。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に細分される。混入物は径14mm～20mmの多量の炭化物と粒径4mm～5mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅴ層で構成されており、中央が壁際より傾斜してやや窪んでいる。径3mmの炭化物が少量点在しており、堅く緻密である。遺物は出土していない。

〔K-44ピット〕（第34図、PL15C）

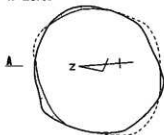
尾根頂部の西側に位置する。開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.32m × 1.27m、底部径1.28m × 1.23m、深さは東壁で0.27mを測る。断面形はピーカー形を呈しており、底面より開口部へ内弯気味に立ち上がる。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに3層に細別される。混入物は径2mm～9mmの炭化物、粒径4mm～5mmの浮石粒である。炭化物は埋土上位から中位にかけて多量に含まれている。底面は地山の第Ⅵ層から構成されており、チャートの露頭による凹凸が著しい。底面に径5mmの炭化物が多量に点在しており、堅く締まっている。遺物は出土していない。

〔L-11ピット〕（第34図、PL15D①②）

尾根頂部の東側に位置する。開口部、底部共に円形を呈している。開口部径2.02m × 1.98m、底部径1.99m × 1.83m、深さは西壁で0.33mを測る。断面形は皿形を呈しており、底面より内弯気味に立ち上がる。埋土は上部より褐色土、黒褐色土、暗褐色土の3層に大別され、混入物、粘性等によりさらに7層に細別される。混入物は径1mm～14mmの炭化物と粒径5mm～9mmの浮石粒、チャートである。底面は地山の第Ⅶ層から構成されており、径18mmの炭化物が少量点在している。底面の中央から壁にかけては緩やかに弧状を呈して高まっており、よく締まっている。



K-25Pit

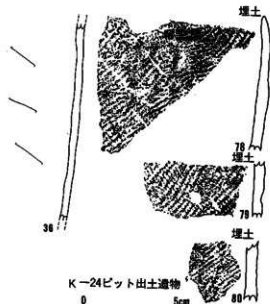


A—L=319.300m



K-34Pit

1. 10Y R 3/4明褐色、炭化材、八戸浮石、粘性あり。
2. 10Y R 4/6褐色、炭化材、八戸浮石、粘性あり。



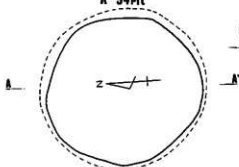
K-24Pit出土遺物

0 5cm

K-25Pit

1. 10YR3/3暗褐色、炭化材、八戸浮石まじり、粘性なし。
2. 10YR2/3暗褐色、炭化物、焼土粒、粘性なし。
3. 10YR3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじり、粘性なし。
4. 10YR4/6褐色、炭化物、八戸浮石まじり、粘性あり。
5. 10YR3/4暗褐色、炭化材、八戸浮石まじり、粘性あり。
6. 10YR4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじり、粘性あり。
7. 10YR3/3暗褐色、炭化物、八戸浮石まじり、焼土性、粘性あり。

K-34Pit



A—L=320.800m



第33図ピット

る。やや北東寄りから副穴1基P<sub>1</sub>(径0.24m×0.22m、深さ0.06m)が検出されている。出土遺物はない。

#### [L-13ピット] (第34図、PL16A①②)

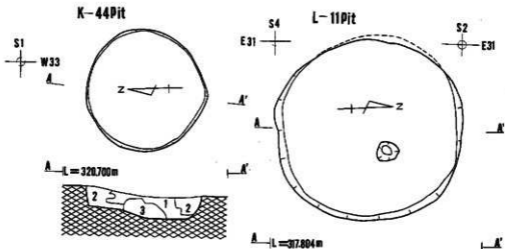
南傾斜面の上部に位置する。当ピットはL-14ピットと南側で重複しており、L-14ピットに切られている。開口部、底部の形状は前記の理由により不明である。開口部径、底部径も同様に不明であり、深さは東南壁で0.55mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へ台形状に内傾している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等から6層に細別される。混入物は径1mm～7mmの炭化物と粒径3mm～8mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅴ層で構成されており、西側から東側にかけて低く傾斜し、軟弱である。底面に径3mmの炭化物が微量点在しており、副穴を2基P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>伴う。P<sub>1</sub>(径0.37m×0.24m、深さ0.23m)は西側に位置しており円形を呈している。P<sub>2</sub>(径0.37m×0.24m、深さ0.23m)は東壁際に位置しており、楕円形を呈している。東壁から南壁に沿って周溝が一条検出されている。上端幅0.27m、下端幅0.07m、深さ0.09mで断面形はU字形を呈している。出土遺物はない。

#### [L-14ピット] (第35図、PL16B)

南傾斜面の上部に位置する。当ピットはL-13ピットと北側で重複しており、L-13ピットを切っている。開口部、底部共楕円形を呈している。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へ内傾する。開口部径1.29m×1.05m、底部径1.88m×1.23m、深さは北壁で0.44mを測る。埋土は上部より褐色土、暗褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等からさらに4層に細別される。混入物は径2mm～5mmの炭化物と粒径3mm～8mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅴ層で構成されており、平坦で締まっている。底面に微量の炭化物が点在しており、副穴3基P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>を伴う。P<sub>1</sub>(径0.49m×0.32m、深さ0.25m)は南壁際に位置し、楕円形を呈している。P<sub>2</sub>(径0.32m×0.19m、深さ0.23m)は東壁際に位置し、楕円形を呈している。P<sub>3</sub>(径0.14m×0.11m、深さ0.08m)は北壁際に位置し、楕円形を呈している。出土遺物はない。

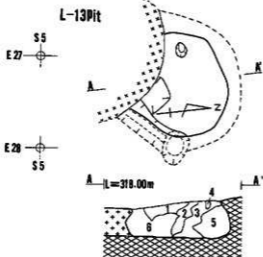
#### [L-19ピット-1] (第35図、PL16D)

南傾斜面の上部に位置する。当ピットは南側でL-19ピット-2と重複しており、L-19ピット-2に切られている。開口部、底部共前記の理由により不明である。開口部径、底部径も同様に不明であり、深さは南東壁で0.71mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面よ



**K-44ピット**

1. 10Y R 3/3暗褐色、炭化材まじる、八戸浮石まじる。
2. 粘性なし。
2. 10Y R 4/4褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R 4/4暗褐色、炭化材、八戸浮石、粘性なし。



**L-11ピット**

1. 10Y R 4/6褐色、炭化材、粘性なし。
2. 10Y R 3/2黒褐色、炭化物、粘性なし。
3. 10Y R 4/4褐色、炭化材、八戸浮石、粘性なし。
4. 10Y R 2/3暗褐色、炭化材、八戸浮石、粘性なし。
5. 10Y R 4/4褐色、炭化物、八戸浮石、粘性なし。
6. 10Y R 4/6褐色、八戸浮石まじる、粘性なし。
7. 10Y R 2/3黒褐色、粘性あり。

**L-13ピット**

1. 10Y R 3/4暗褐色、炭化材、浮石まじる、粘性なし
2. 10Y R 3/4暗褐色、炭化材、浮石まじる、粘性なし
3. 10Y R 4/4褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし
4. 10Y R 3/3暗褐色、粘性なし
5. 10Y R 4/6褐色、炭化物、浮石まじる、粘性あり
6. 10Y R 3/3暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし



第34図 ピット

り開口部へ内傾している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに8層に細別される。混入物は径2mm～15mmの炭化物、粒径3mm～10mmの浮石粒、砂岩である。底面は地山の第Ⅹ層で構成されており、平坦で少し軟らかい。底面に径6mmの炭化物が少量点在している。出土遺物はない。

[L-19ピット-2] (第35図、PL16E)

南傾斜面の上部に位置する。当ピットは北側でL-19ピット-1と重複しており、L-19ピット-1を切っている。開口部は円形を呈していたが、底部は深掘りセクションをとったため不明である。開口部径は1.12m×1.02m、底部径は前記の理由により不明である。深さは北西壁で0.71mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へ強く等脚台形状に内傾している。埋土は上部より褐色土、暗褐色土の2層に大別されるが、混入物、粘性等により5層に細別される。混入物は径2mm～15mmの炭化物、粒径3mm～10mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅹ層で構成されており、平坦で堅く締まっている。出土遺物はない。

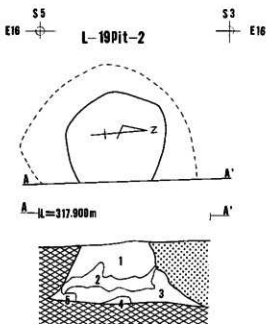
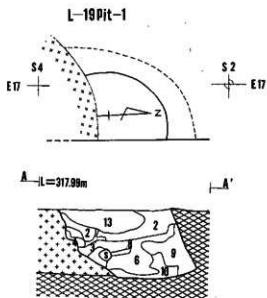
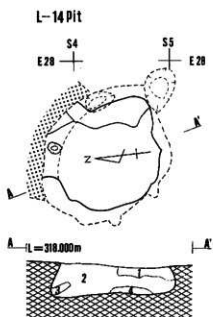
[L-20ピット] (第36図、PL17A①②、PL33-13)

尾根頂部の中央に位置する。開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.22m×1.19m、底部径1.68m×1.54m、深さは南西壁で0.60mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へ等脚台形状に内傾している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに9層に細別される。混入物は径2mm～8mmの炭化物、粒径2mm～5mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅹ層から構成されており、平坦で堅くよく締まっている。

遺物は埋土下位より縄文土器片が1点(第36図86)出土している。86は体部片である。地文は単節の縄文であり、内面にナデを施している。

[L-21ピット] (第36図、PL17B①②)

尾根頂部の中央に位置する。開口部は円形、底部は楕円形を呈している。開口部径1.26m×1.20m、底部径1.50m×1.23m、深さは北東壁で0.31mを測る。断面形はフラスコ形を呈している。北壁で底面より開口部へ内傾しているが、他の壁は直立している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土、明褐色土の3層に大別され、混入物、粘性等により7層に細別される。混入物は径2mm～10mmの炭化物、粒径3mm～4mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅵ層で構成されており、平坦で堅くよく締まっている。出土遺物はない。



**L-14ピット**

1. 10Y R4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R4/6褐色、炭化物、粘性あり。
4. 10Y R4/4褐色、八戸浮石まじる、粘性なし。

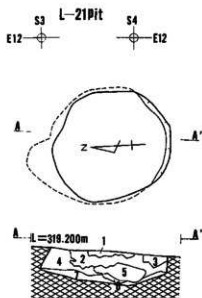
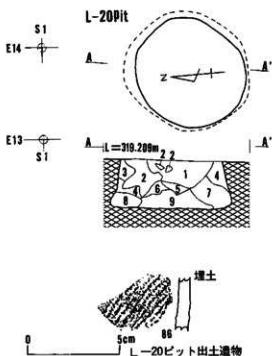
**L-19ピット-1**

1. 10Y R3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし、砂石混入する。
2. 10Y R4/4褐色、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R4/4褐色、八戸浮石まじる、粘性なし。
5. 10Y R4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
6. 10Y R3/3暗褐色、八戸浮石まじる、粘性なし。
7. 10Y R4/4褐色、八戸浮石まじる、粘性なし。
8. 10Y R4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粒状砂岩。

**L-19ピット-2**

1. 10Y R3/4暗褐色、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R2/3暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる。
4. 10Y R4/6褐色、炭化物、粘性あり。
5. 10Y R3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。

第35図 ピット



**L-20ピット**

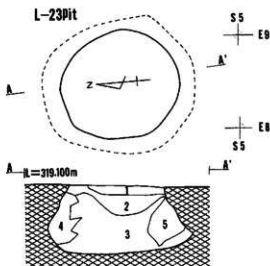
1. 10Y R 3/4暗褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R 3/3暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R 4/2褐色、浮石まじる。
4. 10Y R 4/6褐色、八戸浮石まじる、粘性なし。
5. 10Y R 4/6褐色、炭化材まじる、粘性あり。
6. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石、粘性なし。
7. 10Y R 4/4褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
8. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性あり。
9. 10Y R 3/3暗褐色、炭化材まじる、八戸浮石まじる、粘性あり。

**L-21ピット**

1. 10Y R 3/4暗褐色、炭化材、浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R 3/3暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R 4/6褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R 4/6褐色、浮石まじる、粘性なし。
5. 10Y R 4/6褐色、炭化物、浮石まじる、粘性あり。
6. 10Y R 3/4暗褐色、炭化材、粘性あり。
7. 7.5Y R 5/6明褐色、炭化物、浮石まじる、粘性あり。

**L-23ピット**

1. 10Y R 4/4褐色、炭化材あり、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる。
3. 10Y R 3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R 4/6褐色、炭化材まじる、粘性あり。



第36図 ピット

[L-23ピット] (第36図、PL17C①②)

南傾斜面の上部に位置する。開口部は円形で、底部は楕円形を呈している。開口部径1.27m × 1.17m、底部径1.32m × 1.15m、深さは北東壁で0.80mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へ内傾している。埋土は上部より褐色土、暗褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等により4層に細別される。混入物は径2mm～8mmの炭化物、粒径2mm～5mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅴ層で構成されており、平坦で堅く緻密である。底面に径6mmの炭化物が少量点在している。出土遺物はない。

[L-24ピット] (第37図、PL18A, PL33-8)

南傾斜面の上部に位置する。開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.33m × 1.25m、底部径1.63m × 1.56m、深さは西壁で0.55mを測る。断面形はフラスコ形を呈している。壁は底部より開口部へ内傾する。埋土は上部より暗褐色土、黒褐色土、褐色土の3層に大別され、混入物、粘性等によりさらに8層に細別される。混入物は径2mm～8mmの炭化物、粒径3mm～7mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅴ層で構成されており、平坦で堅くよく締まっている。底面に径13mmの炭化物が少量点在している。

遺物は埋土上位から縄文土器片が1点(第37図81)出土している。81は薄手の口縁部片である。強く内湾しており、口唇部が丸味をもつ。器面は内外面共よく研磨されており、光沢をもつ。口縁部上部に二条、下部に一条の沈線を通らしている。

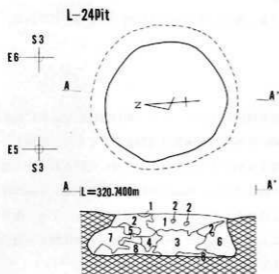
[L-26ピット] (第37図、PL18B①②)

南傾斜面の上部に位置する。開口部、底部共ほぼ円形を呈している。開口部径0.76m × 0.75m、底部径1.19m × 1.09m、深さは北西壁で0.58mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底部より開口部へ等脚台形状に強く内傾している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に細分される。混入物は径5mm～9mmの炭化物、粒径2mm～7mmの浮石粒、焼土粒である。底面は地山の第Ⅴ層で構成されており、平坦で堅く締まっている。底面に径3mmの炭化物が少量点在している。遺物は出土していない。

[L-31ピット] (第37図、PL18C)

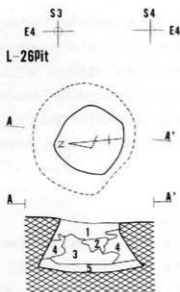
南傾斜面の上部に位置する。開口部は底部共楕円形を呈している。開口部径1.24m × 1.10m、底部径1.29m × 1.06m、深さは南西壁で0.39mを測る。断面形はフラスコ形を呈している。東壁では底面より開口部へ内傾するが、北東壁では外傾している。埋土は褐色土であり、混入物、粘性等により2層に細分される。混入物は径3mm～4mmの炭化物である。底面は地山の第Ⅴ層





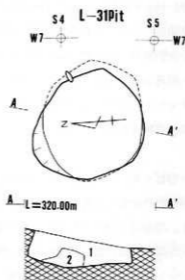
L-24ピット

1. 10Y R3/3暗褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R2/3黒褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R3/4暗褐色、炭化物、粘性あり。
4. 10Y R4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
5. 10Y R4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
6. 10Y R4/6褐色、粘性あり。
7. 10Y R4/6褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
8. 10Y R3/3暗褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性あり。



L-31ピット

1. 10Y R4/4褐色、炭化物、粘性あり。
2. 10Y R4/6褐色、炭化物、粘性あり。



L-26ピット

1. 10Y R3/4暗褐色、炭化材、浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R3/3暗褐色、炭化材、浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R3/4暗褐色、炭化材、粘性あり、燧土粒。
4. 10Y R4/6褐色、炭化材、浮石、粘性あり。
5. 10Y R3/3暗褐色、炭化材、粘性あり。



第37図 ピット

から構成されており、平坦で強く締まっている。底面に径2mmの炭化物が微量点在している。遺物は出土していない。

〔L-36ピット〕 (第38図、PL18D)

尾根頂部の西側に位置する。開口部、底部共楕円形を呈している。開口部径1.52m×1.34m、底部径1.40m×1.18m、深さは北東壁で0.46mを測る。断面形は皿形を呈しており、底面より開口部へ内湾気味に立ち上がる。埋土は底部より褐色土と暗褐色土の2層に大別されるが、混入物、粘性等により5層に細別される。混入物は径2mm～10mmの炭化物、粒径3mm～6mmの浮石粒、焼土粒である。底面は地山の第Ⅹ層で構成されており、中央から北側にかけて丸く掘り窪められている。底面にチャートの露頭による凹凸の起伏がみられ、径8mmの炭化物が少量点在しており、よく締まっている。遺物は出土していない。

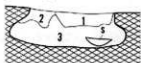
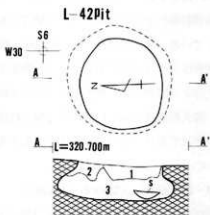
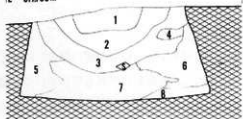
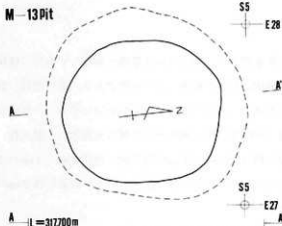
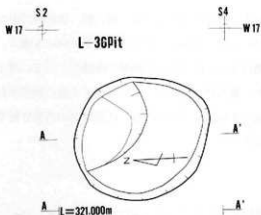
〔L-42ピット〕 (第38図、PL18E)

尾根頂部の西側に位置する。開口部、底部共円形を呈している。開口部径0.98m×0.91m、底部径1.18m×1.14m、深さは南西壁で0.45mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より頸部へ内傾しており、頸部から開口部へ直立する。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに3層に細別される。混入物は径5mm～10mmの炭化物、粒径2mm～3mmの浮石粒、チャート、細礫である。底面は地山の第Ⅸ層で構成されており、チャートの露頭により凹凸である。底面に径7mmの炭化物が少量点在しており、やや軟弱である。遺物は出土していない。

〔M-13ピット〕 (第38図、PL19A①②、PL33-9・10・14)

南傾斜面の中部に位置する。開口部は楕円形、底部は円形を呈している。開口部径1.73m×1.55m、底部径2.19m×2.06m、深さは南西壁で1.05mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へ等脚台形状に内傾している。埋土は上部より褐色土、暗褐色土に大別され、レンズ状を呈している。混入物、粘性等からさらに8層に細別される。混入物は径1mm～5mmの炭化物、粒径5mm～12mmの浮石粒、チャートである。底面は地山の第Ⅹ層で構成されており、平坦で強く緻密である。底面に径5mmの炭化物が少量点在している。

遺物は埋土中位から縄文土器片が3点(第38図82～84)出土している。82は直立する口縁部片である。地文は単節の縄文であり、沈線により磨消し帯と区画されている。84は体部片である。地文は単節の縄文であり、太い沈線により磨消し帯と区画されている。83は体部片である。地文は単節の縄文であり、内外面に煤が付着している。



#### L-36ピット

1. 10Y R3/4暗褐色、炭化材、浮石まじる、粘性あり、チャート、硬土粒。
2. 10Y R4/6褐色、炭化材、粘性あり。
3. 10Y R4/4褐色、炭化材、浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R4/4褐色、炭化材、粘性あり。
5. 10Y R4/6褐色、炭化材、粘性あり。

#### L-42ピット

1. 10Y R3/3暗褐色、炭化材、粘性あり。
2. 10Y R4/6褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R4/4褐色、炭化材少量、八戸浮石まじる、粘性あり、膠礫まじる。

#### M-13ピット

1. 10Y R4/4、褐色、炭化材、浮石まじる、粘性あり。
2. 10Y R3/3暗褐色、炭化材、浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R3/4、暗褐色、炭化材、浮石まじる、粘性なし、チャート。
4. 10Y R3/4、暗褐色、浮石まじる、粘性なし。
5. 10Y R4/4、褐色、炭化材、浮石まじる、粘性あり。
6. 10Y R4/4、褐色、炭化材、浮石まじる、粘性なし。
7. 10Y R3/3、暗褐色、炭化材、浮石まじる、粘性なし。
8. 10Y R3/3、褐色、炭化材、浮石まじる、粘性なし。



第38図 ピット

〔M-16ピット〕（第39図、PL19B）

南傾斜面の上部に位置する。西壁際に木根による攪乱を受けている。開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.24m×1.21m、底部径1.25m×1.18m、深さは南壁で0.36mを測る。断面形はフラスコ形を呈している。底面より開口部まで直立するが西壁で内傾している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに5層に細別される。混入物は径3mm~14mmの炭化物と粒径3mm~6mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅵ層で構成されており、平坦で軟らかい。出土遺物はない。

〔M-20ピット〕（第39図、PL19C）

南傾斜面の上部に位置する。開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.23m×1.15m、底部径1.63m×1.48m、深さは北壁で0.66mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へ内傾している。埋土は上部より褐色土、暗褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等からさらに8層に細別される。混入物は径2mm~8mmの炭化物、粒径2mm~8mmの浮石粒、砂岩、水酸化鉄である。底面は地山の第Ⅴ層で構成されており、平坦で軟らかい。出土遺物はない。

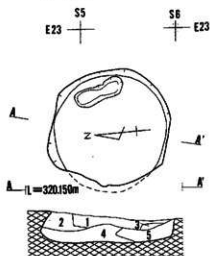
〔M-21ピット〕（第39図、PL19D）

尾根頂部の中央に位置する。当ピットは南東側でN-19住居址状遺構と重複しており、住居址状遺構に切られている。開口部、底部の形状は前記の理由により不明である。開口部径、底部径共同様であり、深さは南西壁で0.49mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へわずかに内傾する。埋土は底部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに4層に細別される。混入物は径6mm~7mmの炭化物、粒径3mm~7mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅴ層で構成されており、平坦で堅く緻密である。底面に径2mmの炭化物が少量点在している。出土遺物はない。

〔M-23ピット〕（第39図、PL19E）

南傾斜面の上部に位置する。開口部、底部共ほぼ円形を呈している。開口部径0.83m×0.78m、底部径0.86m×0.83m、深さは西壁で0.26mを測る。断面形は皿形を呈している。壁は底面より開口部へ内弯気味に立ち上がっている。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに3層に細別される。混入物は径2mm~8mmの炭化物、粒径2mm~7mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅵ層で構成されており、平坦で堅く締まっている。底面に径7mmの炭化物が少量点在している。2基P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>の副穴が検出されている。P<sub>1</sub>（径0.16

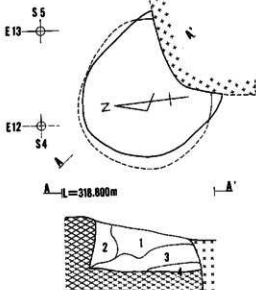
### M-16Pit



#### M-16ピット

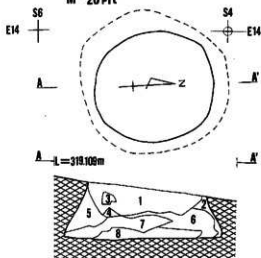
1. 10Y R3/3暗褐色、炭化物、八戸浮石まじり、焼土粒、粘性なし。
2. 10Y R4/4褐色、八戸浮石、粘性なし。
3. 10Y R4/4暗褐色、八戸浮石まじり、粘性なし。
4. 10Y R3/4暗褐色、炭化材、焼土粒、粘性なし。
5. 10Y R4/4褐色、炭化材、八戸浮石まじり、粘性なし。

### M-21Pit



0 1m

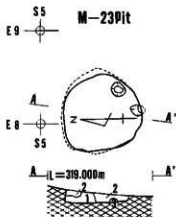
### M-20Pit



#### M-20ピット

1. 10Y R4/4褐色、炭化材、浮石まじり、粘性なし。
2. 10Y R4/4褐色、炭化物、浮石まじり、粘性なし。
3. 10Y R4/4褐色、炭化物微量、浮石まじり、粘性なし。
4. 10Y R暗褐色3/4、炭化材、浮石まじり、粘性なし、砂礫が微量混入する。
5. 10Y R4/6褐色、炭化物、浮石まじり、粘性あり。
6. 10Y R4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじり、粘性なし。
7. 10Y R3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじり、焼土粒、粘性なし。
8. 10Y R3/3暗褐色、炭化材、八戸浮石まじり、粘性なし。

### M-23Pit



#### M-21ピット

1. 10Y R3/4暗褐色、炭化材、八戸浮石まじり、粘性なし。
2. 10Y R4/6褐色、八戸浮石まじり、粘性あり。
3. 10Y R3/3暗褐色、炭化材、八戸浮石まじり、粘性あり。
4. 10Y R3/4、暗褐色、八戸浮石まじり、粘性なし。

#### M-23ピット

1. 10Y R3/3暗褐色、炭化材、八戸浮石、粘性なし。
2. 10Y R3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石、粘性なし。
3. 10Y R4/6褐色、粘性あり。

第39図ピット

m × 0.13m、深さ0.09m)は南東壁際に位置しており、楕円形を呈している。P<sub>2</sub>(径0.14m × 0.11m、深さ0.10m)は南壁際に位置しており、楕円形を呈している。出土遺物はない。

〔M-25ピット〕 (第40図、PL20A①②)

南傾斜面の上部に位置する。開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.33m × 1.32m、底部径1.67m × 1.51m、深さは北壁で0.67mを測る。断面形はフラスコ形を呈している。壁は南壁で直立するが、その他の壁では底面から開口部まで内傾している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土、黒褐色土の3層に大別され、レンズ状を呈している。混入物、粘性等によりさらに6層に細別される。混入物は径2mm～10mmの炭化物、粒径2mm～4mmの浮石粒、焼土粒、砂岩である。炭化物は埋土上位から中位にかけて多量に含まれる。底面は地山の第Ⅴ層で構成されており、平坦で堅く緻密である。底面に径7mmの炭化物が少量点在している。遺物は出土していない。

〔M-26ピット〕 (第40図、PL20B)

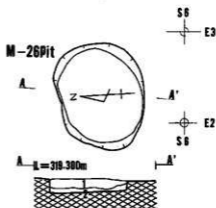
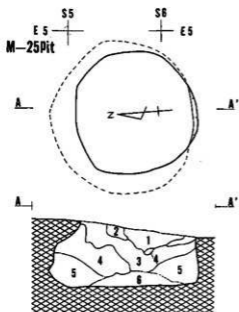
南傾斜面の上部に位置する。開口部、底部共楕円形を呈しており、開口部径1.13m × 0.90m、底部径1.05m × 0.84m、深さは北西壁で0.22mを測る。断面形はピーカー形を呈しており、壁は底面より開口部までわずかに外傾する。埋土は暗褐色土であり、混入物、粘性等により2層に細分される。混入物は径3mm～6mmの炭化物と粒径3mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅵ層で構成されており、平坦で堅く締まっている。底面に径2mmの炭化物が微量点在している。

〔M-27ピット〕 (第40図、PL20C)

南傾斜面の上部に位置する。開口部は円形、底部は不整形円形を呈している。開口部径0.65m × 0.62m、底部径1.54m × 1.40m、深さは西壁で0.44mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底部より開口部へ内傾している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに4層に細別される。混入物は径2mm～5mmの炭化物、粒径2mm～5mmの浮石粒、焼土粒である。底面は地山の第Ⅵ層から構成されており、中央がやや窪んでいる。底面は堅く緻密である。底面に径2mmの炭化物が微量点在している。遺物は出土していない。

〔M-30ピット〕 (第40図、PL20D)

南傾斜面の上部に位置する。開口部、底部共円形を呈している。開口部径0.91m × 0.90m、底部径1.04m × 1.00m、深さは北東壁で0.51mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底

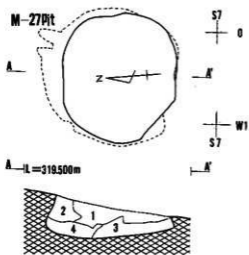


M-25ビット

1. 10Y R3/4, 暗褐色, 炭化材, 浮石まじる, 粘性あり, 黄土粒。
2. 10Y R4/6, 褐色, 炭化物, 浮石まじる, 粘性あり。
3. 10Y R2/3, 暗褐色, 炭化材, 浮石まじる, 粘性なし, 砂粒。
4. 10Y R4/4, 褐色, 浮石まじる, 粘性なし。
5. 10Y R4/4, 褐色, 浮石まじる, 粘性あり。
6. 10Y R3/3, 暗褐色, 炭化材, 浮石まじる, 粘性あり。

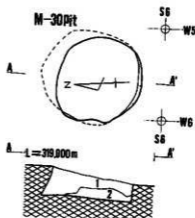
M-26ビット

1. 10Y R3/3, 暗褐色, 炭化材, 浮石まじる, 粘性なし。
2. 10Y R3/4, 暗褐色, 炭化物, 粘性あり。



M-27ビット

1. 10Y R3/3, 暗褐色, 炭化物, 八戸浮石まじる, 粘性なし。
2. 10Y R4/3, 褐色, 炭化物, 八戸浮石まじる, 粘性あり。
3. 10Y R3/3, 暗褐色, 炭化物, 八戸浮石まじる, 粘性あり。
4. 10Y R3/4, 暗褐色, 炭化材, 黄土粒まじる, 粘性あり。



0 1m

第40図 ビット

面より開口部へ北壁で内傾し、南壁で直立している。埋土は暗褐色土であり、混入物、粘性等によりさらに2層に細別される。混入物は径5mm~13mmの炭化物、粒径4mm~5mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅵ層で構成されており、平坦で軟らかい。底面に径2mmの炭化物が微量点状在している。遺物は出土していない。

【N-14ピット】(第41図、PL21A①②、PL33-12)

南傾斜面の中部に位置する。開口部は不整形円形、底部は円形を呈している。開口部径1.20m×1.19m、底部径1.57m×1.47m、深さは北西壁で0.99mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より開口部へ等脚台形状に内傾している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに7層に細別される。混入物は径1mm~3mmの炭化物、粒径3mm~7mmの浮石粒、チャートである。底面は地山の第Ⅴ層で構成されており、凹凸の起伏がなく平坦でよく締まっている。底面に径6mmの炭化物が少量点状在している。

遺物は埋土下位より縄文土器片が1点(第41図85)出土している。85は口縁部~体部片である。口縁部は体部よりわずかに外反しており、口唇部が丸味をもつ。地文は単節のLRの斜行縄文であり、内面は横位にナデを施している。外面に煤が付着している。

【N-18ピット】(第41図、PL20E)

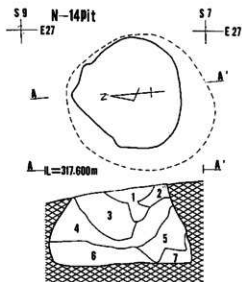
南傾斜面の中部に位置する。開口部と底部共円形を呈している。開口部径1.17m×1.14m、底部径1.67m×1.57m、深さは北東壁で0.70mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より頸部へ強く内傾し、頸部から開口部へ直立している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに5層に細別される。混入物は径5mm~10mmの炭化物、粒径3mm~7mmの浮石粒、チャートである。底面は地山の第Ⅴ層で構成されており、平坦でよく締まっている。底面に径2mmの炭化物が微量点状在している。出土遺物はない。

【N-22ピット】(第41図、PL21B①②、PL33-2)

南傾斜面の中央に位置する。開口部、底部共円形を呈している。開口部径1.34m×1.33m、底部径1.46m×1.44m、深さは北西壁で0.69mを測る。断面形はフラスコ形を呈している。北壁から東壁にかけては直立するが、その他の壁では底面より開口部へ内傾している。埋土は上部より暗褐色土、黒褐色土、褐色土の3層に大別され、混入物、粘性等によりさらに5層に細別される。混入物は径1mm~6mmの炭化物、粒径3mm~9mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅴ層で構成されており、堅くよく締まっている。底面に径3mmの炭化物が少量点状在している。

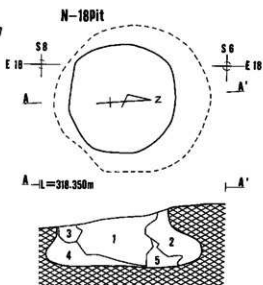
遺物は埋土中位から縄文土器片が1点(第41図75)出土している。75は口縁部~体部片であ



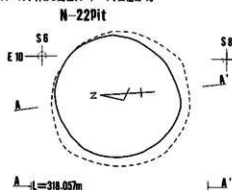


N-14ピット

1. 10Y R3/4暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R4/4褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R4/6褐色、八戸浮石まじる、粘性あり。
5. 10Y R褐色、チャート、粘性あり。
6. 10Y R暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
7. 10Y R3/3褐色、チャート、粘性あり。



埋土



N-22ピット出土遺物

N-14ピット出土遺物

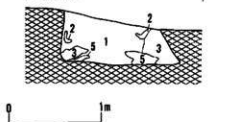
0 5cm

N-18ピット

1. 10Y R3/4暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R4/4褐色、浮石まじる、粘性なし、チャート。
3. 10Y R4/4褐色、浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R3/4暗褐色、炭化物、粘性なし。
5. 10Y R4/4褐色、浮石まじる、粘性あり。

N-22ピット

1. 10Y R3/3暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R4/6褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R4/6褐色、浮石まじる、粘性あり。
4. 10Y R4/6褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。
5. 10Y R3/2暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。



第41図 ピット

る。体部より直立しており、口唇部は平坦である。文様をもたず、地文は単節のLRの斜行縄文である。

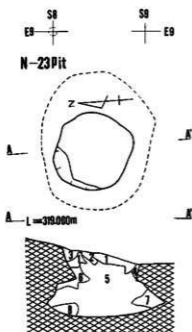
〔N-23ピット〕（第42図、PL21C、PL30②～⑥、PL34-1～5）

南傾斜面の中部に位置する。開口部はほぼ円形、底部は楕円形を呈している。開口部径0.85m×0.84m、底部径1.48m×1.15m、深さは北壁で0.80mを測る。断面形はフラスコ形を呈している。底面より頸部まで強く内傾し、頸部から開口部へ外傾している。埋土は上部から暗褐色土、褐色土、黒褐色土の3層に大別され、混入物、粘性等よりさらに8層に細別される。混入物は径1mm～14mmの炭化物、粒径3mm～6mmの浮石粒、チャートである。炭化物は埋土上位から下位にかけて多量に含まれている。底面は地山の第Ⅹ層で構成されており、平坦で堅く緻密である。底面に径3mmの多量の炭化物と微量の焼土粒が点在している。

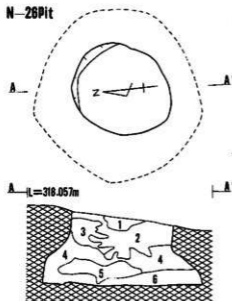
遺物は埋土上位から縄文土器片が3点（第42図88～90）、土製品1点（第42図37）、石器1点（第42図104）、埋土中位から縄文土器片2点（第42図91・92）、植物の炭化物が3点出土している。88は口縁部～体部片である。口縁部は体部より直立しており、口唇部は丸味をもつ。口唇部に刻みを施している。口縁部に文様を施し、体部は単節のLRの斜行縄文である。モチーフは沈刻文による噛み合う三叉文である。その下部に二条の沈線を廻らしている。内面には横位ヘナデを施している。89は口縁部片である。口唇部は丸味をもつ。よく研磨されており、文様をもつ。モチーフはC字文を連続させた渦巻文である。内面は横位ヘナデを施している。90は体部片である。地文は単節の縄文である。91は得手の口縁部片である。口唇部は丸味をもつ。口唇部に2個一組のB形突起を付している。沈刻文による文様が施されているが、モチーフは不明瞭である。92は体部片である。地文は単節の細かい羽状縄文である。37は破片であるため断定はできないが、残存部分から土陶の可能性が高い。内湾する部分が土陶の上腕部から体部片と推定できる。体部に朱が塗布されている。104はスクレイパーである。三角形を呈しており、表裏面共第一次剝離面を大きく残している。表面の二側縁に撃打による二次加工をおこなっている。刃部の形状は鋸状歯縁状を呈している。重量は20gであり、石質は玻璃質流紋岩である。植物の炭化物は堅果類のオニグルミとクリの枝である。

〔N-26ピット〕（第42図、PL21D）

南傾斜面の中部に位置する。開口部は楕円形、底部は円形を呈している。開口部径1.11m×0.93m、底部径1.85m×1.70m、深さは北東壁で0.83mを測る。断面形はフラスコ形を呈している。底面より頸部へ強く内傾し、頸部より開口部まで直立している。埋土は上部より褐色土、暗褐色土の2層に大別されるが、混入物、粘性等から6層に細別される。混入物は径3mm～11



N-23ピット出土遺物



N-23ピット

1. 10Y R 3/3暗褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R 3/4暗褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R 4/4、褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R 3/4暗褐色、八戸浮石まじる、粘性なし。
5. 10Y R 2/3黒褐色、炭化材、八戸浮石まじる。
6. 10Y R 4/6褐色、炭化材、粘性あり。
7. 10Y R 3/4暗褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性あり。
8. 10Y R 4/6褐色、炭化物まじる。

N-26ピット

1. 10Y R 4/6褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R 3/3暗褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R 4/6褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R 4/6褐色、炭化物、粘性あり、チャート。
5. 10Y R 3/3暗褐色、炭化材、八戸浮石まじる、粘性あり。
6. 10Y R 3/4暗褐色、炭化材、粘性あり、チャート。



第42図 ピット

mmの炭化物と粒径3mm～7mmの浮石粒、チャートである。底面は地山の第Ⅴ層から構成されており、軟弱でチャートによる露頭がみられ凹凸が著しい。遺物は出土していない。

〔N-32ピット〕 (第42図)

南傾斜面の下部に位置する。開口部は楕円形、底部はほぼ円形を呈している。開口部径0.80×0.66m、底部径0.56m×0.54m、深さは南東壁で0.27mを測る。断面形は皿形を呈しており、底面より開口部へ内湾気味に立ち上がっている。埋土は暗褐色土であり、混入物、粘性等により4層に細別される。混入物は径2mm～3mmの炭化物と粒径3mm～5mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅵ層で構成されており、小さな凹凸の起伏に富み、強く締まっている。遺物は出土していない。

〔O-27ピット〕 (第43図、PL22A)

南傾斜面の中部に位置する。当ピットはO-28ピットと南西側で重複しており、O-28ピットを切っている。開口部、底部共ほぼ円形を呈している。開口部径1.18m×1.09m、底部径1.38m×1.25m、深さは北東壁で0.54mを測る。断面形はフラスコ形を呈しており、底面より頸部へ内傾し、頸部から開口部へ直立している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等によりさらに5層に細別される。混入物は径1mm～11mmの炭化物、粒径3mm～5mmの浮石粒、チャート、雲母である。底面は地山の第Ⅴ層であり、平坦で強く緻密である。底面に炭化物が微量点在している。遺物は出土していない。

〔O-28ピット〕 (第43図、PL22B)

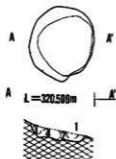
南傾斜面の中部に位置する。当ピットは北東側でO-27ピットと重複しており、O-27ピットにわずかに切られている。西側に木根による攪乱を受けている。開口部、底部共ほぼ円形を呈している。開口部径0.65m×0.62m、底部径0.68m×0.61m、深さは北壁で0.27mを測る。断面形は鍋底形を呈している。埋土は上部より黒褐色土、暗褐色土、褐色土に細分される。混入物は径2mmの炭化物と粒径3mm～6mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅵ層から構成されており、中央から壁際にかけて内湾気味に傾斜している。北西壁際に副穴1基P<sub>1</sub>(径0.12m×0.08m、深さ0.16m)を伴う。遺物は出土していない。

〔P-26ピット〕 (第43図)

南傾斜面の下部に位置する。開口部、底部共楕円形を呈している。開口部径0.96m×0.60m、底部径1.45m×0.57m、深さは南壁で0.38mを測る。断面形はピーカー形を呈しており、北東



N-32 Pit

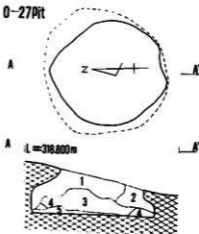


N-32ピット

1. 10Y R 3/3 暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性ややあり。
2. 10Y R 3/4 暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
3. 10Y R 3/4 暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。
4. 10Y R 3/3 暗褐色、炭化物、浮石まじる、粘性なし。

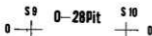


O-27 Pit

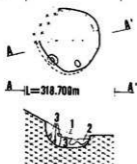


O-27ピット

1. 10Y R 3/4 暗褐色、炭化物、八戸浮石、粘性あり。
2. 10Y R 3/3 暗褐色、炭化物、八戸浮石、粘性あり。
3. 10Y R 4/4 褐色、炭化物、チャートまじる、粘性あり。
4. 10Y R 4/6 褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性あり。
5. 10Y R 3/3 暗褐色、炭化物、八戸浮石まじる、粘性あり。  
チャート、露出まじる。



O-28 Pit

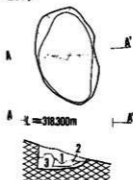


O-28ピット

1. 10Y R 黒褐色2/2、炭化物、八戸浮石、熟土まじる、粘性なし。
2. 10Y R 暗褐色3/4、八戸浮石、粘性なし。
3. 10Y R 褐色4/4、炭化物、八戸浮石まじる、粘性なし。



P-26 Pit



P-26ピット

1. 10Y R 3/4 暗褐色、露出まじる、八戸浮石まじる、粘性なし。
2. 10Y R 4/4 褐色、炭化物まじる、粘性あり。
3. 10Y R 4/6 褐色、八戸浮石まじる、粘性なし。

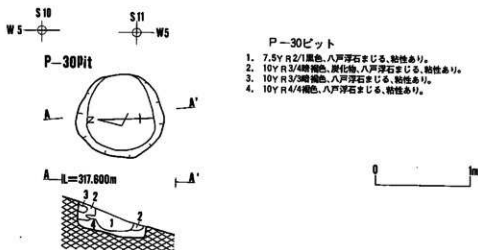


第43図ピット

壁は直立するが、それ以外は底面より開口部へ外傾している。埋土は上部より暗褐色土、褐色土の2層に大別され、混入物、粘性等により3層に細別される。混入物は径5mmの炭化物、粒径5mm～7mmの浮石粒、雲母である。底面は地山の第Ⅵ層で構成されており、平坦で締まっている。遺物は出土していない。

〔P-30ピット〕 (第44図、PL22C)

南傾斜面下部に位置する。開口部は円形、底部は楕円形を呈している。開口部径0.91m×0.87m、底部径0.79m×0.70m、深さは南西壁で0.39mを測る。断面形はビーカー形を呈しており、底面より開口部へ外傾している。埋土は上部より黒褐色土、暗褐色土、褐色土の3層に大別され、混入物、粘性等から4層に細別される。混入物は径2mmの炭化物、粒径2mm～3mmの浮石粒である。底面は地山の第Ⅵ層で構成されており、平坦で堅くよく締まっている。遺物は出土していない。

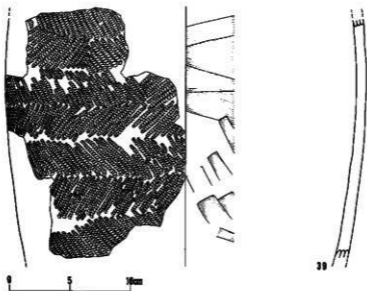


第44図 ピット

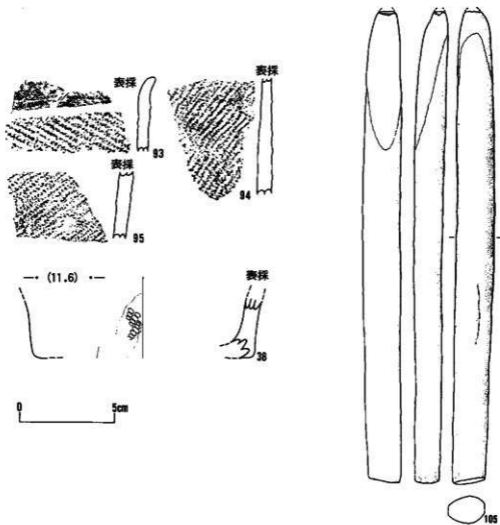
## (2) 遺構以外の出土遺物

その他の遺物は遺構検出及び表面採集により出土したものである。縄文土器5点(第45図38・39、93～95)、石製品1点(第45図105)を数える。39はN-38区の風倒木址による攪乱土内より出土した深鉢形土器の体部片である。地文は横方向に転がした単節の羽状縄文である。内面は斜めヘナデを施している。38は底部～体部片である。地文は単節のLRの斜行縄文である。93は口縁部～体部片である。口唇部がわずかに外反している。沈線により口縁部と体部に区画されている。口縁部は無文帯であり、体部は単節のRLの斜行縄文である。94・95は体部片である。地文は単節の縄文であり、内面にナデを施している。105はN-35住居址に近接した表土中より出土した石棒である。最大長39.3cm、幅3.1cmである。先端部が一部欠けており、他端は横に断ち切られた原石の破砕面がみられる。断面形は楕円形を呈している。重量は524gであり、石質はホルンフェルスである。(第45図、PL30-7～9)

(吉田 洋)



第45図 - 1 表採・粗掘の出土遺物



第45図 - 2 表探・粗掘の出土遺物



## Ⅵ ま と め

前項までは事実記載を中心として調査方法・遺跡周囲の環境等について記述したが、それらの事実記載をもとにして若下の考察を加えてまとめとしたい。なお、前項の「検出された遺構と遺物」では、遺構に伴う遺物は遺構の中で説明を加えたが、本項では遺構と遺物を切り離して考え、最後に一体化してまとめとしたい。

### (1) 遺 構

#### 1) 住居址

本遺跡の調査では5棟の住居址が検出されている。ともに竪穴式であるが、平面形でみると円形を呈する住居址と方形を呈する住居址があり、内部施設では円形住居址は床面に炉を設置し、方形住居址ではある一辺にカマドを設置している。出土遺物は、円形住居址は縄文時代晩期前葉の土器を出土していることから、縄文時代晩期前葉の住居址と考えられる。方形住居址では土師器が出土しており、その中の1棟(G24住)よりクロコ使用成形回転糸切り底で内面黒色処理の坏が出土していることから、平安時代に属する住居址といえよう。ここでは縄文時代住居址と平安時代住居址に分けて他遺跡の類例と比較してみたい。

##### a 縄文時代住居址

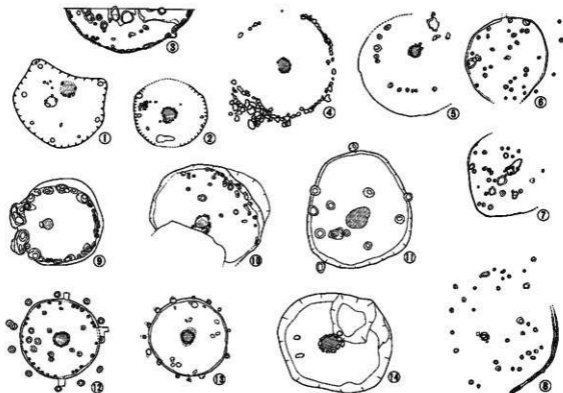
縄文時代晩期の遺物を出土した住居址は2棟検出されている。2棟とも竪穴式であり、柱穴や周溝が検出されないという共通点があるが、規模や炉址では若干の相違がみられる。H-9住居址は径3.5 mほどの円形で床面ほぼ中央には径66cmの円形に6個の垂角礎を埋置した石囲い炉が検出されている。柱穴や周溝は検出されていない。遺物は床面より筒形の精製土器が1点出土しており、大洞式土器の編年に従えば大洞B-C式に併行するものと考えられる。もう1棟のN-35住居址は斜面下位の部分が流亡しているが、径3 m位の円形と推定され、残存する床面のやや南寄りには85cm×66cmの範囲で現地性焼土が検出されているが、礎等を埋置しない地床炉である。同じく柱穴や周溝は検出されていない。遺物は2ケの完形土器と1ケ体の破片・石器があり、大洞B-C式に併行すると考えられ、住居址間では若干の相違点があるが、出土遺物の比較ではほぼ同時期に併行する遺物のみであり、2棟とも大洞B-C式土器併行期の住居址であり、本遺跡は当該期の集落址として理解されよう。

岩手県内で縄文時代晩期の住居址が検出されている遺跡は17遺跡(一覧表2参照)である。もっとも早い調査例は岩手郡岩手町の「大森どじの沢遺跡」で昭和35年に調査されている。次にそれらの遺跡で検出された住居址について紹介しておこう。

一覽表 2 岩手県における縄文晩期住居址の検出遺跡

遺跡名	検出	期	地	址	柱穴	時期	所在地	文献	備考	図番
1 どの沢遺跡	4棟	円形	石巻・伊	無	大洞一C式	岩手県岩手郡赤松町	岩手大学考古学研究所刊1	2棟は明確でない。	407-①②	
2 栗の沢遺跡	1棟	円形	石巻・伊	無	大洞一C式	岩手県九戸郡九戸村	日本考古学年報No.13	遺構を確かめた。	407-③	
3 飯沼遺跡	4棟	円形	石巻・伊	無	不明	岩手県岩手郡宇石町	飯沼遺跡発掘調査	明確な遺構が認められ、	407-④	
4 長沼遺跡	1棟	円形	不明	無	大洞A式	岩手県二戸市	岩手県縄文センター報告13集	列は認められている。	407-⑤	
5 野原遺跡	3棟	円形	石巻・伊	無	大洞C式	岩手県岩手郡住田町	岩手県縄文センター報告11集		407-⑥	
6 八戸遺跡	1棟	円形	地味伊	無	大洞C式	岩手県九戸郡地味町	岩手県縄文センター報告15集		407-⑦	
7 岩成遺跡	1・3棟	円形	石巻・伊	無	大洞A・C式	岩手県九戸郡地味町	岩手県縄文センター報告15集		407-⑧	
8 岩崎丁遺跡	50棟以上	円形	石巻・伊	無	不明	岩手県二戸郡赤松町	岩手県縄文センター報告15集	50年程度で400棟程度	407-⑨	
9 長谷川遺跡	4100棟	円形	南九戸郡	有	不明	岩手県岩手郡住田町	岩手県縄文センター報告20集	遺構がばらばら。	407-⑩⑪	
10 森内遺跡	14棟	円形	石巻・伊	有	大洞B・C式	岩手県盛岡市	岩手県縄文センター報告15集	遺構もあつた。	407-⑫	
11 長谷川遺跡	4〜5棟	不明	不明	不明	大洞C式	岩手県盛岡市	岩手県縄文センター報告15集	岩手大学で調査。本報告。	407-⑬	
12 安楽遺跡	2棟	円形	石巻・伊	無	大洞C式	岩手県岩手郡石鳥谷町	岩手県縄文センター報告15集	2棟の遺構。	407-⑭	
13 川崎遺跡	2棟	円形	石巻・伊・地味伊	無	大洞一C式	岩手県九戸郡九戸村			1000・1400	

本報告を脱稿後に堂ヶ沢遺跡（盛岡市、大洞B式、岩手県埋文センター報告13集）と長沢遺跡（稗貫郡石鳥谷町、大洞B-C式、岩手史学研究No.4）の二遺跡でも縄文時代晩期の住居址が調査されていることが判明した。なお、当埋文センターが本年調査した道地Ⅲ遺跡（九戸郡九戸村、現地説明会資料）でも検出されている。



第46図 縄文時代晩期住居址例

〔どじの沢遺跡〕<sup>①</sup> 報告書によれば4棟の住居址が検出され、その中の2棟はほぼ全体が確認されている。1号住は径約4mの円形で径76cmほどの円形石囲い炉を設置し、壁際には4ヶの柱穴状ピットが検出されている。大洞B-C式土器が出土している。3号住は径80cmの円形石囲い炉を設置した径4.2m位の円形で壁際に7ヶの柱穴状ピットが検出されている。時期を明確にしていなが、一応晩期に属するとしている。

〔妻の神遺跡〕<sup>①</sup> 報告では、径70cmの円形石囲い炉が検出され、それを中心として2m位離れて礫群が弧状に検出され、住居址であろうとしている。柱穴や周溝は明確でない。大洞B-C式土器を出土している。

〔桜沼遺跡〕<sup>①</sup> 調査によって4棟検出されている。報告によれば、1号住は径60cm位の円形石囲い炉を中心としてほぼ4mの円形に礫が配置されており、壁の崩壊を防ぐ補強施設と理解し、住居址であろうとしている。4棟ともに同様であろう。その他炉址が単独で9基検出されている。晩期の住居址としているが、時期は明確でない。

〔長瀬D遺跡〕<sup>①</sup> 調査で1棟検出されているが、全体の殆どが削割されている。主柱穴・壁柱穴が検出され、出土土器から大洞A式併行期と報告されている。

〔野駄遺跡〕<sup>①</sup> 3棟の住居址が確認されている。その中でAⅡ-2住は径95cm×75cmの石囲い炉を中心とする径5.7mと径4.8mの重複する円形住居址である。主柱穴や周溝は検出されず壁柱穴が検出されている。他の1棟もほぼ同様で、壁柱穴の配列から推定すると円形石囲い炉を設置した径3m位の円形住居址である。大洞C<sub>2</sub>式土器を出土している。

〔吠屋敷遺跡〕<sup>①</sup> 調査で1棟が検出され、現説資料によれば径約3.1mの円形を呈する整穴住居址で、礫を1個埋置した炉址が検出されている。壁柱穴列の中に4ヶの主柱穴も検出されている。大洞C<sub>2</sub>式土器を出土しているという。

〔君成田遺跡〕<sup>①</sup> 4棟検出されている。出土土器から、大洞B-C式土器伴出住居址3棟・A<sub>1</sub>式土器伴出住居址1棟に細分される。前者は径2.4m～4m位の円形で、石囲い炉が検出されている。主柱穴は検出されず、壁柱穴が検出されている。後者は長径6.25m・短径5m位の楕円形で石囲い炉が検出されている。壁柱穴が検出され、主柱穴は4ヶと推定している。

〔曲田I遺跡〕<sup>①</sup> 調査は55年度・56年度の2年間行い、50棟に及ぶ住居址が検出されている。ここでは、55年度検出の6棟の中から2棟を紹介する。HⅢ-1住はほぼ径3.1mの円形で地床炉を伴っている。周溝は検出されていないが4～5ヶの柱穴状ピットが検出されている。HⅣ-1住は径2.5m位の円形で円形石囲い炉が検出されている。柱穴や周溝は検出されていない。晩期中葉としている。

〔長者屋敷遺跡〕<sup>①</sup> 4住居址群24棟が検出されている。規模は径5.6m～8.7m位の範囲で、平面形は円形と隅丸方形の二形態あるが、隅丸方形が多い様である。炉は地床炉・土器埋設炉・

土器埋設石囲い炉がある。柱穴は5ヶ以上10ヶ位まであり、壁柱穴は周溝の検出された1棟以外には検出されていない。晩期末葉に位置づけられるという。

〔竈内遺跡〕<sup>⑤</sup> 晩期に属する住居址は14棟検出されている。その中のSG-V住は円形石囲い炉を設置する円形住居址で、柱穴が床面上と壁外と壁際とに検出されている。SH-V住もSG-V住とほぼ同様の構造をもつ。本遺跡の住居址はほとんど大洞B・B-C式土器を共存している。

〔猪去館遺跡〕 調査者の御教示によれば、4～5棟が検出されているという。その多くは大洞C<sub>1</sub>式土器を出土しているというが、詳細は不明である。

〔安堵屋敷遺跡〕<sup>⑥</sup> 2棟検出されている。1号住は円形石囲い炉をもつ住居址であるが、床面が確認されたのみで、平面形・柱穴等は不明である。2号住は円形石囲い炉をもつ径3mの円形住居址で、柱穴や周溝は検出されていない。2棟とも大洞C<sub>2</sub>式土器を出土しているという。

以上、少数例であるが縄文時代晩期に属する住居址を概観してきたが、これらの住居址についてまとめてみると次の様になる。

- ① 時期的には大洞B式よりA'式までの晩期全般に亘る住居址が検出されている。
- ② 規模は最小径2.5mで最大は径8.7mであるが、3m～4m位がもっとも多い。時期的にみると、晩期末葉が他時期より若干大型でともに径5.5m以上である。
- ③ 平面形は円形がもっとも多く、おそらく主体をなすと考えられるが、他に隅丸方形・楕円形があり、末葉にこの傾向が強い。
- ④ 主柱穴はもつものもたないものがあり、共存するらしい。
- ⑤ 壁柱穴はもつものもたないものがあるが、主柱穴がなくて壁柱穴だけのもの、主柱穴だけのもの、主柱穴も壁柱穴もたないものに細分される。
- ⑥ 炉の構造は、地床炉・円形石囲い炉・土器埋設炉・土器埋設石囲い炉が検出されているが、円形石囲い炉が主体を成し、他の例は少ない。設置場所では床面中央の場合と、どちらか一方の壁に若干寄る場合があり、一方の壁に寄る方が多い様である。

この様なまとめと、本遺跡のそれを比較してみた場合、大きな矛盾はみられない。しかし、大洞B式やB-C式土器を出土した他遺跡例との比較では、主柱穴の有無・壁柱穴の有無に相違がみられる。本遺跡例では主柱穴・壁柱穴ともに全く検出されていない。他遺跡例では、妻の神遺跡以外では主柱穴か壁柱穴かが検出されている。妻の神遺跡例では弧状に検出された礫が柱の周囲を補強した根固め石として理解されている様であるが、これがそうではなくて桜沼遺跡例の様に壁の崩壊を防ぐ為の施設であるとすれば、本遺跡例と同様に柱穴をもたないことになる。妻の神遺跡は本遺跡と同じ九戸村に所在し、何らかの共通性が推定される。

以上のことから、岩手県内での縄文晩期前葉の住居址は平面形は円形で、床面に円形石囲い炉を設置し、主柱穴もしくは壁柱穴をもつのが一般的である。それ以外に炉が地床炉であった

り、主柱穴や壁柱穴をもたない住居址も一部にみられ、この例は現在の所九戸村での2遺跡だけである。この現象が全体的なのか地域的なのかは不明である。

#### b. 平安時代住居址

本遺跡の調査で検出された平安時代に属する住居址は3棟検出されている。3棟とも平面形は方形を呈しているが、規模は3.7m×3.8m・4.2m×4.0m・4.9m×4.9mと若干差がある。明らかに柱穴と考えられるピットは3棟とも検出されていないが、G-24住では周溝が検出され、東壁際中央と北壁際中央やや東寄りに各1ヶのピットが検出されている。他の2棟では周溝は検出されていない。カマドはJ-31住を除いた他の2棟はともに西壁ほぼ中央に設置され、J-31住は北壁中央やや東寄りに設置している。袖部の構造は多少の差はあるが礫を芯にして黄橙色の火山灰質土やシルトを貼り付けて構築し、3棟ともほぼ同様である。燃焼部内にはG-24住が河原石を1個使用した支脚が、J-31住には轆の羽口を転用した支脚がそれぞれ検出されている。煙道はG-24住とJ-31住は割り貫き式である。J-40住は検出面より床面まで15cm位と浅かったことから、掘り込み式なのか割り貫き式なのか明確でないが、他の2棟の例から考えると、割り貫き式であった可能性もある。これらの住居址に伴う遺物の多くは土師器であるがその中の甕は3棟ともほぼ共通した要素を具備しており、いずれもロクロ使用成形で、外面調整は口縁部「横ナデ」・体部「篋削り」で位上げられ、器形は若干窄んだ頸部より強く外反する短かい口縁部をもった粗雑な作りの俗に「ナタ削りの土師」といわれるタイプである。他の器種は少ないので明確でないが、G-24住より出土した坏はロクロ使用成形糸切底で内面黒色処理されたものである。この様に甕はロクロ不使用巻き上げ成形・坏はロクロ使用成形という組み合わせは、岩手県北部では一般的な現象であり、調査事例は数多く知られている。九戸地域では軽米町吠屋敷遺跡や野田村中平遺跡で集落が調査されている。以上の様に3棟の間には若干の相違があるもののほぼ同時期に併存した住居址として理解できよう。特にJ-31住居址の床面より「鉄滓」や支脚として転用された轆の羽口が出土していることから、製鉄もしくは鍛冶に関連する集落であった可能性がある。遺物からみた集落の年代は10世紀後半を中心とする時期と推定される。(遺物の項で詳述する)

#### 2) 住居址状遺構

本遺跡で住居址状遺構としたのは、他遺跡では竪穴状遺構としている遺構である。筆者等はこのような遺構に対して検討を加えた結果、形状や規模は住居址と近似しているが、カマドや炉・柱穴等をもたない為に、住居址として認定できない遺構を「住居址状遺構」と呼ぶことにした。

本遺跡の調査ではH-11住居址状遺構とN-19住居址状遺構の2基が検出されている。平面形から円形を呈するものと長方形を呈するものに分類される。

#### a. H-11住居址状遺構

規模は径3.2m×3.5mを測り、形状は円形を呈する。東側に位置するH-9住居址とほぼ同規模(3.5m×3.2m)で形状も一致する。柱穴はともに検出されないという共通点があるが、本遺構の場合には炉址が検出されないという相違点がある。本遺構出土の遺物は縄文土器のみであり、他の遺物は含まない。この様なことから、H-11住居址状遺構は縄文時代の遺構と考えられ、埋土の堆積状況や形状・規模がH-9住居址と近似することや、本遺跡検出の縄文時代住居址は晩期に属する住居址だけであることから、本遺構も縄文時代晩期に属するものと推定される。機能を知る資料は得られていないが、上屋構造をもって「住居」的に使用されたものではないかと推定される。

#### b. N-19住居址状遺構

本遺構は規模が3.51m×2.81mの長方形で、壁高は1.16mを測る。埋土の堆積状況から板材を利用した壁の補強施設(もしかすると板壁かもしれない。)があったらしいことが推定されるが、カマドやピット等の内部施設は全く検出されていない。床面ほぼ中央に浅くて小さなピットが検出されているが、柱穴というほどではない。また、壁高が1.16mと本遺跡検出の住居址と比較してもっとも深い。出土遺物は埋土上位より土師器の破片が1コ出土しているのみである。以上の様なことから判断して、埋土上位とはいえ土師器の破片が出土したことから古代に属する遺構と考えられ、おそらく、本遺跡の平安時代集落を構成する施設の一部であろう。この様な遺構は水沢市膳性遺跡や二戸郡安代町上の山Ⅵ遺跡に類例がみられ、これらとの比較から性格について考えてみたい。

〔膳性遺跡〕 本遺跡では1例(J-6土坑)が検出されている。規模は3.3m×2.9mを測り、平面形は南北に長軸をもつ長方形である。壁高は約50cmで本遺跡内の同時期住居址の約2倍の深さをもつ。カマドや明確な柱穴は検出されていない。床面中央や南西部寄りに深さ約6cmの小ピットが検出されている。出土遺物はロクロ不使用の丸底杯の完形品が床面直上より1個出土している。このことから平安時代以前の遺構であることは確実であり、性格的にはいわゆる土坑と考えるには規模が大きく、さりとて、住居址に認定するには問題があり、筆者は上屋をもって住居以外に使用された「倉庫」的性格の強い家屋であろうと推定している。

〔上の山Ⅵ遺跡〕 本遺跡では9基検出されている。これには①形状正方形で一辺2m-2.5mのもの。-5棟 ②形状長方形で長軸3m未満のもの。-4棟に大別され、①に属するものの中に葦等の炭化物が多量に検出された遺構があり、このことから上屋をもち焼失したものであろうとしている。②に属するものには床面中央部に30cm-40cmの礫が埋置されている例がある。また、周溝が検出された例もある。出土遺物は土師器・土師器杯・土師器壺破片が出土している。本遺跡検出の集落は平安時代に属することから、この様な遺構も集落を構成する施設と判断し

ている。性格は小屋跡であろうとしている。

以上の2遺跡例と本遺跡のそれを比較した場合、勝手遺跡例は平安時代以前と本遺跡の平安時代とは異なるものの、2遺跡とも遺構の状況は良く似ている。特に、上の山頂遺跡例の正方形型の例と近似している。時期的にも一致し、性格的にも同じ様な使用目的があったものと推定される。本遺跡の例も上の山頂遺跡と同じ様に倉庫的性格の強い小屋跡として考えたい。

### 3) ピット

本遺跡の調査では65基のピットが検出されている。これらのピットは台地の頂上部より南側斜面に多くあり、北側斜面には数が少ない。平面形ではI-10ピット-2だけは長方形を呈するが、他は全て円形を呈している。ここでは長方形を呈するピットと円形を呈するピットに分けて考えてみたい。

#### a. 長方形を呈するピット

平面形が長方形を呈するI-10ピット-2は、規模が長軸3.2m・短軸1.37mを測り、壁高も31cmと他のピットより浅い。長辺の床面壁際には周溝状の溝が検出されている。遺物は出土していないので時期を明確にしたいが、本遺跡内で検出された遺構の中で方形もしくは長方形を呈する遺構は平安時代に属する遺構のみであることから、本遺構も平安時代に属する遺構である可能性が高い。性格的にはカマドが検出されないことから住居址とは考えられない。床面壁際の溝をどう理解すればいいだろうか。仮に、側壁の補強材として考えれば枠組みの存在を考えなければならない。上屋をもつのかもたないか問題となるが、本遺跡で検出された住居址状遺構とした類いの遺構ではなかろうかと考えている。これはあくまで推定の域を出るものではないが、今後の類例の増加を待って改めて考えてみたい。

#### b. 円形を呈するピット

平面形が円形を呈するピットは64基である。それらは断面形によってフラスコ型とピーカー型に細分される。しかし、一口にフラスコ型やピーカー型といっても一概に判断をつけられなかった場合が多かった。ここでは、規模や壁の傾斜角度等の集計や比較と比率から本遺跡で検出されたピットの特性的について分析してみたい。なお、グラフには全体規模の判明する58基のみが記入されている。

#### ①規模 (一覧表3、47図)

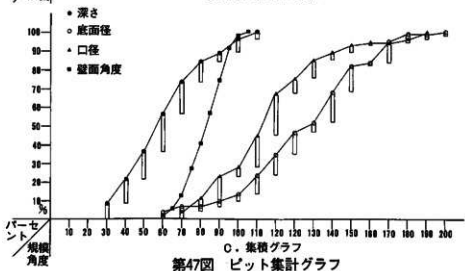
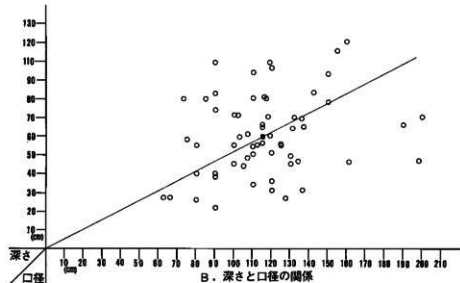
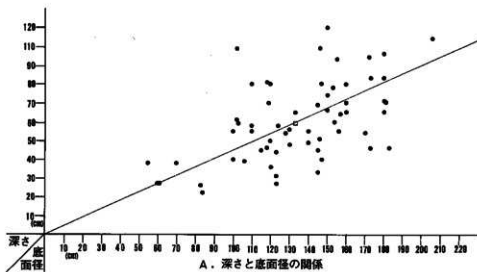
規模といった場合、一般には「開口部直径」・「底面直径」・「深さ」の各計測値を比較することによって判断するのであるが、本遺跡でもこの方法によって10cm単位ごとの頻度分布をグラフとしてみた。まず、その結果を集計してみる。

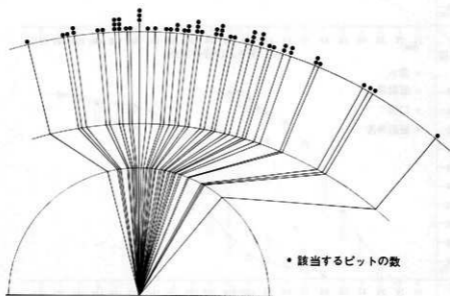
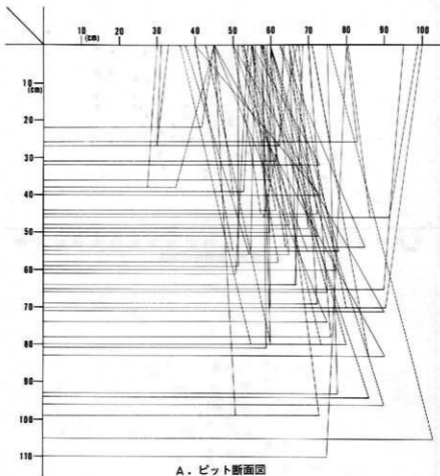
開口部の直径は最小62cmより最大200cmまでであるが、81cm～90cmが7基11.7%・101cm～110

一覽表 3 ビット集計表

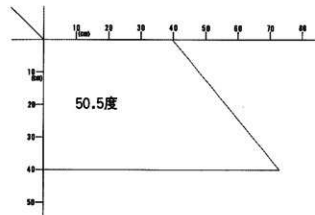
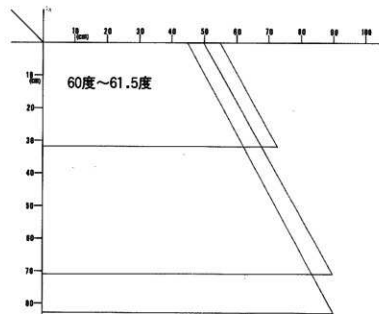
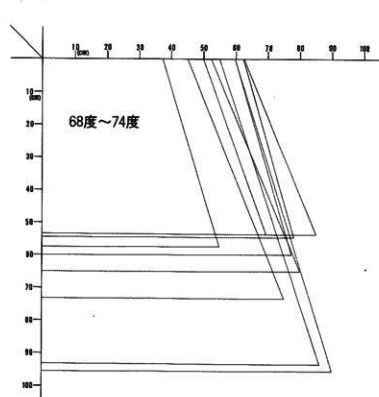
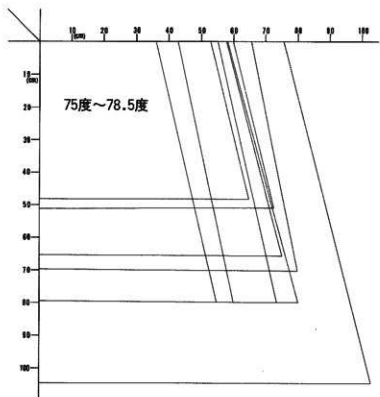
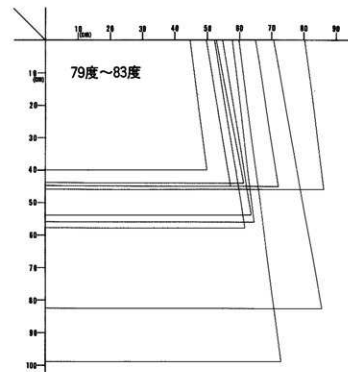
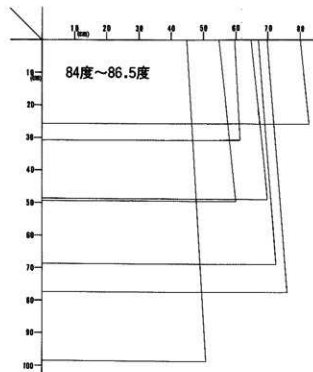
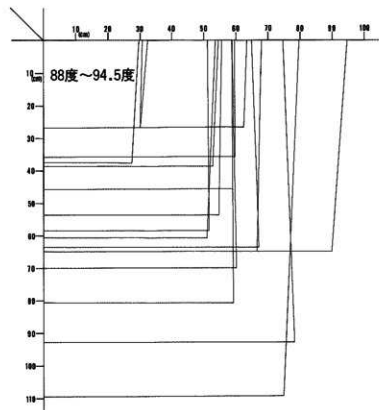
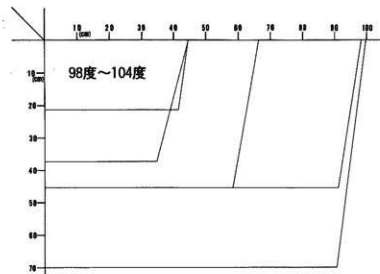
名 称	平面形	断面形	通線の有無	開口部径	底面径	厚さ	塗物の有無	図版番号	写真図版番号
H-7ビット	楕円形	ビーキー形	無	125×112	134×130	55	無	第20図	PL 7A
H-9ビット	円形	フラスコ形	無	136×107	144×130	48	純文士漆	第20図	PL 7B, PL 32-5・6・7・8・
H-18ビット	楕円形	ビーキー形	無	141×108	119×102	61	無	第20図	PL 7C
H-24ビット	楕円形	フラスコ形	無	159×142	182×173	83	純文士漆	第20図	PL 7D①②③, PL 30①②③
I-8ビット	楕円形	フラスコ形	有	130	120	50	無	第20図	PL 8A
I-10ビット-1			有	-	-	53	無	第20図	PL 8B
I-10ビット-2	長方形		無	203×137	204×105	31	無	第20図	PL 8C
I-15ビット	楕円形	フラスコ形	無	110×90	107×102	99	無	第20図	PL 8D
I-16ビット	円形	フラスコ形	無	170×150	180×155	93	純文士漆	第20図	PL 8①②, PL 32-11
I-17ビット			無			49	無	第20図	PL 9A
I-18ビット-1	円形	ビーキー形	無	120×103	95×100	59	無	第20図	PL 9B①②
I-18ビット-2	円形	ビーキー形	無	162×150	170×153	78	純文士漆	第20図	PL 10A, PL 32①②, PL 32-12・13
I-45ビット	円形	ビーキー形	無	120×116	130×118	81	純文士漆	第20図	PL 10C①②③, PL 32④
J-4ビット	円形	ビーキー形	無	170×160	165×150	110	無	第20図	PL 11-11・12・14, PL 33-1
J-8ビット	楕円形	フラスコ形	有	150×120	105×100	96	無	第20図	PL 10B
J-11ビット	円形	フラスコ形	無	80×73	100×110	80	無	第20図	PL 10C①②
J-20ビット	楕円形	フラスコ形	無	120×110	150×147	80	無	第20図	PL 11A①②
J-24ビット	円形	フラスコ形	無	110×105	130×114	58	純文士漆	第20図	PL 11B①②, PL 29③
J-25ビット	円形	ビーキー形	有	197×190	185×180	65	無	第20図	PL 11C①②
J-27ビット	円形	ビーキー形	無	200×200	189×181	70	土師形	第20図	PL 12A, PL 30③
K-6ビット	楕円形	ビーキー形	無	130×118	151×119	70	純文士漆	第20図	PL 12B①②, PL 33-3
K-10ビット	円形	フラスコ形	無	95×90	155×100	74	純文士漆	第20図	PL 12C, PL 33-4
K-14ビット	楕円形	フラスコ形	有	100×80	157×147	40	無	第20図	PL 12D
K-15ビット	円形	フラスコ形	無	80	100	55	無	第20図	PL 13A①②
K-16ビット	円形	フラスコ形	無	132×131	160×157	64	無	第20図	PL 13B①②
K-17ビット	楕円形	フラスコ形	無	130×110	190×172	94	無	第20図	PL 13C①②
K-19ビット	円形	フラスコ形	無	120×110	150×145	33	無	第20図	PL 14A
K-21ビット	円形	フラスコ形	有	130×125	190×170	54	無	第20図	PL 14B①②
K-22ビット	円形	フラスコ形	有	125×115	140×130	56	純文士漆	第20図	PL 14C①②, PL 33-14
K-24ビット	円形	ビーキー形	無	140×130	145×145	45	純文士漆	第20図	PL 14D, PL 30④, PL 33-5・6・7
K-25ビット	円形	フラスコ形	無	143×137	150×133	65	無	第20図	PL 15A①②
K-34ビット	円形	ビーキー形	無	165×161	175×173	46	無	第20図	PL 15B
K-44ビット	円形	フラスコ形	無	132×127	138×133	27	無	第20図	PL 15C
L-11ビット	円形	フラスコ形	無	200×190	190×193	46	無	第20図	PL 15D①②
L-13ビット	円形	フラスコ形	無	130	140	55	無	第20図	PL 16A①②
L-14ビット	楕円形	フラスコ形	無	130×105	150×123	44	無	第20図	PL 16B
L-19ビット-1	円形	フラスコ形	無	100	180	71	無	第20図	PL 16D
L-19ビット-2	円形		無	112×102		71	無	第20図	PL 16E
L-20ビット	円形	フラスコ形	無	122×119	168×154	60	無	第20図	PL 17A①②, PL 33-13
L-21ビット	円形	フラスコ形	無	120×120	130×123	31	無	第20図	PL 17B①②
L-23ビット	円形	フラスコ形	無	127×117	165×160	80	無	第20図	PL 17C①②
L-24ビット	円形	フラスコ形	無	130×125	143×156	55	純文士漆	第20図	PL 18A, PL 33-8
L-26ビット	円形	フラスコ形	無	75×75	119×110	58	無	第20図	PL 18B①②
L-31ビット	楕円形	ビーキー形	有	124×110	129×106	39	無	第20図	PL 18C
L-36ビット	楕円形	ビーキー形	無	152×134	149×118	46	無	第20図	PL 18D
L-42ビット	円形	フラスコ形	有	90×100	120×115	45	無	第20図	PL 18E
M-13ビット	楕円形	フラスコ形	無	170×155	220×206	105	純文士漆	第20図	PL 19A①②, PL 33-9・10・14
M-14ビット	円形	ビーキー形	無	130×120	130×120	36	無	第20図	PL 19B
M-20ビット	円形	フラスコ形	無	120×115	160×150	66	無	第20図	PL 19C
M-21ビット	楕円形	フラスコ形	無	130	140	49	無	第20図	PL 19D
M-23ビット	円形	フラスコ形	無	83×80	96×80	26	無	第20図	PL 19E
M-25ビット	円形	フラスコ形	無	133×132	170×160	70	無	第20図	PL 20A①②
M-26ビット	楕円形	ビーキー形	無	120×90	105×84	22	無	第20図	PL 20B
M-27ビット	円形	フラスコ形	無	140×120	150×145	51	無	第20図	PL 20C
M-30ビット	円形	フラスコ形	有	91×90	104×100	40	無	第20図	PL 20D
N-14ビット	不整形	フラスコ形	無	130×119	160×147	99	純文士漆	第21図	PL 21A①②, PL 33-12
N-18ビット	円形	フラスコ形	有	120×115	170×160	65	無	第21図	PL 20E
N-22ビット	円形	フラスコ形	無	135×135	150×145	69	純文士漆	第21図	PL 21B①②, PL 33-2
N-23ビット	円形	フラスコ形	有	85	150×130	80	純文士漆	第21図	PL 21C, PL 30⑤-⑥
N-25ビット	楕円形	フラスコ形	有	105×90	190×180	83	無	第21図	PL 21D
N-27ビット	楕円形	ビーキー形	無	80×66	58×60	27	無	第21図	PL 21E
O-27ビット	円形	フラスコ形	有	110×110	138×128	54	無	第21図	PL 22A
O-28ビット	円形	ビーキー形	無	60×62	60×61	27	無	第21図	PL 22B
P-26ビット	楕円形	ビーキー形	無	100×60	95×55	38	無	第21図	PL 22C
P-30ビット	円形	ビーキー形	無	110×90	75×70	38	無	第21図	PL 22C







壁面の角度  
第48図 ビット集計図



第49図 ビット壁面角度別分布

cm10基16.7%・111cm～120cm13基21.7%と、合計すると全体の50%を占めており、本遺跡で検出されたピットの口径規模の主体を為すと考えられる。底面の直径は最小64cm・最大206cmの範囲であるが、100cm以下が8基13%・161cm以上が11基19%をそれぞれ占めており、それ以外の68%は101cm～160cmの範囲に入るが、この範囲でも130cm台は3基5%と少なく、その他はほぼ均等に分布している。深さは最浅27cm・最深110cmであるが、80cm位までの深さに84%の50基がほぼ均等に分布し、81cmより深いピットは10基16%と少ない。もう少し細かく観察すると、50cm台の深さのピットが最も多く12基20%を占めている。

以上の集計結果をまとめてみると、本遺跡検出のピットを規模についてだけ観察すれば、口径が81cm～120cm・底径101cm～160cmで深さ50cm台を中心とするものが数量的にもっとも多いということになる。

## ② 断面形態 (第48・49図)

ピットは一般に断面形態によってフラスコ型やピーカー型と呼ばれているが、これらの形態分類を床面に対する壁面の角度で表現してみた。その結果を集計したのが第48図Bである。更に、規模(口径・底径・深さ)と壁の角度を一体化したのが第48図～第49図である。まず単純に角度だけみれば、床面に対して直角より内傾するピットが全体の69%を占めており、ほぼ直角のピットが5%・外傾するピットが26%である。更に細かくみると、70°以下7基12%・71°～95°が約79%・96°以上が約9%である。内傾するピットの総数40基の内71°～89°の範囲に30基が入り、内傾するピットの約80%を占めている。外傾するピットの総数15基の内91°～95°の範囲に10基入り、外傾するピットの約66.6%を占める。壁の内傾する型はいわゆるフラスコ型といわれるピットとなるのであるが、この様な考え方で観察する限りにおいては、本遺跡の場合にはフラスコ型のピットが主体をなし、その中でも壁の角度が床面に対して71°～89°内傾するピットが多い。壁の内傾が弱い86°～89°のものが10基と比較的多いが、この型は、本来は内傾角度が強く、フラスコ型であったものが腐絶後に埋没する過程で壁が崩壊している可能性が考えられる。しかし、調査中や埋土土層の観察によって、この様な現象は明確にされていない。床面に対して壁がほぼ直立する型を一般的にピーカー型と呼んでいるが、本遺跡の場合には壁が直立するのは3基5.1%と非常に少ない。やや外傾するピットを含めると(91°～95°)13基22.4%を占める。それよりも外傾するピットは5基8.6%だけである。以上の結果に規模を加味して考えると、口径81cm～120cm・底径101cm～160cm・深さ50cm台で壁が71°～89°内傾するピットと、ほぼ同規模で91°～95°で外傾するピットが多い。

## c 時期 (一覧表3)

本遺跡で検出された65基のピットの内15基から遺物が出土している。しかし、底面に密着する様な状態で出土したのはH-24ピットとI-45ピットの2基にすぎない。他のピットの出土

状態は全て埋土内より出土したものである。出土した遺物は土師器と縄文土器であるが、前述のH-24ピットとI-45ピット以外はいずれも小破片が多く、口縁部文様帯を含む破片はわずか7片にすぎない。この様な状況の中で本遺跡検出の65基全てを時期区分することは不可能である。従って、ここでは遺物を出土したピットについて時期決定をし、集落との関連について若干触れるに止めたい。

縄文土器を出土したピットは14基であるが、出土した土器では中期末葉（大木9～10式か）と晩期前葉（大洞B・B-C式）に細分される。中期末葉の土器を出土したのはK-10ピットとM-13ピットであるが、規模をみると、K-10ピットは開口部径約90cm・底面径約150cm・深さ約74cmで、平面形が円形・断面形はフラスコ型である。M-13ピットは開口部径約150cm・底面径約210cm・深さ105cmで、平面形が円形・断面形がフラスコ型と後者の方が規模が大きい。壁の内傾角度では前者が68°・後者75°と本遺跡で検出されたピットの中では内傾角度の強い方である。晩期の土器を出土したのは①H-24ピット、②I-45ピット、③N-23ピット、④L-24ピットの4基で、他に粗製土器ではあるが、晩期特有の細かい原体で縄文を施した土器片が出土したピットが1基（⑤H-9ピット）ある。①の規模は開口部径142cm・底面径173cm・深さ83cmで、平面形は円形・断面形はフラスコ型である。②は開口部径116cm・底面径118cm・深さ81cmの規模で、平面形は円形・断面形はピーカー型である。③は開口部径125cm・底面径156cm・深さ55cmで、平面形は円形・断面形はフラスコ型である。④の規模は開口部径85cm・底面径120cm・深さ80cmで、平面型は円形・断面形はフラスコ型である。壁の内傾角度はI-45ピットはほぼ直立であるが、他のH-24ピット・L-24ピット・N-23ピットは74°～80°の範囲に分布している。先の中期末葉の土器片を出土したピットの壁内傾角度と比較すると、晩期前葉の土器片を出土したピットの方が内傾する程度が弱い。しかし、時期を明確にできるピットの数が少ないことからそれが全体的な傾向としていえるかは定かでない。出土した晩期に属する土器を比較してみると、H-24ピット・I-45ピット・L-24ピットは大洞B式に併行する土器を出土し、N-23ピットは大洞B式に併行する土器と大洞B-C式に併行する土器が混在している。これは晩期前葉に属するピットは大洞B式併行期とB-C式併行期の2期に細分される可能性を含んでいることを表わしている。しかし、芹沢長介氏説の様に大洞B式とB-C式が同時期とすればこれらのピットは同時存在ということも考えられる。ここでは一応前記の細分される可能性があることを採る。

土師器を出土したピットはJ-37ピットだけである。このピットは開口部径約200cm・底面径約190cm・深さ70cmの規模で、平面形は円形・断面形はピーカー型を呈する。出土した土師器は変形土師器の体部下半～底部にかけての破片である。土師の成形や調整の技法はJ-31住居址出土の変形土師器のそれと全く同様であり、時間差を認める様な根拠はない。埋土の堆積状況

は、平安時代住居址やJ-35ピットと同様で、埋土最上層には黒ボク質の黒色土が堆積している。この様なことから、J-37ピットは本遺跡の平安時代集落を構成する遺構として理解することができ、埋土の近似・位置・規模・形態から考えるとJ-35ピットもまた平安時代に属する可能性が高い。

以上の様なことから、本遺跡で検出された65基のピットは縄文時代は中期末葉と晩期前葉そして平安時代にそれぞれ属するピットが混在している。しかし、遺物を出土しないピットは形態や規模・埋土等から時期を決定づけることは困難である。本遺跡で検出された集落と、検出されたピットの関連は、集落の一部を構成するピットと、集落を伴わないでピットだけで遺構群を構成するピットがありそうである。すなわち、縄文中期末葉と縄文晩期大洞B式併行期のピットがこれに相当する。現在までの調査例によれば、集落と一体化して存在するピット群と集落と離れた位置でピット群だけで構成する例のあることが知られている。本遺跡例もこれと合致する。

#### d. 性格

ピットと一般的に呼ばれる遺構は貯蔵穴や墓塚として理解されている場合が多いが、本遺跡で検出されたピットは、それを性格づける様な資料は得られていない。ここでは、形態の比較や遺物の出土状況から、若干の問題を呈示するに止めた。

縄文時代晩期の墓塚が検出されている遺跡は、岩手県内では盛岡市市内遺跡<sup>①</sup>が知られているが、それらの例では平面形が楕円形や小判形を呈するものが主体で、円形を呈するピットは少ない。深さも比較的浅く、断面形は鍋底型を呈しフラスコ型を呈するものはない。岩手県以外では、秋田県湯出野遺跡<sup>②</sup>・藤株遺跡<sup>③</sup>・柏子所遺跡<sup>④</sup>・梨の木塚遺跡<sup>⑤</sup>、青森県は川遺跡<sup>⑥</sup>・源常平遺跡<sup>⑦</sup>・泉山遺跡<sup>⑧</sup>、北海道札狩遺跡<sup>⑨</sup>等多くの遺跡が知られている。これらの報告書によれば、形態的には平面形が楕円形で比較的浅く、断面形は鍋底型を呈する場合が多く、平面形が円形を呈する例は少ない。円形を呈していても深さや断面形は楕円形のそれと共通している。少なくとも断面形がフラスコ型を呈する例は極く稀で、この例はフラスコ型ピットを墓塚として転用している場合が多い。また、墓塚に伴う遺物は多くの場合、小型土器や耳飾・丸玉等の装飾品類が出土している。本遺跡での遺物出土状況は、H-24ピットでは壁際に粗製深鉢とやや大きめの台付鉢が各1ヶ体並んで倒立して出土し、いずれも口縁部を底面に密着させており、土器内部は中空であった。I-40ピットは底面ほぼ中央に粗製深鉢が1ヶ体横転し、土圧で潰れていた。この様な出土状態は筆者等が調査した盛岡市紫Ⅲ遺跡<sup>⑩</sup>のH-4ピットやG-6ピットの出土状態に近似している。紫Ⅲ遺跡<sup>⑩</sup>のH-4ピットでは大型深鉢に台付鉢の底部を差し込んだ状態で横転していた。G-6ピットの場合は底面ほぼ中央に大型深鉢が横転して土圧で潰れていた。この様な出土状態は何を意味するものであろうか。少なくとも本遺跡の様な

土器が墓塚に伴う例はあまりない。おそらく、ピット内で貯蔵具として使用されていたのが、ピットが廃棄される際に土器もそのまま放置されたものであろうと考えられる。

以上の様に一般に墓塚として認識されているピットは平面形が楕円形を呈する場合が多く、その中に円形を呈するピットが混在する。また、本遺跡の様な土器の出土状況を前記の様に理解することが妥当とするならば、本遺跡で検出されたピットは墓塚としてよりも、貯蔵穴としての性格が強いものと考えることができよう。

## (2) 遺物

本遺跡より出土した遺物は土器・石器・鉄器・土製品に分類されるが、いずれも量的に少ないのであまり細分しなかった。ここでは若干の説明を加えるに止めたい。

### 1) 土器

本遺跡では縄文式土器と土師器が出土している。この状況から、分類基準は第1群縄文式土器・第2群土師器の2群構成とした。

#### [第1群 縄文式土器] (第50図)

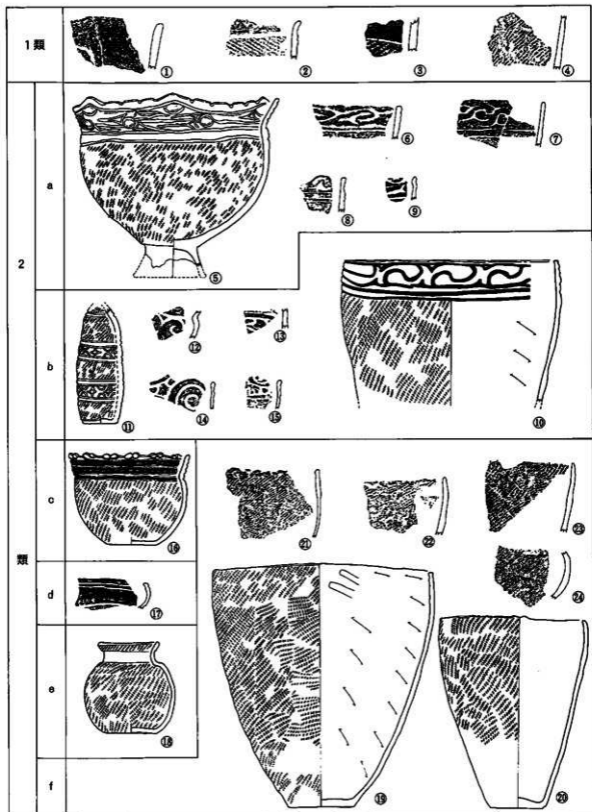
本群には中期と晩期に属する土器が含まれ、後者は更に細分される。

1類——中期と考えられる土器である。完形土器は出土せず、4ヶの破片が出土している。①と②は口縁部破片であり、器表全面に縄文が施文された後、太い沈線で区画し、区画外の縄文を磨消している。③は体部破片であるが施文技法は同様である。④は明確でないが、細い沈線で区画し一部磨消していることから本類に入れた。地文の施文には原体L・R・R Lともに使用され、回転方向はタテ・ヨコにもある。口縁部は直立するものと小さく外反するものがあり、口唇は丸味をもつ。いずれも胎土に砂粒が多く混入しており、焼成は比較的良好である。色調は橙色～黒褐色までみられる。器形は深鉢であろう。

2類——本類には晩期に属する土器を一括した。更に細分される。

a : ここには三叉文の施文された土器を入れた。⑤はほぼ完形であるが、⑥～⑨は破片である。どの土器も沈線によって三叉文を施し、施文部位には縄文が付けされていない。その中でも⑤は玉抱三叉文である。口縁部は直立するもの、小さく外反するもの、内弯気味のものがあり、波状を呈するものが多い。体部縄文は原体L・R・R Lが使用され、回転方向はヨコである。胎土には砂粒が混合しているが、焼成は良好である。色調は褐色や黒褐色を呈する。器形は台付鉢と鉢である。

b : X字文と羊歯状文等の施文された土器である。⑩は完形であるが、⑪・⑫～⑮は破片である。全て沈線によって施文される。⑩～⑫はX字文であるが⑩は若干退化している。⑬～⑮は羊歯状文と考えられるものである。口縁部は直立するもの、外反するもの、内弯



第50圖 土器分類圖1



するものがみられ、平縁と波状縁がある。口唇は丸味をもつものと平坦なものがある。体部縄文は原体LRが使用されヨコ方向に回転している。胎土は⑭が砂粒を多く混入しやや粗いが、他の⑮～⑰は緻密で良く精選されている。焼成は良好である。色調は黒褐色である。器形は鉢・注口土器・筒形土器がある。

- c : 口縁部に連続する刻み目をもつものである。⑱が相当する。口縁部に5条の平行沈線を回し、沈線と沈線の間を刻み目としている。口唇には2ヶ1組の小突起が付され反折している。胎土は良く精選され、焼成は良い。色調は暗褐色を呈している。器形は小型の鉢である。
- d : 無文研磨土器とおもわれるものである。⑲が相当する。口唇に平行する2条の沈線と頸部に1条の沈線が付される以外は全くの無文で、良く研磨された光沢をもっている。胎土は良く精選され、焼成も良好である。色調は黒褐色である。注口土器の口縁部であろう。
- e : 頸部の縄文が磨消されるもので、⑳が相当する。体部縄文は原体LRでヨコ方向に回転している。胎土は良く精選され、焼成は良い。色調は褐色を呈する。器形は壺である。
- f : 縄文だけが施文された粗製土器を一括した。㉑・㉒は完形土器であるが、㉓～㉔は破片である。体部縄文は全て原体LRが使用され、ヨコ方向に回転している。口縁部は若干内弯し、更に、㉕・㉖は波状を呈する。㉗以外の胎土は砂粒が混合し粗い。㉘は砂粒の混合も少なく、精選されている。焼成は全体的にあまり良くない。色調は橙色や褐色が多い。器形は深鉢や鉢・壺である。

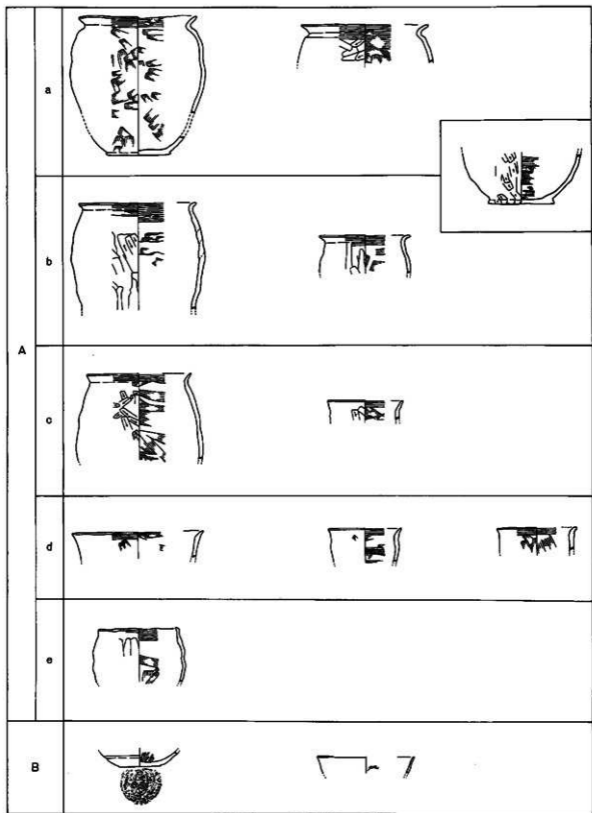
#### 〔第2群 土師器〕 (第51図)

本群には土師器を一括したが、器種が変形土器と坏形土器だけであり、個体数も少ない。

#### A——変形土器

いずれもロクロ不使用成形である。完形土器は1ヶ体のみで、他は破片である。頸部と口縁部の形態によってa～eまで細分した。

- a : 頸部で軽い段をもって強くくびれ、口縁部が「く」の字状に強く外折するものである。胴部中央が膨らみ、最大径を胴部にもつ。底部の周囲が突出し、底面は木葉痕がある。調整技法は、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面がヘラナデまたはヘラケズリ・内面はヘラナデであるが全体的に粗雑である。胎土には多くの粗砂が混入し、全体的に粗い。色調は橙色や褐色を呈し、焼成は良い。口縁部径が18cm～19.5cmと本遺跡出土の中では大型に類する。しかし、器高が口縁部に対して1.19と低い。
- b : 頸部に段がないとともに、くびれも弱く、外弯する短い口縁部がつくものである。
- aと同じく胴部に最大径をもつ。底部は欠損のため不明である。調整技法は、口縁部内外面ともヨコナデ、胴部は外面ヘラケズリ・内面ヘラナデで、全体的に粗雑である。この型



第51圖 土器分類圖2

態には口縁部径が18cm位と14cm位の2種類がある。

- c : 頸部に段がないとともに、bよりくびれも弱く、口縁部は先細りし「く」の字状に外反する。体部に最大径をもつものと口縁にもつものがある。底部は欠損のため不明である。調整技法は、口縁部内外面ともヨコナデのものと同内面だけヨコナデのものがある。胴部外面はヘラケズリ・内面はヘラナデである。全体的に粗雑な作りである。口縁部径が16cm位のものと同12cm位の2種類がある。
- d : 頸部に段がないとともに、くびれもほとんどない。頸部内側が若干肥厚し、口縁部は内そぎされ、先細りしながら軽く外反する。口縁部に最大径をもつ。調整技法は、口縁部内外面ヨコナデのものと同内面のみヨコナデのものがあり、体部は内外面ともヘラナデである。全体的に粗雑である。口縁部径が20cm位のものと同12cm位の2種類がある。
- e : 口縁部が頸部よりほぼ直立するものである。胴部に最大径をもつ。調整技法は、口縁部内外面ともヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ・内面ヘラナデである。粗雑である。

#### B———環形土器

本遺跡では2点の出土である。いずれもロクロ成形で、底部の残存する1点は糸切り底無調整である。2点とも内面ミガキ後黒色処理が施されている。

#### 2) 石器

本遺跡より出土した石器は総数で10点と非常に少ない。出土状況も縄文時代に属する遺構に伴って出土した場合と、そうでない場合があった。従って若干の説明を加えてまとめたい。種類と出土点数は次の様である。

- |        |    |            |    |         |    |
|--------|----|------------|----|---------|----|
| a. 石 鏃 | 1点 | b. 不定形剥片石器 | 4点 | c. 石製円板 | 2点 |
| d. 凹み石 | 1点 | e. 石 棒     | 1点 | f. 砥 石  | 1点 |
- a. 石 鏃———G-24住居址より1点出土している。基部と先端部を若干欠損しているが、両面に剝離調整を加えた入念な作りである。平面・断面ともに菱形を呈する。
- b. 不定形剥片石器———G-24住居址2点・J-24ピット1点・N-23ピット1点の4点が出土している。これらの石器には側縁に簡略な片面剝離調整を加えたものや、特別な加工痕をもたずに使用中に刃こぼれした痕跡をもつものが含まれる。
- c. 石製円板———N-35住居址より2点出土した。円形を呈する扁平な礫の周囲を敲打剝離したものである。
- d. 凹み石———I-18ピットより1点出土している。やや長目の円礫を使用している。
- e. 石 棒———粗掘り中に1点出土した。先端部を欠損しているが、断面形が楕円形を呈し、棒状を示す。
- f. 砥 石———G-24住居址床面より1点出土している。硬砂岩を利用したもので、使用面

を2面にもつ。なお、本住居址は平安時代に属し、鉄製刀子が出土している。

### 3) 鉄器

鉄器はG-24住居址床面より出土した刀子1点のみである。長さ14.5cm・巾は基部で1.5cm・厚さ5mmの細長い鉄板状を呈している。棟は平らで、切先に向って先細りとなっている。基部に目釘穴はなく、糸巻状の痕跡を残している。

### 4) 土製品

ここで土製品としたのは、J-31住居址のカマド内支脚として使用されていた輪羽口と、N-23ピット出土の土偶の一部とおもわれる破片である。

### 5) 出土土器の時期

#### 1) 第1群土器

1類——本類は磨消縄文手法によって施文されることを特徴とした土器であり、この特徴から、縄文中期末葉に位置づけられるものと考えられ、大木式土器の編年では大木9式か10式に併行するであろう。しかし、小破片である為に特定できかねる。

2類——本類はいわゆる亀ヶ岡式土器特有の文様が施文された土器で縄文晩期に位置づけられる。ここでは大洞式土器の編年を援用したい。aは三叉文をその特徴としていることから大洞B式に併行するものであろう。⑨は口縁にヒネリ状の小突起をもつことから若干新しい要素である。bはX状文と羊歯状文を特徴としていることから大洞B-C式に位置づけられるであろう。cは口縁部に刻み目帯をもつものであり、bと同じく大洞B-C式に併行するであろう。dは大洞式土器ではB式やB-C式に多くみられる要素であることから、この土器もほぼこの時期に併行するものであろう。eは頸部の縄文を磨消した小型の壺形土器であるが、大洞C<sub>1</sub>式に近い要素をもっている。fは単独で時期を決定することは困難である。しかし、⑬・⑭は⑤と共伴して出土したことから、大洞B式に併行する粗製深鉢形土器である。⑯は胎土・体部縄文・器形・口縁部に小突起をもつ等⑬・⑭に非常に近似した要素があり、ほぼこの時期に併行するものであろう。

次に共伴関係について考えてみよう。⑨・⑩・⑬・⑭がN-35住居址より共伴して出土している。⑩・⑬はほぼ大洞B-C式に併行するものである。⑨・⑭は⑩より若干新しい要素をもって、特に⑬は器形や頸部の磨消等は明らかに⑩より新しい要素である。しかし、これらが共伴していることは同時併行するものであり、ここでは広義の意味で大洞B-C式に併行し、その中でも新しい時期に位置づけられるものと理解しておきたい。

#### 2) 第2群土器

本群は土師器を一括しているが、これらの土器は全て住居址に共伴したものである。まずAとした変形土器であるが、頸部や口縁部の形態に若干の変化が認められることから、

a～eまでに細分したが、成形や調整の技法はほぼ共通している。すなわち、成形にはいづれもロクロを使用していない。明瞭ではないが輪積みか粘土紐巻き上げによって成形された後、器外面はヘラケズリ調整している。器内面はヘラケズリ後ヘラナデ調整である。口縁部は内外面ともヨコナデが施されている。全体的に粗雑な作りである。器形には口縁部径16cm～20cm位と口縁部径11cm～14cm位の二種類あるが、器高の変化は不明である。

Bとした坏形土器はわずかに2ヶ体の出土である。その中の1ヶ体はロクロ使用成形で底部切り離しは糸切りである。再調整は認められない。内面は黒色処理が施されている。別の個体は口縁部の小破片であるので定かでないが、ロクロ使用成形で内面は黒色処理されている。本遺跡の様な組合せを示す遺跡は、県北部で多くの例が知られる。本遺跡例は中でも二戸郡一戸町子守A遺跡の例に近似している。子守A遺跡の例は、土師器変形土器はロクロ不使用成形・坏形土器はロクロ使用成形である。変形土器の器面調整はヘラケズリである。坏形土器は糸切底無調整で内面は黒色処理されている。この遺跡では変形土器に長胴・中壺・小壺の三種類あり、更に須恵器の短頸壺が共存している。以上のことから考えると、器種や器形に若干差がみられるものの、ほぼ共通した要素を内包していることがわかる。本遺跡の調査で絶対年代を知る資料は得られていないが、住居址埋土内に成層化された十和田a降下火山灰層が観察されないことから、十和田a降下火山灰が降下した後の遺構であることが知られる。しかし、埋土内には微量ではあるが、小ブロック状の十和田a降下火山灰の混入が確認されている。これらの状況を総合して考えると、二戸郡一戸町内出土土師器の編年を援用すればIVb期に近似しているといえるだろう。一戸町の報告では該期に10世紀後半以降という年代を与えているが、筆者もこの意見に従っておく。

(高橋与右エ門)

## VI さ い ご に

本遺跡の調査によって次の様な成果が得られた。

1. 平安時代住居址3棟・縄文時代晩期住居址3棟・住居址状遺構2基・ピット65基が検出された。
2. 検出遺構の検討から、平安時代と縄文晩期には集落が営まれていたことが判明した。
3. ピットは平安時代と縄文時代に属し、縄文時代は更に中期末葉と晩期前葉に属するものに細分され、集落に伴うピットと集落に伴わないピットが混在している。ピットは貯蔵穴としての性格が強いであろう。
4. 出土遺物は、縄文式土器・土師器・石器・鉄器・土製品が出土し、量的には非常に少な

い。

以上のことが明らかとなったが、断定できる結論に至らなかった問題も多くあった。この責任は全て筆者に帰結するものである。しかし、本遺跡の所在する九戸地域は、縄文時代や古代についての資料は断片的に知られているのみであり、それらの一端を知る手懸りとは成り得るものと確信している。昭和55年度より東北縦貫自動車道関連として多くの遺跡が発掘調査されており、それらの調査成果が本遺跡の調査で明らかにできなかった問題について補って呉れるであろう。

最後に、本遺跡の調査で種々御協力や助言を頂いた関係各位に心からの謝意を表して、本報告書の終りとしたい。

(高橋与右衛門)

① 草壁俊一	「岩手町大森どじの石遺跡」	Arias Liberales No1	岩手大学教務部	1966
② 草壁俊一	「磐の神遺跡」	日本考古学年報 13	日本考古学協会	昭和55年度
③ 上野 猛 本宮隆雄	「磐前遺跡発掘調査報告」		雫石町教育委員会	昭和49年度
④ 遠藤昭博	「長瀬川遺跡」	岩手県縄文センター文化財調査報告書第22集	(財)岩手県縄文文化財センター	昭和56年
⑤ 関井謙吉	「野田遺跡」	岩手県縄文センター文化財調査報告書第11集	(財)岩手県縄文文化財センター	昭和56年
⑥	「臥屋敷遺跡」			
⑦	「道成田遺跡」	調査略報(55年度)	岩手県縄文センター文化財調査報告書第15集	(財)岩手県縄文文化財センター 昭和56年
⑧	「曲田遺跡」			
⑨ 高橋文夫 佐藤 隆	「松尾村長倉里遺跡」	岩手県縄文センター文化財調査報告書第20集	(財)岩手県縄文文化財センター	昭和56年
⑩	「河内遺跡」	調査略報(55年度)	岩手県縄文センター文化財調査報告書第15集	(財)岩手県縄文文化財センター 昭和56年
⑪	「安物原遺跡」			
⑫	前掲注④に同じ			
⑬ 草壁俊一	「中平・上野内調査報告」		野田村教育委員会	昭和45年
⑭	未報告、筆者が調査し登高した。			
⑮	「上の山遺跡」	調査略報(56年度)	岩手県縄文センター文化財調査報告書第15集	(財)岩手県縄文文化財センター 昭和56年
⑯ 芹沢長介	「石器時代の日本」		集地書館	
⑰	前掲注④に同じ			
⑱ 島山康司他	「高倉野遺跡発掘調査報告」	秋田県文化財調査報告書第55集	秋田県教育委員会	1975
⑲ 高橋敏時他	「藤枝遺跡発掘調査報告書」	秋田県文化財調査報告書第45集	秋田県教育委員会	1961
⑳ 大沢久蔵平	「胎子権具塚第2・3次発掘調査報告書」	秋田県文化財調査報告書第8集	秋田県教育委員会	昭和41年
㉑ 島山康司他	「釜の本塚発掘発掘調査報告書」	秋田県文化財調査報告書第45集	秋田県教育委員会	1975
㉒ 滝沢幸兵衛 春日信典他	「足川中流遺跡・地内発掘調査報告」		八戸市教育委員会	1978
㉓	「沼倉平遺跡発掘調査報告書」	青森県縄文文化財調査報告書第39集	青森県教育委員会	昭和55年度
㉔	「黒山遺跡調査報告書」	青森県縄文文化財調査報告書第31集	青森県教育委員会	昭和50年度
㉕ 野村孝 他	「礼野」		北海道拓殖記念館	1976
㉖ 高橋正之	「第一遺跡」	岩手県縄文センター文化財調査報告書第13集	(財)岩手県縄文文化財センター	昭和55年
㉗ 高田新雄	「一戸バイパス周辺縄文文化財調査報告書」		一戸町教育委員会	昭和56年



A. 遠景



B. 遺跡全景

PL. 1

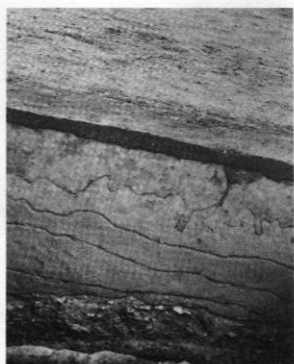


A. 調査風景

東より



①



②

B. 基本層序

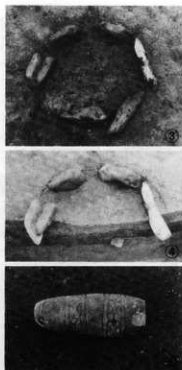
PL. 2



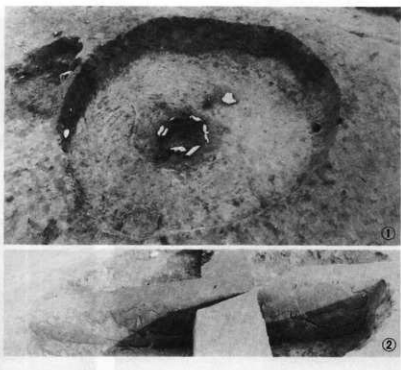


A. G-24住居址

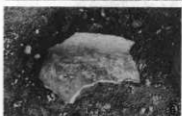
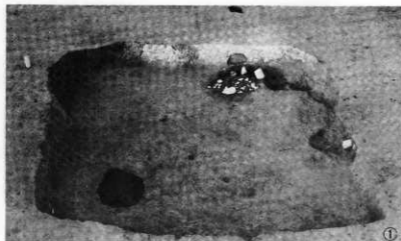
① 完掘 ② 土層断面 ③ カマド ④ ⑤ 遺物出土状況



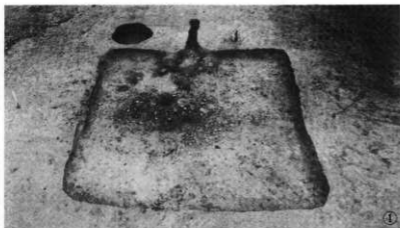
B. H-9住居址 ① 完掘 ② 土層断面 ③ 炉 ④ 炉断面 ⑤ 遺物出土状況



PL. 3



J-31住居址 ① 完掘 ② 検出状況 ③ 土層断面  
④ カマド ⑤ ~ ⑧ 遺物出土状況



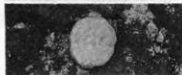
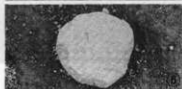
①



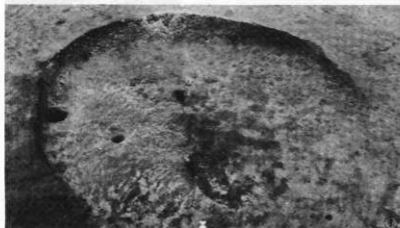
③



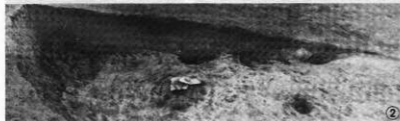
②



A. J-40住居址 ① 完掘 ② 土層断面 ③ カマド

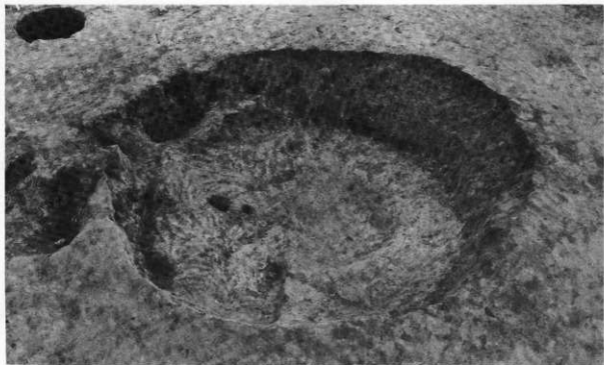


①

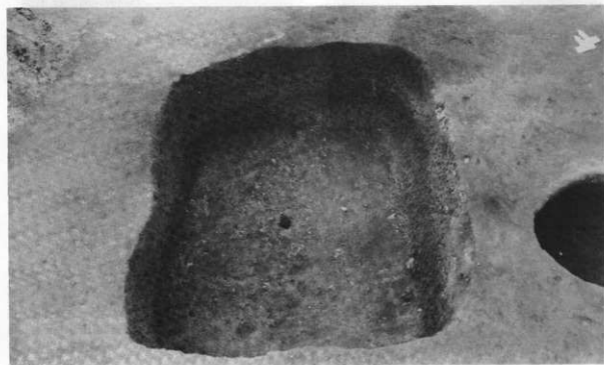


②

B. N-35住居址 ① 完掘 ② 土層断面 ③ ~ ⑦ 遺物出土状況

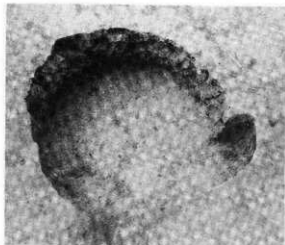


A. H-11住居址状遺構

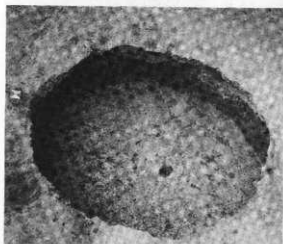
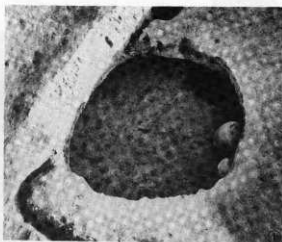


B. N-19住居址状遺構

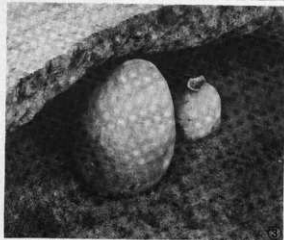
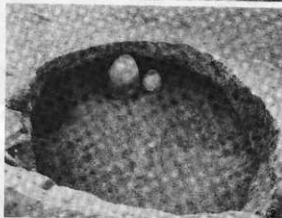
PL. 6



A. H-7ビット

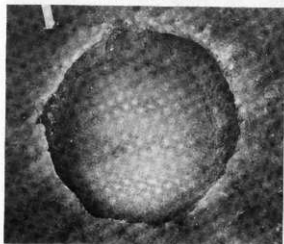


B. H-9ビット



① 完掘 ② 南より ③ 遺物出土状況

D. H-24ビット

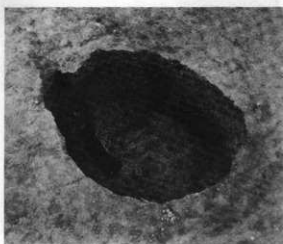


C. H-18ビット

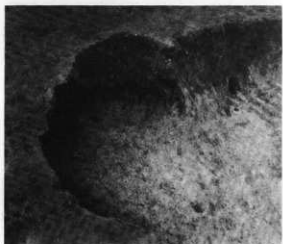
PL. 7 土坑



A. I-8ピット



D. I-15ピット



B. I-10ピット-1



E. I-16ピット

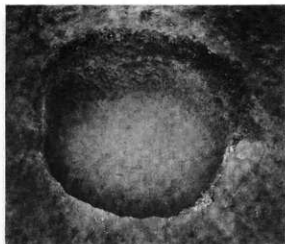


C. I-10ピットの2

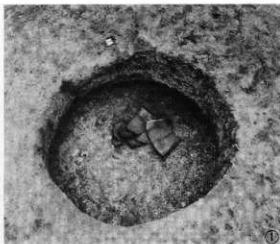


①完掘 ②土層断面

PL. 8 土坑



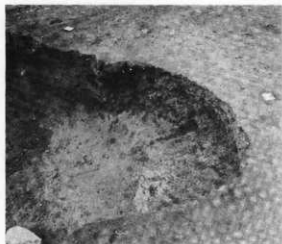
A. I-17ピット



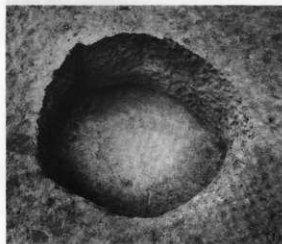
C. I-45ピット

① 完掘 ② 土層断面 ③ 遺物出土状況

B. I-18-1ピット ① 完掘 ② 土層断面



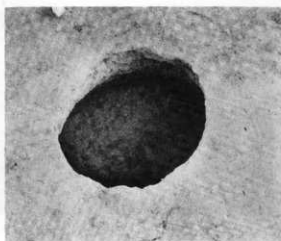
A. I-18-2ピット



B. J-4ピット ① 完掘 ② 土層断面



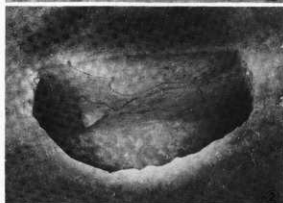
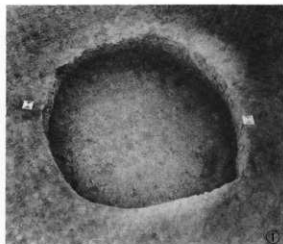
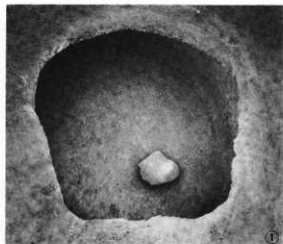
C. J-8ピット ① 完掘 ② 土層断面



D. J-11ピット

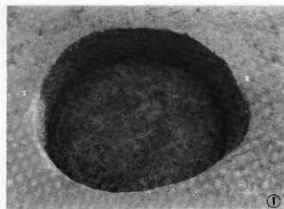
PL. 10土坑



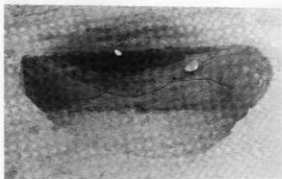


A. J-23ピット ① 完掘 ② 土層断面

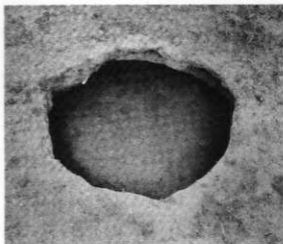
B. J-24ピット ① 完掘 ② 土層断面



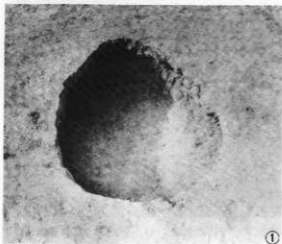
C. J-35ピット ① 完掘 ② 土層断面



A. J-37ピット



C. K-10ピット



①



②

B. K-6ピット ① 完掘 ② 土層断面



D. K-14ピット



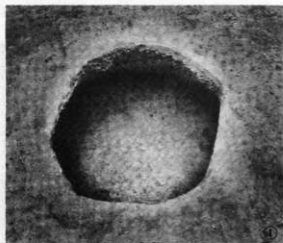
E. K-15・16ピット

PL. 12土坑



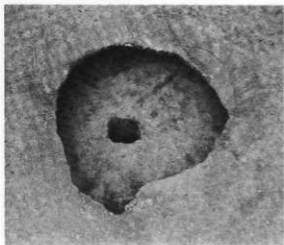
A. K-15ピット ① 完掘 ② 土層断面

B. K-16ピット ① 完掘 ② 土層断面

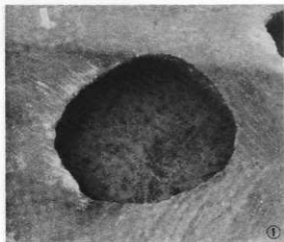


C. K-17ピット ① 完掘 ② 土層断面

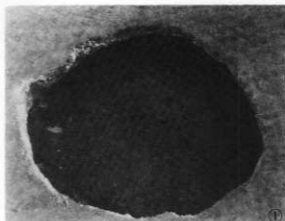
PL. 13. 土坑



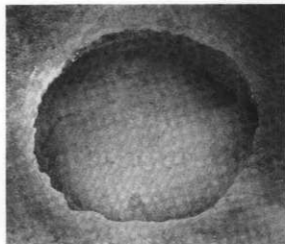
A. K-19ピット



B. K-21ピット ① 完掘 ② 土層断面

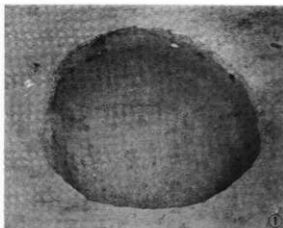


C. K-22ピット ① 完掘 ② 土層断面

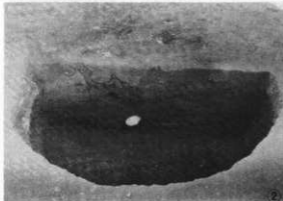


D. K-24ピット

PL. 14土坑

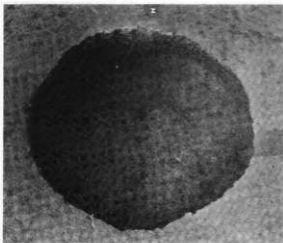


①



②

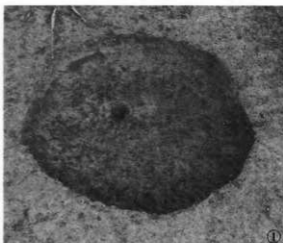
A. K-25ピット ① 完掘 ② 土層断面



B. K-34ピット



C. K-44ピット



①



②

D. L-11ピット ① 完掘 ② 土層断面

PL. 15土坑

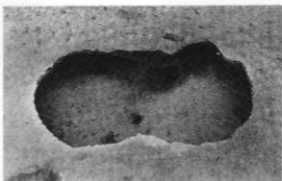


①

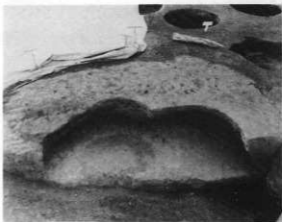


②

A. L-13ビット ① 完掘 ② 土層断面



C. L-13・14ビット



D. L-19-1ビット

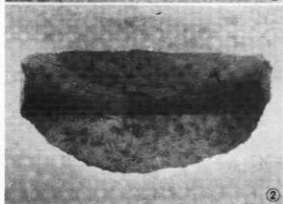
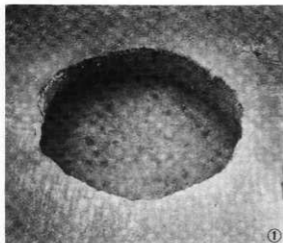


B. L-14ビット

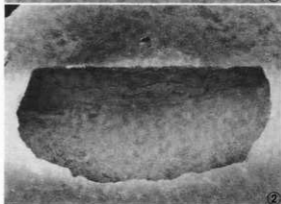
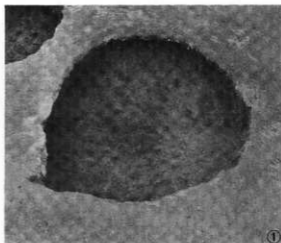


E. L-19-2ビット

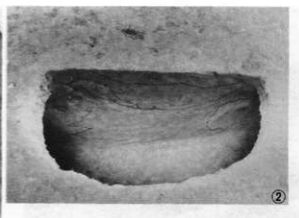
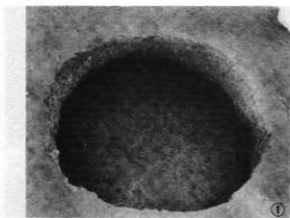
PL. 16土坑



A. L-20ピット ① 完掘 ② 土層断面

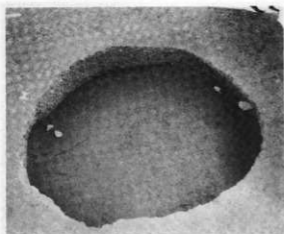


B. L-21ピット ① 完掘 ② 土層断面

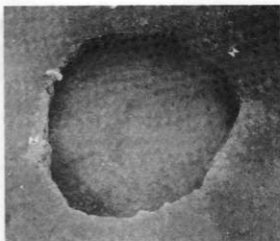


C. L-23ピット ① 完掘 ② 土層断面

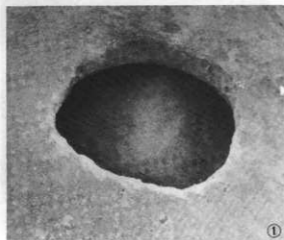
PL. 17土坑



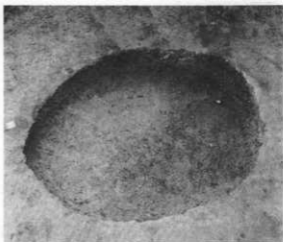
A. L-24ピット



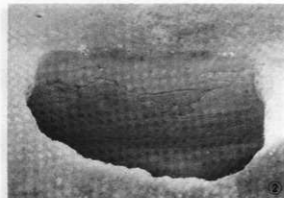
C. L-31ピット



①



D. L-36ピット



②

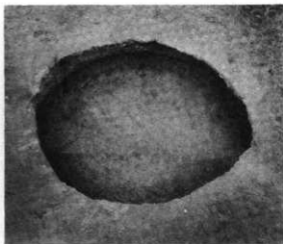
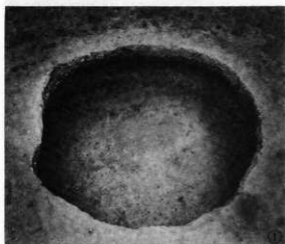


E. L-42ピット

B. L-26ピット ① 完掘 ② 土層断面

PL. 18土坑





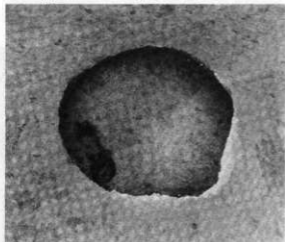
C. M-20ピット



A. M-13ピット ① 完掘 ② 土層断面



D. M-21ピット

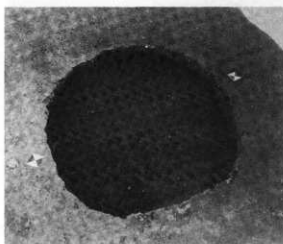
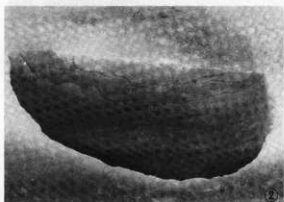
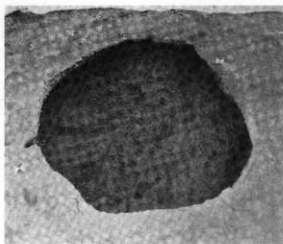
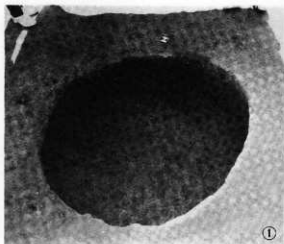


B. M-16ピット

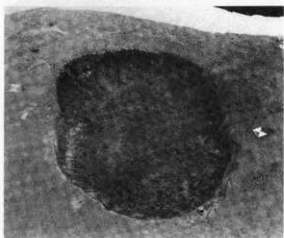


E. M-23ピット

PL. 19土坑



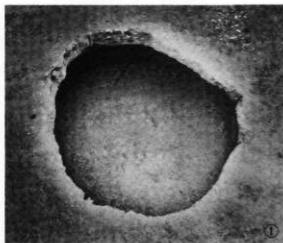
① 完掘 ② 土層断面  
A. M-25ピット



B. M-26ピット

E. N-18ピット

PL. 20土坑

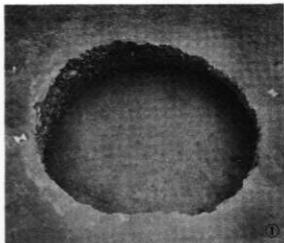


①

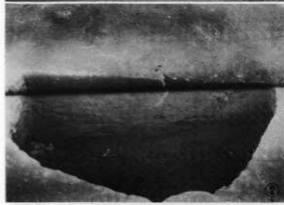


②

① 完掘 ② 土層断面  
A. N-14ピット

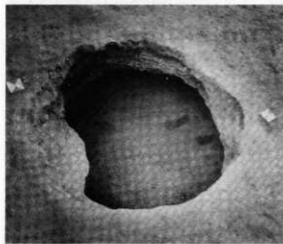


①

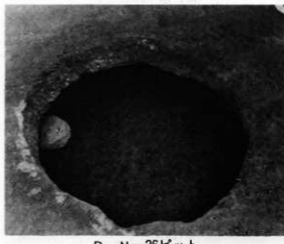


②

① 完掘 ② 土層断面  
B. N-22ピット

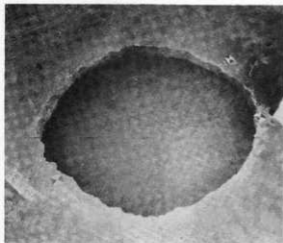


C. N-23ピット

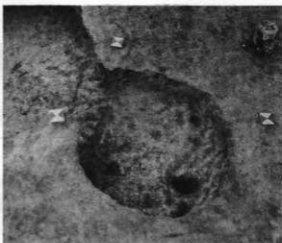


D. N-26ピット

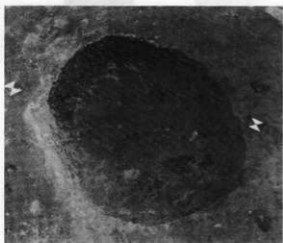
PL. 21 土坑



A. O-27ピット

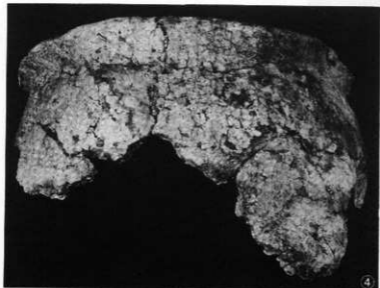
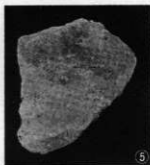
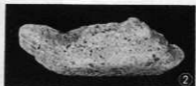
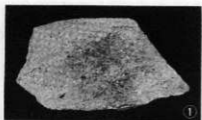


B. O-28ピット

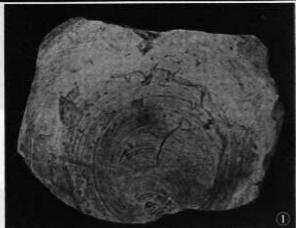
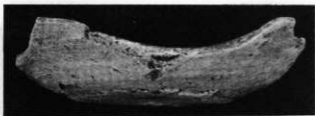


C. O-30ピット

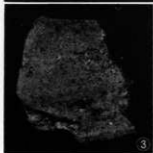
PL. 22 土坑



④ G-24住居址出土遺物

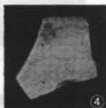
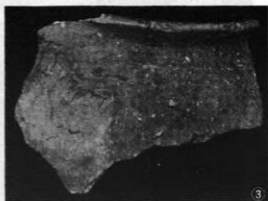
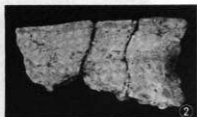


① ⑤ G-24住居址出土遺物



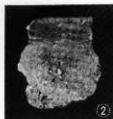
② ③ ④ H-9住居址出土遺物

PL. 24



J-31住居址出土遺物

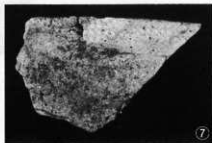
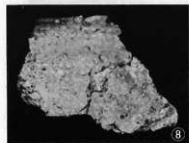
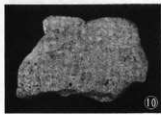
PL. 25



①～⑤ J-31住居址出土遺物



⑥～⑩ J-40住居址出土遺物







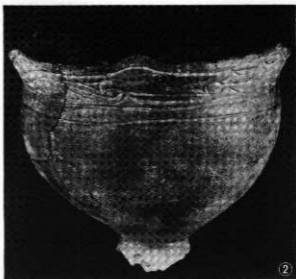
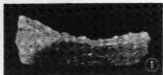
① ~ ③ N-35住居址出土遺物



⑤ N-19住居址状遺構出土遺物

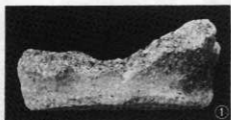
④ H-11住居址状遺構出土遺物



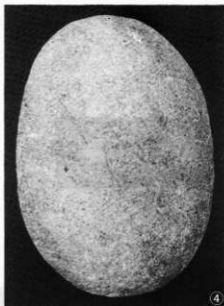


H-24ビット出土遺物

PL. 28



① ④ I-18-2ピット出土遺物



④



② I-45ピット出土遺物



⑤

⑤ J-24ピット出土遺物



③

③ J-37ピット出土遺物



① K-24ピット出土遺物



④ ⑤ 炭化物  
⑥ くるみ

② ~ ⑥ N-23ピット出土遺物



⑦ 表採

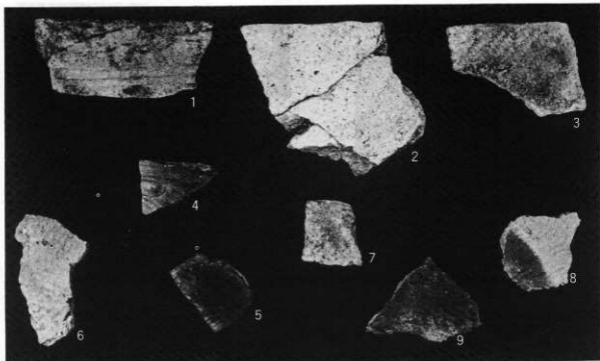


⑧ 粗掘

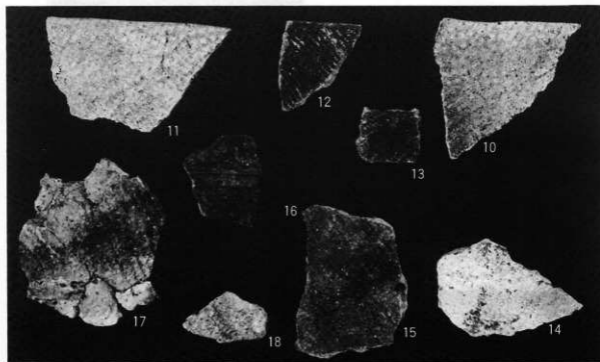


⑨ 表採

PL. 30

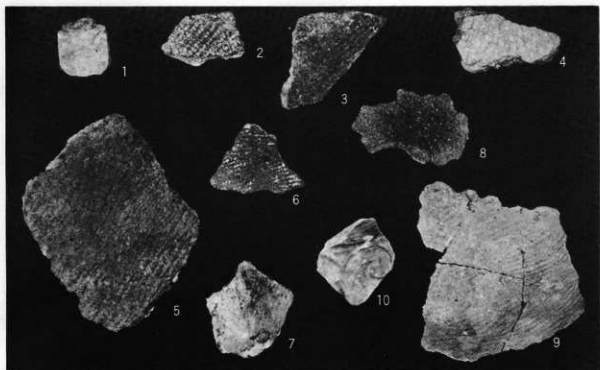


A. 拓本土器片 約 1/2

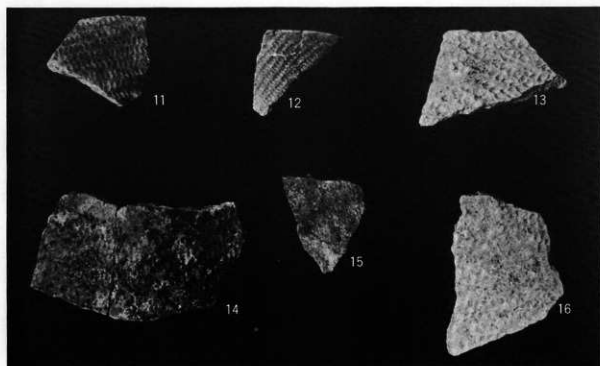


B. 拓本土器片 約 1/2

PL. 31

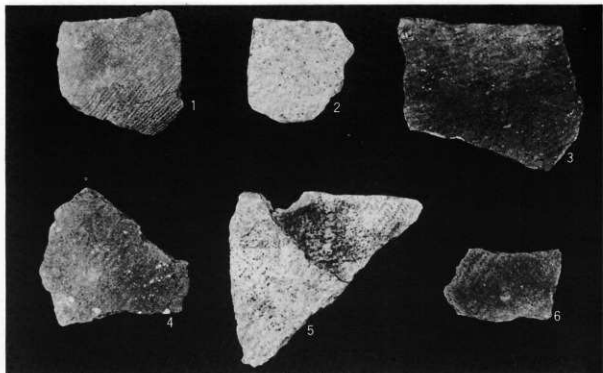


A. 拓本土器片 約1/2

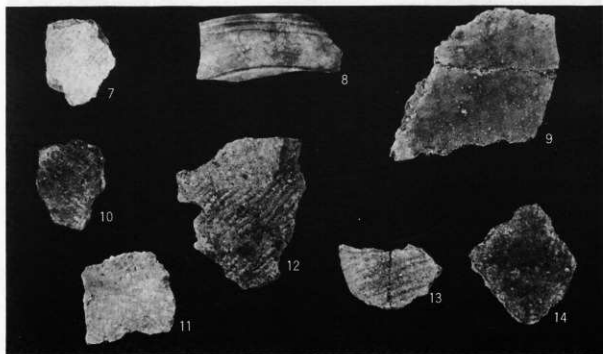


B. 拓本土器片 約1/2

PL. 32

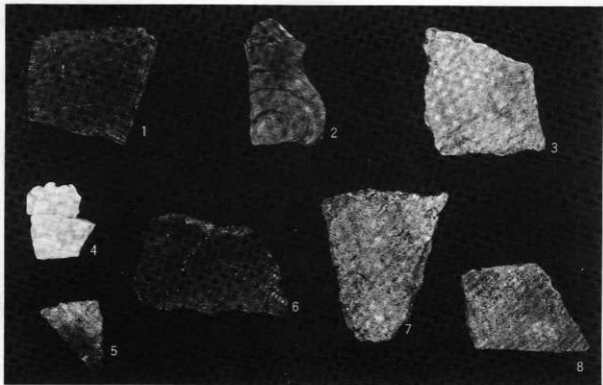


A. 拓本土器片 約1/2

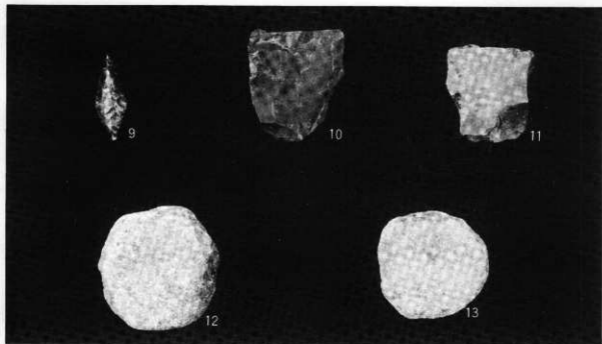


B. 拓本土器片 約1/2

PL. 33



A. 拓本土器片 約1/2



B. 拓本土器片 約1/2

PL. 34



岩手県埋文センター文化財調査報告書第26集

## 川向Ⅲ遺跡発掘調査報告書

畑地帯総合土地改良事業関連発掘調査

(昭和55年度)

印刷 昭和57年1月25日

発行 昭和57年1月30日

発行 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡第11地割字高屋敷

☎ (0196) (38)-9001

印刷 河北印刷株式会社

〒020 岩手県盛岡市本町通2丁目8番7号

TEL. (0196) 23-4256

© 岩手県埋文センター 1982